

茨城県行方市

# 国神遺跡

発掘調査報告書



平成18年3月

行方市教育委員会  
行方市遺跡調査会

茨城県行方市

# 国神遺跡

発掘調査報告書

平成18年3月

行方市教育委員会

行方市遺跡調査会



土坑SK22・テボ（埋納）遺構出土遺物

## 序

行方市は、茨城県の東南部にあり、平成17年9月2日に麻生町・北浦町・玉造町が合併して誕生しました。人口約4万人、面積は、166.33㎢となります。

北は鉾田市と小美玉市、南は潮来市に隣接し、東は北浦、西は霞ヶ浦（西浦）があります。地形的には東西の湖岸部分は低地、内陸部は標高30m前後の丘陵台地（行方台地）により形成されています。霞ヶ浦沿岸部は概ねなだらかで連続的な稜線であるのに対し、北浦側は比較的起伏に富んでいます。

温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、古くより人々の生活の場となり、幾多の歴史が残されています。現在でも、その人々の痕跡として、貝塚や古墳・城跡などの遺跡が市内に数多く点在しております。

この度、行方市行方字国神1830、1833番地を中心として、市道（麻）1-7号線道路改良工事が計画されました。計画地内には、周知の遺跡である国神遺跡が所在しており、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査による記録保存をすることになりました。

今回の調査の結果、縄文中期や奈良・平安時代の集落跡、さらには、中世の城郭の遺構が確認され、同じく縄文土器や土師器、須恵器が出土するなど大きな成果が得られ、本報告書にまとめ上げられましたこと厚く御礼申し上げます。

本報告書に際しまして、発掘調査並びに報告書の執筆を担当いただきました関係調査員の方々には心より敬意を表し、この報告書が郷土をより深く知る上で、広く一般の方々にも活用いただければ幸いです。

最後に、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所をはじめ、地元の関係各位の深いご理解とご協力に感謝の意を表すとともに、調査に携わっていただいた方々に心から御礼申し上げます。

平成18年3月

行方市教育委員会

教育長 平山一巳

## 例 言

1. 本書は、行方市が計画していた市道（麻）1-7号線道路改良工事に伴い、行方市遺跡調査会により行われた発掘調査報告書である。

2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

本調査 国神遺跡（くにかみ）行方市行方字国神1830, 1833番地に所在する。

3. 行方市の依頼を受けて行方市遺跡調査会が茨城県教育委員会および行方市教育委員会の指導のもとに発掘調査を下記の期間に実施した。

発掘調査 平成17年12月1日～平成18年2月10日

4. 行方市遺跡調査会組織は下記の通りである。

会 長	平山 一巳	(行方市教育委員会教育長)
副 会 長	風岡 亨夫	(行方市文化財保護審議会副会長)
理 事	茂木 岩夫	(行方市文化財保護審議会委員)
	植田 敏雄	(行方市文化財保護審議会委員)
	羽生 均	(行方市文化財保護審議会委員)
	宮内 俊雄	(行方市文化財保護審議会委員)
	宮内 利夫	(行方市文化財保護審議会委員)
	高野 顕	(行方市文化財保護審議会委員)
	吉田 秀邦	(行方市文化財保護審議会委員)
	伊勢山雅昭	(行方市文化財保護審議会委員)
	宮崎 幸男	(行方市文化財保護審議会委員)
	大場 浩一	(行方市文化財保護審議会委員)
	小沼 政雄	(行方市文化財保護審議会委員)
	海老澤幸雄	(行方市文化財保護審議会委員)
監 事	木戸 俊文	(行方市文化財保護審議会委員)
	高橋 量光	(行方市文化財保護審議会委員)
事 務 局 長	山野 洋治	(生涯学習課長)
事 務 局 員	原田かつ子	(生涯学習課 社会教育係長)
	横瀬 浩司	(生涯学習課 主幹)
	高田 和明	(生涯学習課 主任)
	磯山 智也	(生涯学習課 主事)
調査担当者	小川 和博	日本考古学協会員 (有) 日考研茨城
	大淵 淳志	日本考古学協会員 (有) 日考研茨城
調 査 員	遠藤 啓子	(有) 日考研茨城
調 査 員	大淵由紀子	(有) 日考研茨城

5. 整理作業は、行方市教育委員会の指導のもとに、小川和博・大淵淳志・遠藤啓子・大淵由紀子・大野美佳・小川知美・大淵勇（以上（有）日考研茨城）が実施した。

6. 本書の編集執筆は、小川和博・大淵淳志が行った。

7. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

8. 本書中の色調に関する表現は新版標準色色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

9. 遺構および遺物の写真撮影は大淵淳志・小川和博が行った。

10. 記録および出土遺物は、行方市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)  
茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、(財)茨城県教育財団、行方市建設課、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、赤井博之、比毛君男
12. 各調査には以下の者が参加した。  
海老原龍生、小野豊、佐賀剛 佐賀実 中島秀夫 中島貞雄 中島トミ子 下山豊二 谷中昌 露久保三郎 友部政夫
13. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。  
竪穴住居跡：S I 掘立柱建物跡：S B 溝状遺構：S D 土坑：S K  
竪穴状遺構他：S X 攪乱：K

## 本文目次

序	
例言	
第I章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過とその概要	1
第3節 調査日誌	2
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	4
第5節 基本層序	9
第II章 検出された遺構と遺物	10
第1節 概要	10
第2節 縄文時代	10
1) 竪穴住居跡	10
2) 土坑	11
第3節 奈良・平安時代	51
1) 竪穴住居跡	51
第4節 中・近世	55
1) 土坑	55
2) 竪穴状遺構	58
3) 溝状遺構	67
4) 掘立柱建物跡	68
5) 段切り状遺構	69
第5節 遺構外出土遺物	73
第III章 まとめ	76
付章 国神遺跡出土遺物観察表	

## 挿図目次

- 第1図 グリッド配置図
- 第2図 調査地位位置図
- 第3図 国神遺跡の周辺の遺跡
- 第4図 遺構配置図
- 第5図 基本順序
- 第6図 住居跡SI01実測図および出土遺物
- 第7図 土坑SK01・02・04・05・06・69実測図
- 第8図 土坑SK07・09・10・12実測図
- 第9図 土坑SK14・15・16・21・28・29実測図
- 第10図 土坑SK18・19・20・22実測図
- 第11図 土坑SK23・25・26・27実測図
- 第12図 土坑SK30・31・37・40・41・43・44・45・46・51・76(1)実測図
- 第13図 土坑SK41・43・44・45・46・51・76(2)・42・47・88・48・65・81(1)実測図
- 第14図 土坑SK48・65(2)・49・50・54・60・62・70(1)、SX05実測図
- 第15図 土坑SK49・50・60・70(2)・52・53・55・56・58・59・62・63実測図
- 第16図 土坑SK64・66・67・68・71・72実測図
- 第17図 土坑SK78・79・80・82・86・87実測図
- 第18図 土坑SK01・02・04・05・06・07出土遺物
- 第19図 土坑SK09・10・12・15出土遺物
- 第20図 土坑SK14・16出土遺物
- 第21図 土坑SK18・20・22・23出土遺物
- 第22図 土坑SK25・26・27・28・29出土遺物
- 第23図 土坑SK30・31・40(1)出土遺物
- 第24図 土坑SK40(2)・41・43出土遺物
- 第25図 土坑SK44・45・46・48・49出土遺物
- 第26図 土坑SK50・52・53・54出土遺物
- 第27図 土坑SK56出土遺物
- 第28図 土坑SK60・63・64出土遺物
- 第29図 土坑SK65・66・67出土遺物
- 第30図 土坑SK68・69・78出土遺物
- 第31図 土坑SK71・79出土遺物
- 第32図 土坑SK80・81出土遺物
- 第33図 土坑SK82・87・88出土遺物
- 第34図 住居跡SI02実測図
- 第35図 住居跡SI02出土遺物
- 第36図 住居跡SI03実測図
- 第37図 住居跡SI03出土遺物
- 第38図 住居跡SI04実測図
- 第39図 住居跡SI04カマド実測図
- 第40図 住居跡SI04出土遺物
- 第41図 土坑SK03・08・11・13・17・24・32・33・34実測図
- 第42図 土坑SK35・36・38・39・55・57・58実測図

- 第43図 土坑SK61・73・74・75・77・89実測図  
 第44図 土坑SK83・84・85・90・91・92実測図  
 第45図 竪穴状遺構SX01・02・03実測図  
 第46図 竪穴状遺構SX04・05・06実測図  
 第47図 溝SD01・02・03実測図  
 第48図 土坑SK32・36・86、竪穴状遺構SX01・03・05、溝SD01・03出土遺物  
 第49図 掘立柱建物跡SB01・02・03実測図(1)  
 第50図 掘立柱建物跡SB02・03実測図(2)  
 第51図 段切り状遺構SX07実測図(1)  
 第52図 段切り状遺構SX07実測図(2)  
 第53図 掘立柱建物跡SB02出土遺物及び段切り状遺構SX07出土遺物  
 第54図 国神遺跡調査区出土遺物  
 第55図 国神遺跡出土の縄文中期土器  
 第56図 土坑SK73馬骨出土状況

## 写真図版目次

- PL.1 1.国神遺跡遠景 2.調査区全景(中央区西から) 3.調査区全景(南区南から)  
 PL.2 1.調査区全景(西区北から) 2.調査区全景(北西区北から) 3.旧石器文化層試掘グリッド  
 PL.3 1.SK01・06 2.SK05 3.SK07 4.SK09 5.SK10 6.SK12 7.SK14  
 8.SK15・16  
 PL.4 1.SK18 2.SK19 3.SK20 4~6.SK22 7・8.SK25  
 PL.5 1.SK23 2.SK26 3.SK29 4.SK30・SK37 5・6.SK31 7・8.SK52  
 PL.6 1.SK67 2~4.SK81 5・6.SI02 7.SI03 8.SI04  
 PL.7 1.SK32 2.SK73 3・4.SK37 5.SK08 6.SK17 7.SK39 8.SK85  
 PL.8 1.SX01 2.SX02 3.SX03 4.SX06 5・6.段切り状遺構 7.掘立柱建物跡SB01・02  
 8.溝状遺構SD01・03  
 PL.9 1.SK07出土土器 2.SK09出土土器 3.SK14出土土器  
 PL.10 1.SK22出土土器 2.SK30出土土器 3.SK31出土土器  
 PL.11 1.SK40(1~3)・SK41(4~7) 2.SK49出土土器 3. SK52出土土器  
 PL.12 1.SK55出土土器 2.SK56出土土器 3.SK67出土土器  
 PL.13 1.SK69出土土器 2.SK78出土土器 3.SK79出土土器  
 PL.14 1.SK80出土土器 2.SK81出土土器 3.SK82出土土器  
 PL.15 1.土坑出土土器片断 2.土坑出土石器類 3.土坑その他出土石器類  
 PL.16 1.住居跡SI02 2~10.住居跡SI03 11・12.住居跡SI04  
 PL.17 1.住居跡SI04 2.掘立柱建物跡SB02出土遺物 3.土坑・竪穴状遺構出土遺物  
 (1.SK36 2.SK86 3~7.SX01 8.SX03 9~12.SX05)  
 PL.18 1.掘立柱建物跡SB02 2.段切り状遺構SX07出土遺物 3.SK32出土銭貨

## 第I章 序章

### 第1節 調査に至る経緯

平成17年9月、行方市市道（麻）1-7号線道路改良工事にかかる埋蔵文化財の照会があり、工事予定地内には周知の遺跡である国神遺跡が所在することから、平成17年10月11日～13日に工事予定地にかかる遺跡の範囲を確認するため、2本のトレンチを設定し確認調査を行った。調査の結果、工事予定地の内500mの範囲で遺構が確認された。

その後、埋蔵文化財の取り扱いについて行方市建設課と協議を進め、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、(有)日考研茨城に委託し、平成17年12月1日～12月28日の予定で発掘調査の実施に至った。

(行方市教育委員会)

### 第2節 調査経過とその概要

**試掘調査** 試掘調査は、遺跡の内容、範囲および工事による遺跡の影響度合いや調査範囲の確定を目的とし、開発予定地である対象区域全体において実施した。まず平成17年9月行方市教育委員会より試掘調査の依頼を受けた有限会社日考研茨城は早速現場調査を行い、10月11日道路工事計画にほぼ平行するように北側と中央部で2本の試掘溝（トレンチ）を設定した。北側を第1トレンチとし、幅1.5m、長さ48mを試掘し、中央を第2トレンチと命名し、幅1.5m、長さ35mを試掘した。その結果、第1トレンチでは竪穴住居跡1軒、土坑2基および性格不明土坑1基を検出する。竪穴住居跡および土坑はいずれも縄文時代中期後半の加曾利E1式土器が出土し、性格不明土坑からは遺物の出土はなかった。また第2トレンチでは遺構の検出はなかったものの、縄文時代中期・加曾利E式土器と平安時代の土師器・甕の口縁部破片が出土した。したがって、工事予定地全体は少なくとも縄文時代と古代の集落跡であり、しかも多くの遺構が存在することが推定され、全面調査とすることとなった。

(小川和博)

**本調査** 上記の試掘調査の成果に基づき、道路建設予定地全面が本調査区域に決定された。さらに西側臨の旧道からの進入路道路建設部分についても全面発掘となった。まず調査は平成17年12月1日から開始し、翌年の平成18年2月10日まで実施した。調査面積は当初の500mに加え、進入路部分の調査区を合わせると最終的に1,250m<sup>2</sup>となった。

調査区の設定は全面調査となったものの、座標基準から10m×10mのグリッドを東西7区画、南北5区画を設定し、西から東に向かってA・B・C…、北から南に向かって1・2・3…とし、1A、2Bと呼称した。

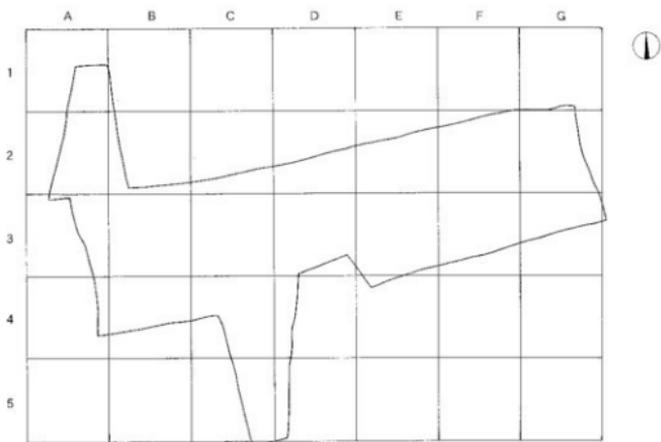
調査の結果、対象地全体に遺構が展開し、縄文時代から近世後期にわたり、遺構・遺物が検出された。まず縄文時代の遺構は竪穴住居跡1軒、土坑62基が調査された。調査区中央から西側に集中し、とくに北西部は土坑が密集し、縄文集落の中心が調査区の北側に展開していることが推定された。また奈良・平安時代は3軒の竪穴住居跡が確認され、縄文時代と同様、北西側に集中していた。さらに、調査区東側の緩傾斜部には13世紀から16世紀前半の中世集落が検出された。掘立柱建物跡3棟、地下式坑6基、竪坑を含む土坑30基が集中しており、東側は中世における段切造成が施されていることが判明した。また調査区南東側では中世後期および近世の溝跡が3条確認された。なお調査結果については下記のとおりである。

検出された遺構	縄文時代竪穴住居跡	1軒
	土坑	62基
	奈良・平安時代竪穴住居跡	3棟

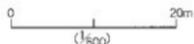
中世掘立柱建物跡	3棟
中世粘土貼土坑・地下式坑・堅穴状遺構	6基
土坑（墓坑含む）	30基
溝状遺構（中・近世）	3条

また各遺構から土器等の遺物も出土しているが、とくに縄文土坑からは多量の土器および石器が出土し、包含層からは縄文早期末葉の条痕文系土器が比較的多く出土している。また中世・近世遺構からも多くの遺物を検出できた。

(小川和博・大淵淳志)



第1図 グリッド配置図

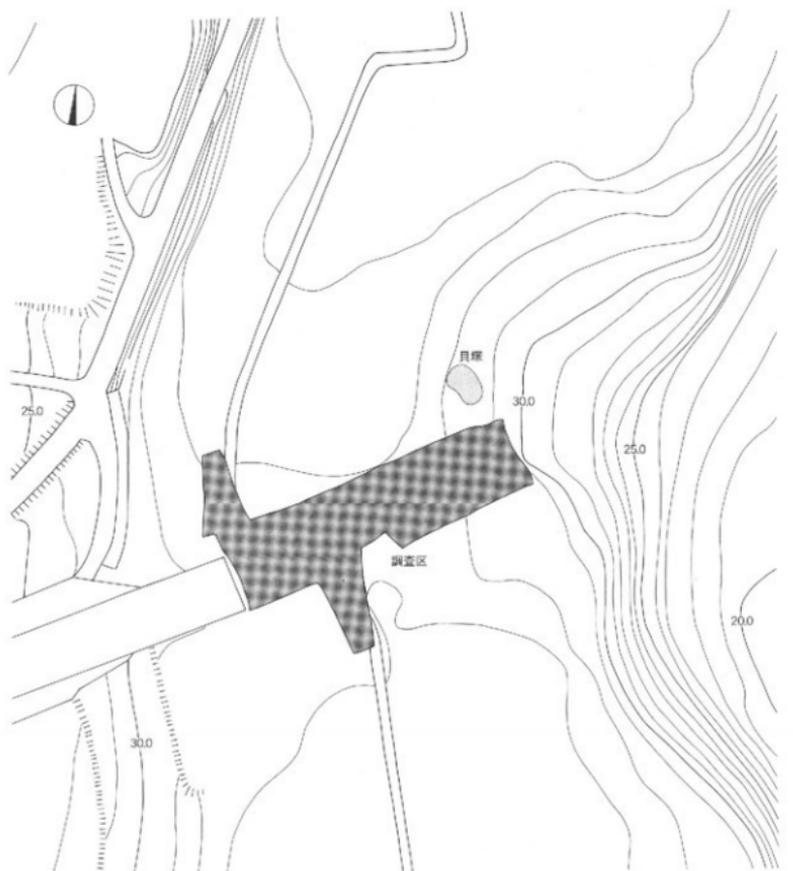


### 第3節 調査日誌（2005年12月1日～2006年2月21日）

- 12.01 国神遺跡本調査を開始する。重機による表土除去作業を始める。
- 12.02 重機による表土除去を継続し、終了する。
- 12.05 人力による調査区全体の精査作業、遺構検出作業を開始する。
- 12.06 遺構検出作業を継続する。
- 12.07 土坑調査(SK1～5)
- 12.08 土坑調査(SK6～)
- 12.09 土坑調査(SK15)
- 12.12 土坑調査(SK20)、写真撮影
- 12.13 掘立柱建物跡群、土坑平面図実測。
- 12.14 掘立柱建物跡群、土坑平面図実測。

- 12.15 掘立柱建物跡群、上坑平面図実測。写真撮影 (SX2・3、SK33~35)
- 12.16 掘立柱建物跡群、土坑平面図実測。
- 12.19 掘立柱建物跡群、上坑平面図、土坑調査終了。旧石器文化層確認グリッド設定。
- 12.20 土坑平面実測。
- 12.21 土坑写真撮影、平面実測。旧石器文化層確認深掘り調査。
- 12.22 旧石器文化層確認深掘り調査。拡張区表土層除去。
- 12.23 重機による表土層除去。
- 12.24 重機による表土層除去継続。
- 12.26 重機による表土層除去(東側)終了。
- 12.27 拡張区平面図。遺構調査(東側)。
- 1.5 掘立柱建物跡群平面図、全測図。
- 1.6 掘立柱建物跡群の調査。
- 1.11 掘立柱建物跡群の調査(東側)。
- 1.12 重機による表土層除去作業再開。遺構検出のため精査(北側)。遺構調査(土坑・住居跡)
- 1.13 表土層除去作業の継続。遺構検出精査継続。遺構調査(土坑、住居跡)。
- 1.16 表土層除去作業継続。土坑調査・平面図作成。
- 1.17 表土層除去作業継続。上坑平面図、セクション実測。
- 1.18 表土層除去作業を終了する。遺構瓶状遺構の調査。
- 1.19 東側全測平面図。土坑平面図作成。
- 1.20 東側全測平面図。土坑および溝状遺構の写真、実測 (SK69、SD2・3)
- 1.24 土坑調査の継続。
- 1.25 土坑・溝状遺構の調査 (SK71・72、SD1・3)
- 1.26 溝状遺構調査 (SD1・3)
- 1.27 上坑・溝状遺構平面図 (SD1・3、SK73~80)
- 1.28 東側全測図作成。
- 1.30 土坑・竪穴状遺構実測作業。
- 1.31 東側全景写真撮影、清掃。竪穴状遺構実測 (SX06)。
- 2.02 全測図、土坑、溝状遺構実測作業 (SK78~87、SD1・3)。
- 2.03 溝状遺構平面図実測作業 (SD1~3)
- 2.04 溝状遺構平面図作業。
- 2.06 溝状遺構平面図作成、清掃。
- 2.08 全景写真撮影。
- 2.09 全景写真撮影。
- 2.10 器材搬出。国神遺跡の現地作業を終了する。
- 2.16 新聞発表を行う。
- 2.18 現場説明会の為清掃。
- 2.19 午前清掃。現地説明会 (130名参加)
- 2.21 現場説明会 (行方小学校)

(大淵 淳志)



第2図 調査地位図

0 50m  
(1/2000)

#### 第4節 遺跡の概要と周辺の遺跡（第2・3図）

国神遺跡は、行方市大字行方国神1830,1833に所在する。ここは市街地の中心である旧麻生町の北側約7kmの台地上で、霞ヶ浦の東縁にあたる。付近は霞ヶ浦に注ぐ小河川より侵食を受け、数多くの樹枝状の複雑な地形が形成されており、いずれも広大な霞ヶ浦に向かって細長い舌状台地が延びている。これら台地上の平坦部にはほとんど全域に遺跡が確認されている。

ここ国神遺跡もそのひとつで、根崎地先から入り込む小規模な溝状を呈する開析谷の最奥部の西側にあたる。舌



071国神遺跡 015古原城跡 018公事塚古墳群 019於下貝塚 020西ノサキ遺跡 021堀之内貝塚 023堀之内遺跡 024小高城跡 027茶白山古墳群 030コシマキ山古墳群 032中城跡 034台館貝塚 037皇徳寺古墳群 038船子城跡 045歌ヶ崎古墳 053ケツツカ遺跡 056平遺跡 057藤井東中塚 058藤井馬頭観音塚 059嵐内遺跡 060カヂヤ遺跡 061寺山東遺跡 062中山東遺跡 063中山中央遺跡 064中山西遺跡 065寺山西遺跡 066三十分遺跡 067神の山遺跡 068内帯遺跡 069神前遺跡 070北銀塚 072岡平遺跡 073塚前塚 074上松南遺跡 075上松北遺跡 076上松東遺跡 077行方庚中塚 078原北遺跡 079原東遺跡 080枝輪山遺跡 081五雲谷貝塚 082高野遺跡 083六十塚遺跡 084井貝の庚中塚 085ピシコウ前遺跡 086西ノサキ東遺跡 087西ノサキ遺跡 088原歌貝塚 089ヤシノ原遺跡 090中城北遺跡 091中城南遺跡 092堀之内城跡 093堀井遺跡 094髭平遺跡 095原塚現台遺跡 096前山遺跡 098羽黒平遺跡 099内宿遺跡 100萬屋遺跡 101代祖遺跡 102仲内遺跡 103大神台遺跡 104日光台遺跡 105瀧木塚 106平台遺跡 114新地遺跡 115瓦地遺跡

第3図 国神遺跡の周辺の遺跡 (1 : 25, 000)

伏台地のため東西幅は狭く100m以下の馬の背状となっている。今回の市道1-7号線道路改良工事に伴い、調査された地点は周知遺跡のほぼ中央部にあたり、幅狭い支台がさらに活れ、東西幅がわずかに50~60mに狭まった区域で、東に向かって緩傾斜する谷頭部の南側にあたる台地平坦部である。

なお、調査区の北東隅に接した緩傾斜面にハマグリ・サルボウといった純縄文貝類を主体とする地点貝塚が検出された。貝殻のほか縄文時代中期の破片が出土しており、本遺跡と全く同じであることから一連のもので直接関連するものと判断した。ここは南側の開口部に向かって於下貝塚をはじめとする貝塚集中地域でもある。ここから現霧ヶ浦までは直線距離にして2kmで、標高は31~33m、台地直下の低地との比高差は約27mを測る。

旧麻生町内の遺跡は、現在まで300ヶ所以上が周知されている。いずれも霧ヶ浦沿岸および東側に位置する北浦沿岸に集中しているものの、西側の霧ヶ浦と東側の北浦間は最大で10kmにも満たないため、今後さらに分布調査等が進めばさらに増え、市内全面が遺跡となる可能性が高いほど、立地条件は恵まれている。現在周知されている遺跡の大半は標高30m前後の台地上で縄文時代の遺跡が多く、しかも貝塚の密集地帯である。さらに対岸の稲敷市側では低段丘上に製塩遺跡等が確認されていることから台地上のみとは限らず多種多様の遺跡の存在が推定される。

なお、本遺跡も霧ヶ浦に接した台地上にあるため、周辺には旧石器時代から中・近世の遺跡が数多く確認されている。しかし、全体的に発掘調査が活発な地域ではないため、遺跡の性格について十分把握されているわけではなく、表面採集による分布調査が主であり、今後調査の進捗状況によっては大きな変更を余儀なくされる場合がある。

しかし、分布調査でも目立つのが本遺跡と同様の縄文時代である。発掘調査されているものは少ないが、それでも本遺跡に関連する縄文遺跡のひとつに於下貝塚(019)がある。当貝塚は町道の改良工事に伴い平成元年9月から発掘調査されている。ちょうど本遺跡の南側600mに位置し、同じ谷筋に立地しており、本遺跡より開口部寄りである。5ヶ所の地点貝塚からなる谷頭型貝塚の典型である。時期は本遺跡よりやや新しく中期末葉の加曾貝E3・4式期を主体とする貝塚であるが、阿玉台Ⅱ式からⅣ式期の土器も出土しており、本遺跡との関連が注目される。さらに貝塚としては五堂谷貝塚(081)、尾敷貝塚(088)、西ノサキ東遺跡(086)、西ノサキ西遺跡(087)のほか、島並貝塚、大麻貝塚、大門貝塚等がよく知られている。また於下貝塚に連繋する羽根平遺跡(098)では多量の縄文土器が散布しており、同一遺跡として理解できる。

奈良・平安時代の遺跡も比較的多い。本調査地点から北50mには「郡の東に因つ神あり、此を泉の祇と号く」と『常陸風土記』に記された社とされる「国神の社」が鎮座している。一帯は土器器・須恵器の散布地としても知られており、これに関連する遺跡も神宿遺跡(069)、岡平遺跡(072)、上松北遺跡(075)、原北遺跡(078)等が存在する。

次の中世では、とくに城跡が目立つ。本遺跡の周囲には規模の比較的大きな城跡が確認されている。まず南側に10mもの土塁が残されている古屋城跡(015)がある。さらに反対の北側には中城跡(032)が、また霧ヶ浦に接して西側には船子城跡(038)が位置する。これら城跡に囲まれた中心地に本遺跡が立地する。本遺跡でも13世紀末葉から16世紀前半における掘立柱建物跡や地下式坑、竪穴状遺構や土坑等数多くの中世遺構の検出は周辺の城跡との関連でやはり注目されるであろう。

(小川和博)

#### 参考文献

- 飯島正彦1989「大字南の麻生堀之内貝塚発掘概報について」麻生の文化20所収  
 斉藤弘道1980「③於下貝塚 ④島並貝塚」『県内貝塚における動物遺存体の研究(3)』学術調査概報3所収  
 茨城県歴史館  
 茂木雅博他1992「於下貝塚発掘調査報告書」麻生町教育委員会

Tab.1 国神遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	備考	番号	遺跡名	種別	時代	備考
071	国神遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈平		075	上松北遺跡	包蔵地	縄文・奈平	
015	古屋城跡	城跡跡	中世		076	上松東遺跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳	
018	公事塚古墳群	古墳群	古墳	S63発掘調査	077	行方庚申塚	塚	路傍	
019	於下貝塚	貝塚	縄文		078	原北遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈平	
020	西ノサキ内遺跡	包蔵地	縄文		079	原東遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
021	堀之内貝塚	貝塚	縄文		080	椋師山遺跡	包蔵地	奈平	
023	堀之内遺跡	包蔵地	縄文		081	五雲谷貝塚	貝塚	縄文	
024	小高城跡	城跡跡	縄文・中世		082	高野遺跡	包蔵地	古墳	
027	茶臼山古墳群	古墳群	古墳		083	六十塚遺跡	包蔵地	縄文	
030	コシマキ山古墳群	古墳	古墳		084	井貝の庚申塚	塚群	近世	
032	中城跡	城跡跡	中世		085	ピンコウ前遺跡	包蔵地	縄文	
034	台府貝塚	貝塚	縄文		086	西ノサキ東遺跡	包蔵地・貝	縄文・奈平	
037	皇姑寺古墳群	古墳群	古墳		087	西ノサキ中遺跡	包蔵地・貝	縄文	
038	船子城跡	城跡跡	小世		088	屋敷貝塚	貝塚	縄文	
045	歌ッ崎古墳	古墳	古墳		089	サシキ番遺跡	包蔵地	縄文・中世	
053	クツツカ遺跡	城跡跡	中世	H8発掘調査	090	中城北遺跡	包蔵地	奈平	
056	平遺跡	包蔵地	縄文・古墳・中世		091	中城南遺跡	包蔵地	古墳・中世	
057	藤井庚申塚	供養塚	近世		092	堀之内城跡	城跡跡	中世	
058	藤井馬頭観音塚	供養塚	近世		093	橋井遺跡	包蔵地	中世	
059	寛内遺跡	包蔵地	弥生・古墳		094	杉平遺跡	包蔵地	奈平	
060	カヂキ遺跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳		095	原塚現台遺跡	包蔵地	奈平	
061	寺山東遺跡	包蔵地	縄文・古墳		096	前山遺跡	包蔵地	奈平	
062	中山東遺跡	包蔵地	縄文・弥生・古墳		098	羽黒平遺跡	包蔵地	縄文	
063	中山中央遺跡	包蔵地	縄文		099	内宿遺跡	包蔵地	古墳	
064	中山西遺跡	包蔵地	縄文		100	萬福遺跡	包蔵地	縄文・古墳・中世	
065	寺山西遺跡	包蔵地	古墳		101	代領遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
066	三十分遺跡	包蔵地	縄文・古墳		102	仲内遺跡	包蔵地	奈平	
067	神の山古墳	古墳	古墳		103	天神台遺跡	包蔵地	奈平	
068	内宿遺跡	包蔵地	縄文		104	日光台遺跡	包蔵地	縄文・近世	
069	神宿遺跡	包蔵地	縄文・奈平		105	産木塚	塚	近世	
070	尾塚塚	塚	近世		106	平台遺跡	包蔵地	奈平	
072	興平遺跡	包蔵地	縄文・奈平		114	新地遺跡	包蔵地	縄文	
073	稲荷塚	塚	近世		115	寛地遺跡	包蔵地	縄文・奈平	
074	上松南遺跡	包蔵地	奈平						

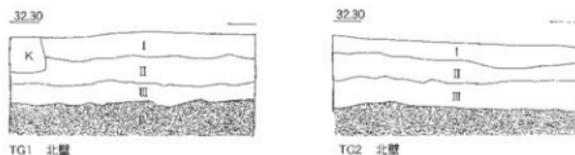


### 第5節 基本層序（第5図）

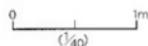
今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。遺構の希薄であった調査区中央に2×2mのグリッドを2カ所設定して調査したものの、あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出できなかった。また遺構確認面では、すでに漸移層、ソフトローム層は削平され、遺構確認調査段階では検出することができなかった。したがって粘土層までの深度は浅く、50cm前後を測るのみである。なお、これらは市内の資料蓄積としてのローム層調査であり、今後の調査の資料に供したい。以下第4図に示したような土層を確認した。

- I層 明褐色硬質ローム層(10YR7/6) 堅緻で締まりがある。スコリアを多く含む。
- II層 黄褐色硬質ローム層(10YR5/6) 堅緻で締まりがある。スコリアを僅かに含む。
- III層 にぶい黄橙色硬質ローム層(10YR6/4) 堅緻で締まりがある。スコリアを僅かに含む。
- IV層 灰白色粘土層(10YR8/2) 締りがある。常総粘土層である。

(小川和博)



第5図 基本層序



## 第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

### 第1節 概要 (第4図)

限られた調査面積であったが、縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の遺物が出土し、遺構として縄文時代の竪穴住居跡1軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒、縄文時代の土坑63基の他、中世に推定される竪立柱建物跡3棟、地下式坑を含む竪穴状遺構6基、土坑30基、中世から近世の溝状遺構3条が調査された。

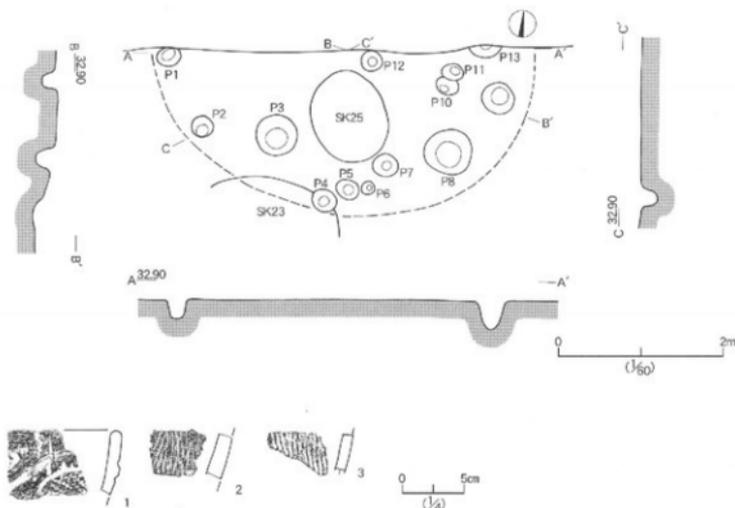
### 第2節 縄文時代

#### 1) 竪穴住居跡

##### 住居跡S 101 (第6図)

調査区の中央2D区に位置する。明確な掘り込みはなく、部分的な貼床部の検出により住居跡と判断した。また炉跡も確認できず、わずかに貼床部の延長上に柱穴と思われるビット群が巡回するのみである。しかし、貼床部の広がりや柱穴の配列からみて北側の未調査区域に半分以上が広がっていることが判明した。なお、住居跡南側に縄文土坑SK23と中世土坑SK24が重複しており、いずれも住居跡を切って構築されていた。柱穴は13本で、半円を描くように設置され、柱穴群の内側が明瞭な貼床部であった。立地する標高は32.41mを測る。現存する規模および平面形は確認面で南北軸2.01m、東西軸4.62mの円形を呈するものと推定される。床面は平坦で、柱穴内側のほぼ全面に硬化面が確認される。13本検出された柱穴は円形もしくは楕円形であるが、規模や配列にばらつきがみられる。覆土は全体的に浅いため、十分な観察ができないものの床面に密着して1層黒褐色土が覆っていた。

番号	規模	深さ	形状	番号	規模	深さ	形状
P 1	27×24	21.0	円形	P 2	26×24	19.0	円形



P3	51×50	27.0	円形	P4	40×29	29.0	円形
P5	27×21	14.0	楕円形	P6	16×16	8.0	円形
P7	30×26	10.0	楕円形	P8	56×56	70.0	円形
P9	40×37	15.0	円形	P10	28×20	18.0	楕円形
P11	25×19	29.0	楕円形	P12	25×24	17.0	円形
P13	38×(15)	36.0	円形				

遺物は床面上より縄文土器が3点検出された。採拓できるものをすべて図示した。いずれも小破片である。遺物は覆土一括の3点を図示した。1は口縁部破片で、低陸帯による楕円形区画文を配し、区画内に複節LRを施文する。2・3は深鉢の胴部破片。1は加曾利E1式でも新しい段階の土器である。

## 2) 土坑

### 土坑SK01 (第7・18図)

調査区西側2B区・3B区に位置する。本跡は土坑SK06を切り、北側が未調査区域に広がっている。確認面上面径219.0×217.0cm、底面径200.0×182.0cmの楕円形を呈する。深度最大31.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一層からなる自然堆積である。

遺物は覆土中より縄文土器の小片が出土している。1・2は同一個体の口縁部破片。キャリバー形の深鉢。陸帯区画上に縦位の刻み目を施し、陸帯に沿う平行沈線内も縦位の沈線文を充填させる。3は沈線の沿う楕円形区画内に陸帯モチーフと単節RL縄文を施文する。加曾利E1式。

### 土坑SK02 (第7・18図)

調査区西側3B区に位置する。本跡は北西側で土坑SK69を切っている。上面軸224.0×195.0cm、底面径205.0×174.0cmの楕円形を呈する。深度最大14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一からなる自然堆積である。

遺物は覆土から縄文土器が出土した。1～6は深鉢の破片である。1は縄文地文に陸帯によるモチーフをもつ。2・3は単節RLに綾杉文が垂下する。6は底部を伴う胴下半部の破片である。単節RL縄文。底部は網代痕が残置している。加曾利E1式。

### 土坑SK04 (第7・18図)

調査区西側3B区に位置する。確認面上面径245.0×202.0cm、底面径232.0×196.0cmの楕円形を呈する。深度最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がるものの、南壁辺は浅いため明瞭ではない。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが南東壁面に3ヶ所検出された。P1は径34.0×27.0cmの楕円形で、深さ37.0cm。P2は径28.0×26.0cmの円形で、深さ40.0cm、P3は径21.0×15.0cmの楕円形で、深さ54.0cm。である。

遺物は覆土から縄文土器と土器片鏝が1点出土した。1は深鉢の胴部破片。縄文地文に沈線による区画文。加曾利E1式。2は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

### 土坑SK05 (第7・18図)

調査区西側3B区に位置する。上面径291.0×272.0cm、底面径275.0×248.0cmの隅丸方形を呈する。深度最大40.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが北西壁面に1ヶ所検出された。P1は径30.0×22.0cmの楕円形で、深さ49.0cmである。覆土は3層からなる自然堆積層である。

遺物は覆土から縄文土器と土器片鏝1点、磨石1点が出土した。1は波状口縁を呈する深鉢の破片。肥厚する口縁縄文帯に二本一組の沈線が沿う阿玉台IV式。3・4は深鉢の底部破片。4は網代痕が残置している。5は土器片鏝。長軸に紐掛溝を有する。6は砂岩製の磨石の破片である。明瞭な作業面を確認できない。

### 土坑SK06 (第7・18図)

調査区西側2B区に位置する。本跡は東側でSK01によって切られ、北側が未調査区域に広がっている。確認面

上面径251.0×100.0cm、底面径223.0×87.0cmの円形を呈するものと推定される。深度最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は覆土から縄文土器が出土した。遺物は覆土一括の4点を図示した。1は口縁が強く外反する浅鉢。口縁下区画文に有節縄文が施され、区画内に斜行する有節縄文が垂下する。阿玉台I 1式。2は深鉢の口縁。隆帯による楕円形区画文。3は隆帯に沈線に沿う区画文で、区画内は縦位の条線により充填する。加曾利E 1式。

#### 土坑SK07 (第8・18図)

調査区西側3B・3C区に位置する。規模は上面径256.0×192.0cm、底面径230.0×170.0cmの楕円形を呈する。深度最大14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる円筒型。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが北壁面に1ヶ所検出された。P1は径38.0×35.0cmの円形で、深さ22.0cmである。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は覆土から縄文土器と磨石の破片1点が出土した。1は口唇部が肥厚する深鉢。口縁部は縄文地文に平行する隆帯が波状に貼付される。口唇部も凹帯が巡る。2は口縁部破片。縄文地文に貼付隆帯による楕円形区画文。3～5は深鉢胴部破片。縄文地文に沈線による3本一組の直行懸垂文が垂下する。なお、5は棒状区画文。6は底部の伴う胴部下半の破片。7は流紋岩製の磨石の破片。磨面は明瞭である。

#### 土坑SK09 (第8・19図)

調査区西側3C区に位置する。本跡は南壁が土坑SK10を切っている。上面径279.0×275.0cm、底面径281.0×272.0cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、検出面からの深度最大37.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが壁際に3ヶ所検出された。P1は径26.0×24.0cmの円形で、深さ28.0cm。P2は径29.0×26.0cmの円形で、深さ25.0cm。同じくP3は径11.0×11.0cmの円形で、深さ15.0cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が出土した。1は深鉢の口縁部破片。口唇部が肥厚し、沈線による横位の直行文と波状文が同向き、縄文施文の波状隆帯が貼付されている。2も深鉢の口縁部破片。沈線区画に縦位の沈線が施文される。3は大形把手。透孔に沿って凹帯による渦巻文が施される。4～7はキャリパー形の深鉢。4は口唇部が肥厚し、貼付波状隆帯が巡る。5は口縁部が平行する貼付隆帯で渦巻文に連続する横S字文と区画文。6は背割り隆帯による渦巻文を伴う区画文で、区画内に縦位の沈線が充填する。7は頸部に貼付隆帯による区画文で、胴部は平行沈線文が垂下する。8は貼付隆帯が垂下し、平行沈線によるモチーフが描出される。10は底部破片。

#### 土坑SK10 (第8・19図)

調査区西側3C区に位置する。本跡は北側で僅かにSK09に切られている。上面径262.0×250.0cm、底面径245.0×238.0cmの円形を呈する。検出面からの深度最大13.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが壁際に7ヶ所検出された。P1は径25.0×20.0cmの楕円形で、深さ27.0cm。P2は径20.0×20.0cmの円形で、深さ12.0cm。P3は径15.0×12.0cmの円形で、深さ13.0cm。P4は径21.0×16.0cmの楕円形で、深さ32.0cm。P5は径25.0×24.0cmの円形で、深さ18.0cm。P6は径36.0×33.0cmの円形で、深さ27.0cm。P7は径25.0×20.0cmの楕円形で、深さ25.0cmである。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。遺物は覆土一括の6点を図示した。1～4は同一個体である。口縁部はわずかに内湾し、肥厚する幅狭の縄文帯下に平行沈線と波状沈線が周回する。阿玉台IV式。5は深鉢胴端部の破片。隆帯が垂下する。6は底部破片。網代痕が残置している。

#### 土坑SK12 (第8・19図)

調査区西側2C区に位置する。北側の半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径172.0×115.0cm、底面径150.0×110.0cmの楕円形を呈するものと推定される。深度最大21.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径21.0×17.0cmの円形で、深さ25.0cm。P2は径63.0×45.0cmの円形で、深さ58.0cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は深鉢の胴部破片。縄文地文に瘤状の突起を有する。突起部を

起点に半截竹管状工具による平行沈線モチーフをもつ。中鉢式。

#### 土坑SK14 (第9・20図)

調査区中央3C区に位置する。上面径264.0×219.0cm、底面径277.0×222.0cmを測る円形を呈する。深度最大43.0cmで、壁面は内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径20.0×17.0cmの円形で、深さ8.0cm。P2は径20.0×15.0cmの楕円形で、深さ15.0cm。P3は径21.0×18.0cmの円形で、深さ13.0cm。P4は径12.0×10.0cmの円形で、深さ11.0cm。P5は径26.0×23.0cmの円形で、深さ67.0cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土から出土した。1は口縁部がくの字状に外反する深鉢。口縁部は無文帯とし、頸部に沈線による波状文を周回させる。2は口縁が内湾する深鉢。口唇部下に縦位の刻目を施し、交互刺突文を区画文とする。3は波状口縁の深鉢。口縁端は無文帯とし、平行沈線が区画文となる。4は縄文地に貼付波状隆帯が巡る。5は体部が内湾気味に立ち上がる深鉢。口唇部下に平行波状沈線が巡る。6は深鉢頸部破片。縦位の隆帯を垂下させ、平行波状沈線が周回する。7は深鉢胴部破片。頸部に貼付隆帯の区画文を巡らし、平行沈線による楕円形区画文内に横直行文を配する。8はキャリパー形の深鉢。隆帯による区画文に渦巻文が施されている。9は折返し口縁。12~14は深鉢底部破片。14は網代痕が残留している。15~20は浅鉢の口縁部破片。18・19は内面に明瞭な稜を有する。21は安山岩製の磨石の破片である。表面における作業面は明瞭で、使用頻度が高いことを示している。

#### 土坑SK15 (第9・19図)

調査区中央2C・3C区に位置する。北側で土坑SK16を切っている。確認面上面径304.0×290.0cm、底面径282.0×277.0cmを測り、円形を呈する。深度最大36.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径45.0×40.0cmの円形で、深さ32.0cm。P2は径31.0×28.0cmの円形で、深さ22.0cm。P3は径47.0×40.0cmの円形で、深さ55.0cm。P4は径31.0×27.0cmの円形で、深さ26.0cm。P5は径23.0×22.0cmの円形で、深さ42.0cmである。覆土は2層からなる自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土中から出土した。1~5はキャリパー形の深鉢。1は口縁部破片で、背割り隆帯の区画文に渦巻文が連繫する。4は胴部破片。沈線による懸垂文に渦巻文が連繫する。6は浅鉢の胴部破片。内面に稜を有し、赤彩が残存している。加曽利E1式。

#### 土坑SK16 (第9・20図)

調査区中央2C区に位置する。南側で土坑SK15に切られている。確認面上面径163.0×89.0cm、底面径143.0×82.0cmを測り、楕円形を呈するものと推定する。深度最大26.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1はキャリパー形の深鉢。口縁部は隆帯による区画文。胴部は単節LRし縄文を地文に沈線による懸垂文モチーフを描出する。2は口縁部が無文帯で外反する。3は縄文地に沈線による円形モチーフ。4は単節LR縄文。5は土器片碎で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 土坑SK18 (第10・21図)

調査区中央3D区に位置する。本跡は北側で僅かに土坑SK19を切っている。確認面上面径263.0×252.0cm、底面径243.0×234.0cmの円形を呈する。深度最大23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は縄文中期が覆土から出土した。1は小突起を有する小形の深鉢。口唇部は僅かに外反し、Yの字状隆帯が垂下し、隆帯上に指頭圧痕が施されている。2は口唇部下に角押文が周回し、胴部に波状角押文が巡る。3は口唇部が肥厚し、沈線による円形文が配される。4・5は爪形文。6はヒダ状圧痕文。8は口縁部が内湾し、低隆帯による楕円形区画文が施文される。外面に赤彩の残存が認められる。7・9も浅鉢の底部破片であろう。

#### 土坑SK19 (第10図)

調査区中央3D区に位置する。本跡は北西側に土坑S K20、南側に土坑S K18に切られている。確認面上面径251.0×196.0cm、底面径242.0×190.0cmの円形を呈する。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径17.0×17.0cmの円形で、深さ24.0cm。P2は径25.0×25.0cmの円形で、深さ23.0cm。P3は径28.0×26.0cmの円形で、深さ11.0cmである。覆土は単一の自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、図示できるものはなかった。

#### 土坑S K20 (第10・21図)

調査区中央3C・3D区に位置する。本跡は東側に土坑S K19を切って構築している。確認面上面径282.0×277.0cm、底面径296.0×270.0cmの円形を呈する。深度最大34.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がり袋状を呈する。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所（P1～3）と土器を挿入させたと推定されるソケットピットが北側、南東側、南西側の3ヶ所で検出された。P1は径22.0×19.0cmの円形で、深さ38.0cm。P2は径27.0×22.0cmの楕円形で、深さ37.0cm。P3は径26.0×18.0cmの楕円形で、深さ35.0cm。覆土は単一層からなる自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土中から出土した。1～4は深鉢の胴部破片。1は単節R L縄文。2は単節I R縄文。3は燃糸L。4は燃糸Rを施文する。

#### 土坑S K21 (第9図)

調査区中央3D区に位置する。西側に土坑S K29と重複しているが、本跡が切って構築している。確認面上面径165.0×47.0cm、底面径151.0×37.0cmの楕円形を呈する。深度最大23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は単一層からなる自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、図示できるものはなかった。

#### 土坑S K22 (第10・21図)

調査区中央3D区に位置する。確認面上面径243.0×223.0cm、底面径227.0×218.0cmの円形を呈する。深度最大20.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径34.0×30.0cmの円形で、深さ31.0cm。P2は径21.0×20.0cmの円形で、深さ19.0cmである。覆土は単一層の自然堆積層である。

遺物として南東壁際で石斧3点が浅鉢の口縁部(3)で覆われた「デゴ」が確認された。その他覆土中には縄文中期の土器片が出土した。1・2は深鉢の胴部破片。縄文地に横走る沈線が巡る。3が浅鉢の口縁部破片。内面に稜を有する。4は閃緑岩製の長さ11.093cmを測る優品の定角式石斧である。刃潰れを補修研磨している。5・6は礫石斧である。5は輝緑岩製で刃部の作出だけでなく、図右側面に研磨を施している。長さ8.468cm。6はカンラン岩製で端部をわずかに調整剥離し刃部としている。長さ8.796cm。加曾利E1式期。

#### 土坑S K23 (第11・21図)

調査区中央2D区に位置する。本跡は東側に土坑S K26に切られている。確認面上面径220.0×214.0cm、底面径189.0×190.0cmの楕円形を呈する。深度最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径24.0×23.0cmの円形で、深さ17.0cm。P2は径36.0×31.0cmの円形で、深さ25.0cm。P3は径43.0×39.0cmの円形で、深さ31.0cm。覆土は単一層の自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土中から出土した。1は深鉢の胴部破片。単節R L縄文。2は浅鉢胴部破片。内外面とも赤彩が残置している。加曾利E1式期。

#### 土坑S K25 (第11・22図)

調査区中央3D区に位置する。本跡は北側に土坑S K26に切られている。確認面上面径240.0×231.0cm、底面径230.0×219.0cmの円形を呈する。深度最大29.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、内部施設

設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径18.0×15.0cmの円形で、深さ18.0cm。P2は径24.0×21.0cmの円形で、深さ25.0cm。P3は径23.0×18.0cmの楕円形で、深さ9.0cm。P4は径35.0×35.0cmの円形で、深さ13.0cm。P5は径32.0×27.0cmの円形で、深さ31.0cm。P6は径38.0×32.0cmの円形で、深さ57.0cmである。覆土は単一層の自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器、土器片鏢1点、磨製石斧1点が覆土中から出土した。1は体部の一部を欠損しているものの、完形に近い深鉢。口径 cm、器高 cmを測る無文系で、口縁部が肥厚し、体部は外傾して立ち上がる。2は波状口縁の深鉢で、橋状把手を有する。把手には二列の角押文が施文される。頸部区画文には刻みが施されている。阿玉台Ⅱ式。3は僅かに外反した口縁下に連続コの字文を平行させ、区画文に刻みを施す。4は口唇部が肥厚する深鉢。口縁下に二列の押しき文を区画文とし、爪形文が充填する。5は胴部破片。隆起区画文内に沈線によるモチーフが描出される。阿玉台Ⅳ式。9は土器片鏢で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。10は石英安山岩製の小形磨製石斧である。両側面が定角式を呈しているが、表裏面と同様自然礫面のまま残置されており、刃部のみ作出している。

#### 土坑SK26 (第11・22図)

調査区中央2D・3D区に位置する。本跡は西側の土坑SK23・25を切っている。確認面上面径326.0×302.0cm、底面径282.0×260.0cmの円形を呈する。深度最大10.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径82.0×44.0cmの楕円形で、深さ17.0cmである。覆土は単一層の自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土中から出土した。1は深鉢の胴部破片。縄文地文に平行沈線による区画文を有する。2は単節RL縄文。3は浅鉢胴部破片。内面に稜をもつ。加曾利E1式期。

#### 土坑SK27 (第11・22図)

調査区中央2D区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径238.0×124.0cm、底面径254.0×127.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大50.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がり、袋状を呈する。底面は平坦である。覆土は5層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片、土器片鏢1点、磨石1点が覆土から出土した。1は沈線区画文と地文に無節L。2は単節RL。加曾利E1式。5は土器片鏢で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片。6は石英斑岩製の磨石。表面には磨面が部分的に確認でき、さらに敲打痕も認められる。

#### 土坑SK28 (第9・22図)

調査区中央3D区に位置する。本跡は南東側の一部が土坑SK21とSK29によって切られている。確認面上面径237.0×142.0cm、底面径202.0×127.0cmの隅丸方形を呈する。深度最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径27.0×28.0cmの円形で、深さ25.0cm。P2は径34.0×33.0cmの円形で、深さ28.0cm。P3は径24.0×9.0cmの楕円形で深さ9.0cmである。覆土は単一の自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1・2は同一個体。無節Lを地文に平行沈線によるモチーフを描出する。

#### 土坑SK29 (第9・22図)

調査区中央3D区に位置する。本跡は大半が土坑SK21によって上面が切られている。確認面上面径235.0×214.0cm、底面径220.0×214.0cmの円形を呈する。深度最大29.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がり袋状を呈する。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土から出土した。1は深鉢で、口縁部に押し文を施文。2は単節RL。5は胴底を残置している。6は安山岩製磨石の破片。被熱痕が認められる以外作業痕は確認できない。

#### 土坑SK30 (第12・23図)

調査区中央3D区に位置する。東側で中世土坑SK39によって切られている。確認面上面径238.0×230.0cm、底

直径224.0×217.0cmの楕円形を呈する。深度最大19.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径17×30cmの楕円形で、深さ15cmである。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片と石皿の破片が1点出土した。1は波状口縁の深鉢で、大形の山形把手の破片。口縁部の区画は頸状に迫出す。隆帯に沿って沈線が施されている。阿玉台IV式。2も大形の深鉢。口縁部に背割り隆帯による横S字文が配する。3の口縁部は縦位の沈線を地文に貼付隆帯による区画文とクランク文が施されている。4は口縁部が強く内湾する深鉢。口唇部は幅広の無文帯で、単節R L縄文を地文に半沈線による垂下文と半楕円区画文を配する。磨坂式。5は背割り隆帯による区画文に交互刺突文が施される。6は背割り隆帯による区画文に交互刺突文と横沈線文が充填する。7は沈線区画文内に燃糸Lが充填する。10は安山岩製の石皿の破片。作業痕が一部残存しているのみである。

#### 土坑S K31 (第12・23図)

調査区中央2D区に位置する。確認面上直径244.0×239.0cm、底直径224.0×216.0cmの不整形円形を呈する。深度最大19.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径38.0×34.0cmの円形で、深さ34.0cm。P2は径27.0×26.0cmの円形で、深さ20.0cmである。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器と土器片鉦1点、磨製石斧1点が覆土から出土した。1は突出する大形把手を有する深鉢。対峙面にも横状把手をもつ。把手は円孔が穿たれ、周囲と突出部に角押文が施文される。口唇部は刻目が巡り、波頂部下の突起上部にも刻目が施されている。11縁部は波頂部の左側はコの状文を区画文とし、右側はコの字文と角押文を配し、平行沈線による区画を施す。胴部は単節R L縄文を地文とする。中軸式。2は浅鉢の頸部破片。強く内側に屈曲し、沈線文を施文する。3は単節L R縄文。4は櫛歯状工具による弧状モチーフ。5は土器片鉦で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。6は砂岩製の磨石の破片であるが、磨面が両面に認められ、局部磨製石斧にも類似している。

#### 土坑S K40 (第12・23・24図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡は北側が未調査区域に広がり、南側で土坑S K44・45・76によって切られている。確認面上直径202.0×198.0cm、底直径258.0×252.0cmの円形を呈する。深度最大43.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がりプラスコ状を呈する。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径15.0×12.0cmの円形で、深さ29.0cmである。覆土は自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は波状口縁の深鉢。11縁は僅かに外反し、口縁部は背割り隆帯の渦巻文。胴部は縄文地文に貼付隆帯。2も口唇部下に背割り隆帯が周回する。3は沈線の沿う隆帯による長方形区画文。4は口縁が無文帯となり、外反する。頸部に交互刺突文が巡る。4は背割り隆帯による区画文内は縦位の沈線が充填する。6は口縁部が沈線区画文で無文帯となる。9は口唇部下に沈線が巡り、体部は縦位の条線文が垂下する。12・13は土器片鉦で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 土坑S K41 (第12・13・24図)

調査区北西側1B区に位置する。本跡の東側大半が未調査区域に広がり、S K45を切っている。確認面上直径265.0×52.0cm、底直径183.0×32.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大63.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は大形の円形把手を有する深鉢。把手は円孔を有し、隆帯による区画文は頸状に迫出す。隆帯に沿って平行沈線が沿い、区画内の地文は縄文施文である。阿玉台IV式。2は深鉢の口縁部破片。縄文地文に背割り隆帯による区画文。3は無文地に波状の平行沈線が周回する。4は浅鉢で頸状に迫出した口縁部に平行沈線によるモチーフ。内外面に赤彩が施されている。

#### 土坑S K42 (第13図)

調査区北西側1A区に位置する。確認面上面径175.0×167.0cm、底面径142.0×139.0cmの円形を呈する。深度最大41.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、図示できるものはなかった。

#### 土坑S K 43 (第12・13・24図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡は西側の一部が未調査区域に広がり、土坑S K 44、46、51を切って構築している。確認面上面径237.0×170.0cm、底面径204.0×155.0cmの不整形円形を呈する。検出面からの深度最大32.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径30.0×26.0cmの円形で、深さ12.0cm。P2は径52.0×48.0cmの円形で、深さ39.0cm。P3は径35.0×30.0cmの円形で、深さ35.0cmである。覆土は自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鏝1点が覆土中から出土した。1はキャリパー形の深鉢。突出する瘤状突起に沿って沈線が走り、沈線の沿う隆帯による楕円形区画文。頸部は縦位の沈線文。2は隆帯区画文内が縦位の沈線文を充填する。3は11唇部に刻目が走り、沈線による区画文。4は縄文地文に蛇行沈線が垂下する。5・6は縄文地文に沈線モチーフ。8は口縁部が内湾し、無筋。10は小形深鉢。縦位の条線文。13・14は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片。

#### 土坑S K 44 (第12・13・25図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡は西側で土坑S K 43、東側で土坑S K 54、76に切れ、北側で土坑S K 40、51を切っている。確認面上面径203.0×113.0cm、底面径182.0×100.0cmの円形を呈する。深度最大41.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径33.0×29.0cmの円形で、深さ28.0cm。P2は径27.0×26.0cmの円形で、深さ19.0cmである。覆土は単一層からなる自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土中から出土した。なお、土器は小片のため図示できるものはなく、磨石のみである。1は砂岩製磨石で、完存品である。縁側面と裏面に作業痕がわずかにみられ、表面に敲打痕が認められる。

#### 土坑S K 45 (第12・13・25図)

調査区北西側1A・1B区に位置する。本跡は北西側で土坑S K 40、51、76を、西側で土坑S K 44を切って構築している。確認面上面径207.0×187.0cm、底面径190.0×172.0cmの円形を呈する。深度最大75.0cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がり、袋状を呈する。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径71.0×70.0cmの円形で、深さ41.0cmである。覆土は自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鏝2点が覆土中から出土した。1～3は同一個体である。小突起を有する深鉢で、液頂部下には瘤状突起が付す。口唇部に刻目が走り、体部に爪形文が周回する。阿玉台式。4は直行する口縁の深鉢。羽状縄文を地文に横位に蛇行する平行沈線モチーフ。5は沈線の沿う隆帯区画文に縦位の沈線文が充填する。6は隆帯区画文と頸部に横位沈線が走る。7は縄文地文に3本一組の沈線垂文が垂下する。8は無文地の深鉢。9・10は浅鉢の口縁部破片。11・12は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 土坑S K 46 (第12・13・25図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡は西側の大半が未調査区域に広がり、南側でS K 43に切られている。確認面上面径116.0×72.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大8.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鏝1点が覆土から出土した。1は深鉢胴部破片。単節R L縄文を地文に貼付隆帯を区画文とする。中鉢式。2は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 土坑S K 47 (第13図)

調査区北西側1A・2A区に位置する。確認面上面径203.0×185.0cmの楕円形を呈する。検出面からの深度最大18.0cmを測り、壁面の西側は明瞭ではないものの、東側は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、図示できるものはなかった。

#### 土坑 S K 48 (第13・14・25図)

調査区北西側2A・2B区に位置する。本跡は北東側が未調査区域に広がり、北側で土坑 S K 81 を切り、南側で土坑 S K 46 に切られている。確認面上面径240.0×220.0cm、底面径235.0×212.0cmの楕円形を呈する。深度最大57.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、覆土は自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鉢2点が覆土から出土した。1・2は同一個体である。キャリバー形の深鉢で、隆帯区画内は縦位の沈線が充填する。3は無文帯の口縁部が外反する深鉢。4は縄文地文に直行する平行沈線が垂下する。5は蛇行条線文が垂下する。7は浅鉢の胴部破片。内外面に赤彩が残置している。8・9は土器片鉢で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 土坑 S K 49 (第14・15・25図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は南側で土坑 S K 70 を切り、東側で土坑 S K 50 に切られている。確認面上面径188.0×152.0cm、底面径171.0×147.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大30.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は2層からなる自然堆積層である。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器が覆土から出土した。1は4単位の突起をもつ波状口縁深鉢。突出する把手は耳状を呈し、背部に沈線が入り、耳部には沈線による渦巻文が施文される。また3単位の小突起の口縁部には沈線による渦巻文が施されている。体部は単節 R L 縄文を地文に波頂部下に綾杉文が垂下する。2はキャリバー形の深鉢。縄文地文とし、口縁部は背割り隆帯による長方形区画文に、連する渦巻文。頸部は二列の沈線区画文。胴部は3本一組沈線懸垂文が垂下する。3は口縁部が内湾する深鉢。単縄文で施文される。4～6は深鉢の胴部破片。縄文地文に沈線による懸垂文が垂下する。7は底部破片。

#### 土坑 S K 50 (第14・15・26図)

調査区北西側2A・2B区に位置する。本跡は東側半分が未調査区域に広がり、西側で土坑 S K 49 と南側で S K 05 に切られている。確認面上面径198.0×167.0cm、底面径243.0×145.0cmの円形を呈するものと推定する。底面が南側に張り出した袋状で、検出面からの深度最大17.0cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は3層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は口縁部が肥厚する深鉢。刻目の施された隆帯区画文に沿って、二列の角押文が施文される。阿玉台Ⅱ式。2は深鉢の胴部破片。アナダラ属の貝殻腹縁により施文される。3は隆帯区画文に沿って二列の角押文が施される。4は爪形文。6は無節 L を地文とする。8は深鉢の底部破片で木葉痕を残置している。

#### 土坑 S K 51 (第12・13図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡の大半が S K 40, 43, 44, 45, 76 に切られている。確認面上面径105cm×1cm、底面径96.0×40.0cmの円形を呈する。深度最大26.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、図示できるものはなかった。

#### 土坑 S K 52 (第15・26図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径146.0×43.0cm、底面径132.0×32.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大39.0cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦である。覆土は自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器と土器片鉢1点が覆土から出土した。1は完形のキャリバー形深鉢。口縁部に対峙する橋状把手を有し、口縁部文様帯は沈線区画ないに交互刺突文が周回する。胴部は櫛齒状工具による蛇行条線を施文後、わずかに1条の条線文を残置させてほぼ全面にわたりヘラケズリによって消失させている。中崎式。2・3は胴部破片。2は単節 R L 縄文。3は単節 L R 縄文。4は浅鉢の口縁部破片。凹帯が同列、内面に稜を有する。5は土器

片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 上坑SK53 (第15・26図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は西側の約判部は未調査区域に広がっている。確認面上面径248.0×78.0cm、底面径248.0×67.0cmの円形を呈する。深度最大37.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径27.0×21.0cmの円形で、深さ26.0cm。P2は径54.0×37.0cmの楕円形で、深さ51.0cmである。覆土は層からなる自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土中から出土した。1は単節RL縄文を地文に沈線による単位文を施す。2～4は同一個体。無節Lを地文に平行沈線による懸垂文を垂下する。加曾利E1式期。5は浅鉢の底部破片。

#### 上坑SK54 (第14・23図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は西側でSK60と東側でSK55に切られている。確認面上面径225.0×193.0cm、底面径210.0×152.0cmの楕円形を呈する。深度最大22.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は4層からなる自然堆積層である。

遺物は縄文中期の土器が覆土から出土した。1は体部が内湾気味に立ち上がる深鉢。幅狭の口縁部に波状隆帯が周回し、頸部に二列の角押文が巡る。2は無文帯の口縁部が肥厚する深鉢。沈線区画文に縄文施文。3は深鉢胴部破片。単節RL縄文施文。4は底部破片。

#### 上坑SK56 (第15・27図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は北側でSK55、南東側でSK63に切れ、南側でSK59を切っている。確認面上面径222.0×207.0cm、底面径222.0×187.0cmの隅丸正方形を呈する。深度最大92.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がり、袋状を呈する。

遺物は縄文中期の上層、土器片鏝2点、磨製石斧1点が覆土から出土した。1は大形波状口縁を呈する深鉢。楕円形区画文の隆帯は大きく突出する。隆帯に沿って二列の沈線が巡り、区画内には横位の波状沈線が配される。頸部は縄文施文である。阿玉台IV式。2は口唇部に押圧が加えられ小波状口縁を呈す。口縁部にはコの字状文が巡り、地文は単節RL、中峙式。3は口縁部に縄文施文された隆帯区画文の下部は突出している。隆帯に沿って沈線を施文し、区画内に平行する二列の波状沈線が巡る。4は大形把手。円孔と横状把手を複雑に組み合わせ、さらに円孔に沿って渦巻文に連繋する背割り隆帯が巡る。5は無文帯の口縁部が外反し、爪形区画文となり、縄文地文に沈線懸垂文が垂下する。6は隆帯区画文を有する。大木8a式。7は弧状隆帯に沿って角押文が施文される。8は無節Lを地文にY字状隆帯が蛇行垂下する。9はキャリパー形か椀の胴上半部の破片。縄文地文に背割り隆帯による区画文に連繋する渦巻文。10は隆帯による杵状区画文。大木8b式。11は二重口縁の深鉢。無節L地文に沈線による懸垂文。12は単口縁の深鉢。単節RL縄文を地文とする。13・14は同一個体。突出する隆帯区画文に、胴部は櫛歯状工具による蛇行もしくは直行の条線文を垂下する。15も同様、条線文が垂下する。16は深鉢胴下半の破片。無節Lの擬位施文。17は半截竹管状工具による蛇行文を垂下する。19は波状口縁の浅鉢。口唇部は肥厚し、内面に稜を有する。18・20・21は深鉢の底部破片。22は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。23は角四片岩製の再生磨製石斧。定角式磨製石斧で、刃部が欠損し、欠損した部分を研磨を施しているもの、丸みをもたせ、鋭角刃の機能を消失させている。

#### 土坑SK59 (第15・42図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は北側でSK56、東側でSK63、南側でSK57によって切られている。確認面上面径 $\times$ 82.0cm、底面径130.0×74.0cmの円形を呈するものと推定できる。深度最大18.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の上層片が覆土から出土したものの、小片のため図示できるものはなかった。

#### 土坑SK60 (第14・15・28図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は西側で土坑SK54、56、62、70を切って構築している。北東側で土坑S

K70を切り、東側で土坑SK54と西側でSK55に切られている。確認面上面径245.0×cm、底面径221.0×92.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大21.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径32.0×32.0cmの円形で、深さ39.0cmである。覆土は自然堆積である。遺物は縄文中期の土器、打製石斧1点、磨石2点が覆土から出土した。1は幅狭な無文帯口縁が肥厚し、口縁下に隆帯によるV字状文を貼り付ける。2は波状口縁の深鉢。縄文施文の隆帯は突出し、杵状区画文をもつ。隆帯に沿って沈線が巡る。3は口唇部が肥厚する大木8a式。口唇部上は背割り隆帯による横S字文、コの字状文が巡る。4は小突起を伴う深鉢。口縁部は縄文地文に半載竹管によるU字状文、逆の字状文を施文する。5は縄文施文の隆帯にモチーフ。口唇部が肥厚する。6・7は縄文地文に沈線による区画文、モチーフ。8～9は同一個体。幅狭の三重口縁部は無文帯となり、胴部は半載竹管による懸垂文、モチーフ。11は無節L。12は底部破片。縄文地文に隆帯モチーフ。15は緑泥片岩製の打製石斧。表面のみ調整剥離が施され、裏面は自然礫面のまま残置されている。16は砂岩製の磨石。側面に敲打痕が認められ、表裏両面には磨面がみられる。17は石英斑岩製の円形磨石。断面扁平六角形を呈し、磨面が全面に及ぶ。とくに両側面の作業痕は顕著である。

#### 土坑SK62 (第14・15図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡の大半はSK55,60,63によって切られている。確認面上面径100.0×cm、底面径88.0×35.0cmの楕円形を呈する。深度最大11.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は3層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、小片のため図示できるものはなかった。

#### 土坑SK63 (第15・28図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は北側でSK56,62を切り、SK57に切られている。確認面上面径200.0×182.0cm、底面径185.0×165.0cmの円形を呈するものと推定する。検出面からの深度最大16.0cmを測り、底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径19.0×17.0cmの円形で、深さ12.0cm、P2は径37.0×30.0cmの円形で、深さ40.0cmである。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は曽利系土器である。口唇部が強く内面に屈曲し、口縁部は内湾する。口唇部から口縁部にかけて縦位の条線を施文する。2は浅鉢の底部破片。外面にわずかな赤彩が残留している。加曾利式E2式期。

#### 土坑SK64 (第16・28図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は東側でSK65を切って構築している。確認面上面径242.0×173.0cm、底面径222.0×134.0cmの楕円形を呈する。深度最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土から出土した。1はキャリバー形の深鉢。縄文地文に隆帯区画文を施す。加曾利E1式期。2は刺突文を施文する。3は石英斑岩製の小型磨石である。側面に磨面が認められる。また表裏両面のほぼ中央に敲打痕が確認される。

#### 土坑SK65 (第13・14・29図)

調査区北西側2A・2B区に位置する。本跡は西側で土坑SK48に切られている。確認面上面径185.0×184.0cm、底面径162.0×153.0cmの円形を呈する。深度最大18.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設は検出されていない。遺物は縄文中期の土器片と土器片鏟2点、磨製石斧1点が覆土から出土した。1は口縁部が僅かに反外し、体部は内湾する。口唇部は肥厚し、V字状文は配する。2は角押文を施文する。3は刻みを有する隆帯区画文。4は円形隆帯に沿って角押文が施文される。5は平行沈線による直行懸垂文が垂下し、弧状モチーフを描出する。6は平行沈線によるモチーフ。7は縄文地文に沈線によるモチーフ。8・9は上唇片鏟で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。10は角四片岩製の磨製石斧である。横断面が丸みをもつ定角磨製石斧で、装着部と推定される側面に敲打痕状の粗面がみられる。

#### 土坑SK66 (第16・29図)

調査区西側2A・3Aに位置する。本跡は南側でSK67に切られている。確認面上面径202.0×180.0cm、底面径186.0×163.0cmの円形を呈する。深度最大14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径19.0×18.0cmの円形で、深さ7.0cmである。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は深鉢の把手破片。円孔の周囲に角押文を渦巻き文状に施文する。2は口唇部が内削状を呈し、口縁に平行して沈線文が周回し、二列の角押文が垂下する。3は断面三角形隆帯に沿って二列の角押文が施文する。4も二列の角押文が施される。5は隆帯が垂下し、角押文がモチーフを構成する。阿玉台Ⅱ式期。

#### 土坑SK67 (第16・29図)

調査区西側3Aに位置する。本跡は北側でSK66を切っている。確認面上面径192.0×140.0cm、底面径167.0×118.0cmの円形を呈する。深度最大7.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は2層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1～3・5は同一個体。隆帯による楕円形区画文内に沿って二列の沈線が巡り、波状沈線文が充填する。さらに円孔の伴う小突起に連繋する懸垂文が垂下する。4は口縁部が短く外反し、口唇部に押圧文が施文される。阿玉台Ⅳ式期。

#### 土坑SK68 (第16・30図)

調査区西側3A・3Bに位置する。確認面上面径248.0×246.0cm、底面径241.0×235.0cmの深度最大8.0cmを測り、壁面は南側が明瞭ではないが、北側は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径44.0×36.0cmの楕円形で、深さ42.0cmである。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鏝が覆土から出土した。1は垂下する断面三角形の隆帯に指頭圧痕を施す。2は単節LR縄文。3は単節RL縄文。4は無文地。5は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

#### 土坑SK69 (第7・30図)

調査区西側2A・2B・3A・3Bに位置する。本跡は南東側でSK02に切られている。上面径257.0×222.0cm、底面径246.0×200.0cmの楕円形を呈する。深度最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径61.0×55.0cmの円形で、深さ21.0cm。P2は径31.0×21.0cmの楕円形で、深さ27.0cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器と土器片鏝1点が覆土から出土した。1はキャリバー形の深鉢。口縁部は縄文地文に隆帯による区画文とモチーフをもつ。胴部は縄文地文。2は口縁部が内湾する浅鉢。3は隆帯区画内に沈線による楕円形文。4は縄文地文に隆帯モチーフ。5は擦糸Lを地文に隆帯区画文。7は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。加曾利Ⅰ式期。

#### 土坑SK70 (第14・15図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は北側で土坑S49、南側でSK54、南西側でSK60に切られている。南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径183.0×169.0cm、底面径166.0×160.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大32.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径31.0×23.0cmの楕円形で、深さ21.0cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、小片のため図示できるものはなかった。

#### 土坑SK71 (第16・31図)

調査区西側4A・4B区に位置する。本跡は西側の一部が未調査区域に広がり、南側でSK72に切られている。確認面上面径218.0×148.0cm、底面径238.0×163.0cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、検出面からの深度最大33.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は4層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片、土器片鏝1点、打製石斧1点が覆土から出土した。1は波状口縁の深鉢。波頂部から垂下する隆帯は突出する。縄文地文に口縁部に沿って平行沈線が走り、沈線の内側に刺突文が施文されている。2は胴部破片。縄文施文された突出する隆帯が区画文となり、縄文地文に沈線による蛇行懸垂が垂下する。3は底部破片。4は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。5はカンラン岩製の打製石斧である。表面の両刃部に調整刺離を施し、さらに側面にも調整刺離が認められる。裏面および表面の中央部は自然礫面のまま残置している。

#### 土坑SK72 (第16図)

調査区西側4B区に位置する。本跡は南側の大半が未調査区域に広がり、北側でSK71を切って構築している。確認面上面径203.0×45.0cm、底面径80.0×23.0cmの楕円形を呈する。深度最大34.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は5層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、小片のため図示できるものはなかった。

#### 土坑SK76 (第12・13図)

調査区北西側1A区に位置する。本跡の大半がSK40,44,45に切られ、SK51を切って構築している。確認面上面径152.0×62.0cm、底面径132.0×45.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大30.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したものの、小片のため図示できるものはなかった。

#### 土坑SK78 (第17・30図)

調査区南側4C区に位置する。本跡は西側でSX06に切られている。確認面上面径165.0×109.0cm、底面径146.0×98.0cmの楕円形を呈する。深度最大13.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一層からなる自然堆積である。

遺物は縄文前期と中期の土器片が覆土から出土した。1は波状口縁を呈する深鉢。断面三角形の隆帯区画内に楕円形モチーフが施され、隆帯に沿って二列の角押文が施文される。阿玉台Ⅱ式。2・3は同一個体。口縁部が短く外反する。無文地に角押文による区画文とモチーフをもつ。4は円形の小突起をもち、垂下する隆帯に沿って沈線による懸垂文が垂下する。5は縄文地文の深鉢。口縁部が肥厚する。6は爪形文が施文される。7は垂下する隆帯に沿って爪形文が施文される。10はキャリバー形の深鉢。背割り隆帯による渦巻文が連繋する楕円形区画文。大木8b式。11～13は深鉢の底部破片。

#### 土坑SK79 (第17・31図)

調査区南側4C区に位置する。本跡は西側でSK80を切って構築している。確認面上面径205.0×200.0cm、底面径185.0×184.0cmの楕円形を呈する。深度最大1.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径88.0×65.0cmの楕円形で、深さ16.0cmである。覆土は単一層からなる自然堆積である。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鏝2点、磨製石斧1点、礫器1点が覆土から出土した。1は波状口縁を呈する深鉢。隆帯区画文は波頂部下で頸状に突出し、隆帯に添って沈線が施文され、区画内には杵状文を有する。2は円孔が伴う小突起を有する深鉢。隆帯に沿って角押文が施文される。3も山形突起の深鉢。口縁部に爪形文が施文される。4は波状口縁の深鉢。幅狭の口縁部は肥厚し、指頭押圧痕が施されている。5は肥厚する口唇部にV字状文が連繋し、隆帯に沿って二列の角押文が施文される。6は波状口縁の深鉢。縄文地文に沈線モチーフ。9は交互刺突文を巡らし、隆帯と伴って区画文となる。10は小形の深鉢。口唇部および隆帯上に細かな刻目が巡る。11・12は同一個体。沈線による波状文が周回する。13は隆帯に沿って角押文が施文される。14は沈線懸垂文が垂下する。17は浅鉢の底部破片。外面に僅かであるが赤彩が残置している。18・19は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。20はホルンフェルス製で、調整刺離を残す打製石斧に刃部のみ丁寧な研磨が施されている。21は安山岩製の礫器である。図左面のみ調整刺離を施している。

## 土坑SK80 (第17・32図)

調査区南側4C区に位置する。本跡は東側でSK79に切られている。確認面上面径241.0×187.0cm、底面径222.0×180.0cmの楕円形を呈する。深度最大51.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器片と土器片鏝1点が覆土から出土した。1は波状口縁を呈する深鉢。縄文地文に円孔を伴う小突起を有する陸帯モチーフ。陸帯に沿って二列の角押文が施文される。阿玉台Ⅱ式。2・3は陸帯に沿って幅広い角押文が施文される。4は深鉢の口縁部破片。角押文を区画文に斜行する条線が充填する。5は縄文施文の深鉢。口縁部が肥厚する。6は口縁部がわずかに外反する。口唇部に刻目が巡る。7は円形陸帯上に刻目が巡る。8～10は陸帯に沿って角押文が施され、横位の波状文が周回する。11は陸帯区画文に沿って平行沈線が施文される。12の口唇部に凹帯が巡る。13は蛇行沈線が垂下する。14は波状沈線が周回する。16の底部は網代痕が残置している。18は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

## 土坑SK81 (第13・32図)

調査区北西側2B区に位置する。本跡は東側が未調査区域に広がり、南側でSK48に、西側でSX05に切られている。確認面上面径150.0×—cm、底面径202.0×90.0cmの楕円形を呈する。深度最大44.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がりフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器が覆土から出土した。1はキャリパー形の深鉢。口縁部文様帯は背割り陸帯による区画文と楕円形文を配し、区画内を縦列の沈線文を充填する。胴部は単節RL縄文。2もキャリパー形の深鉢。波状口縁を呈し、単節RLを地文に口縁部のみを文様帯で、背割り陸帯による横S字文と波頂部から懸垂文を垂下させる。3は小山形突起を有する無文地の深鉢。

## 土坑SK82 (第17・33図)

調査区南側5C区に位置する。本跡は南西側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径100.0×84.0cm、底面径224.0×160.0cmの楕円形を呈するものと推定する。深度最大75.0cmを測り、壁面は大きく内傾して立ち上がるフラスコ状土坑である。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器、土器片鏝2点が覆土から出土した。1は円孔の伴う山形把手。刻目が施された陸帯区画内に条線と沈線モチーフが施文される。2は口唇部が分厚く肥厚する深鉢の把手破片。小円孔を伴い、縄文施文の陸帯区画内は並行沈線が巡る。3も口唇部が肥厚する。陸帯による枠状区画文を施し、4も口唇部が肥厚し、陸帯が突出する。口唇部上部は沈線間に刻目が入る。胴部は単節RL縄文。5は二列の角押文が施文される。6は口唇部に押圧痕が巡る。7は頸部が無文帯で、陸帯区画文に沿って平行沈線文が施文される。8は貼付陸帯を区画文とし、条線文を地文に沈線と波状沈線が横走する。9は櫛歯状工具による条線文が口縁部は横位、胴部は縦位に施文される。12の深鉢底部にわずかな網代痕が残置している。13は波状口縁の浅鉢。11唇部は肥厚し、内外面に赤彩が施されている。14・15は土器片鏝で長軸に紐掛溝を施す。胴部破片である。

## 土坑SK87 (第17・33図)

調査区南側4D区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径167.0×92.0cm、底面径136.0×82.0cmの楕円形を呈する。深度最大9.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

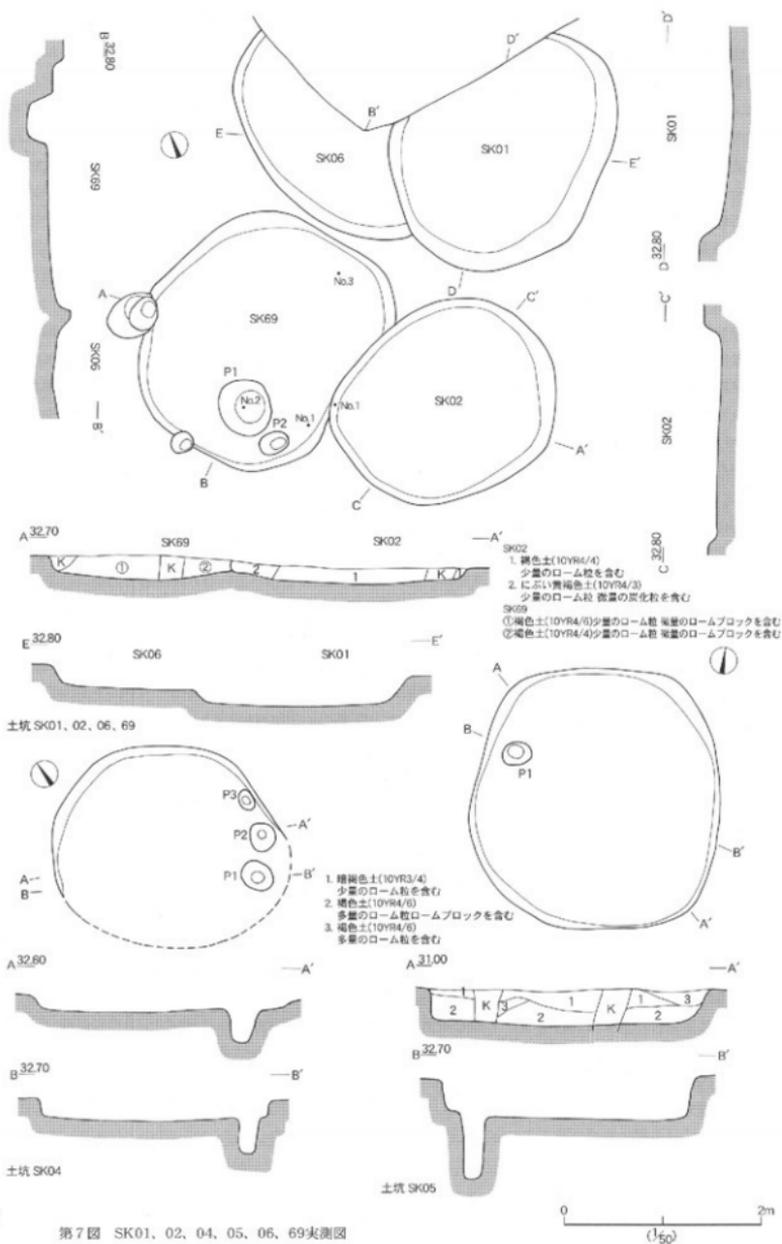
遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は深鉢の胴部破片。単節RL縄文施文。

## 土坑SK88 (第13・33図)

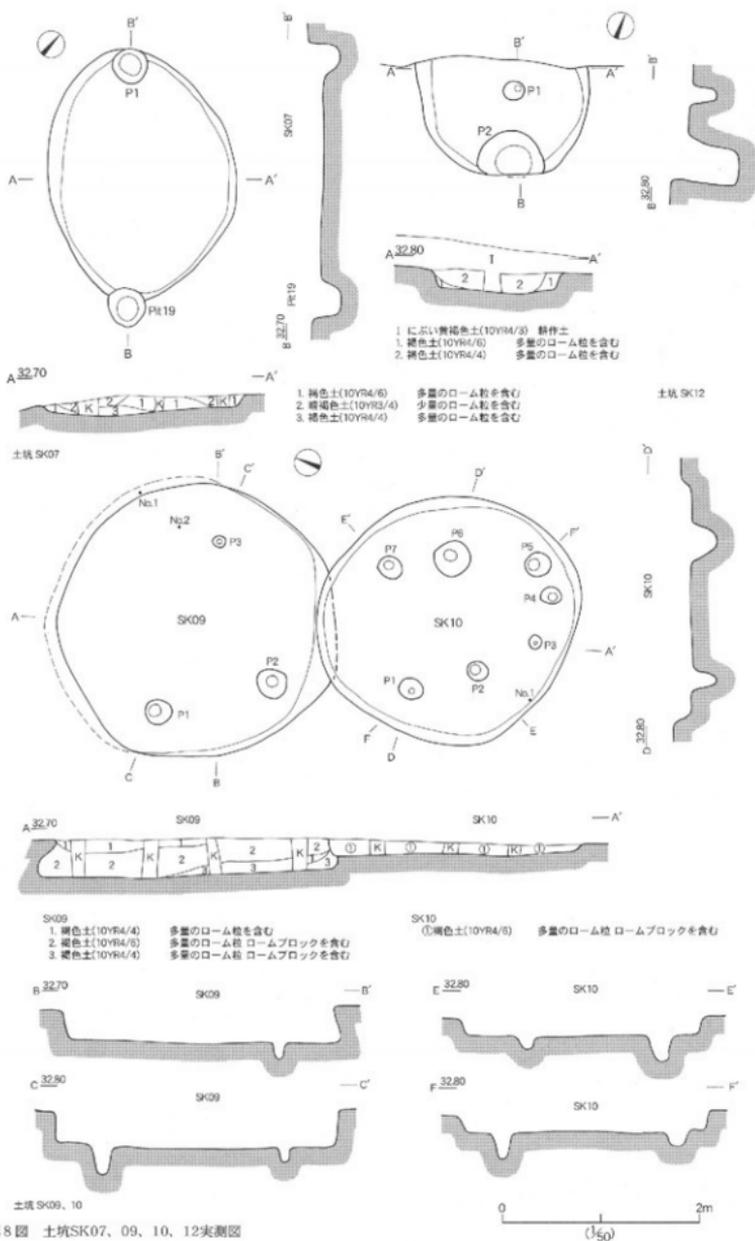
調査区北西側1B・2B区に位置する。本跡は東側の大半が未調査区域に広がり、南側で土坑SK50によって切られている。確認面上面径145.0×52.0cm、底面径138.0×45.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。1は深鉢の口縁部破片。摺糸Rを地文にC字状爪形文が周回する。

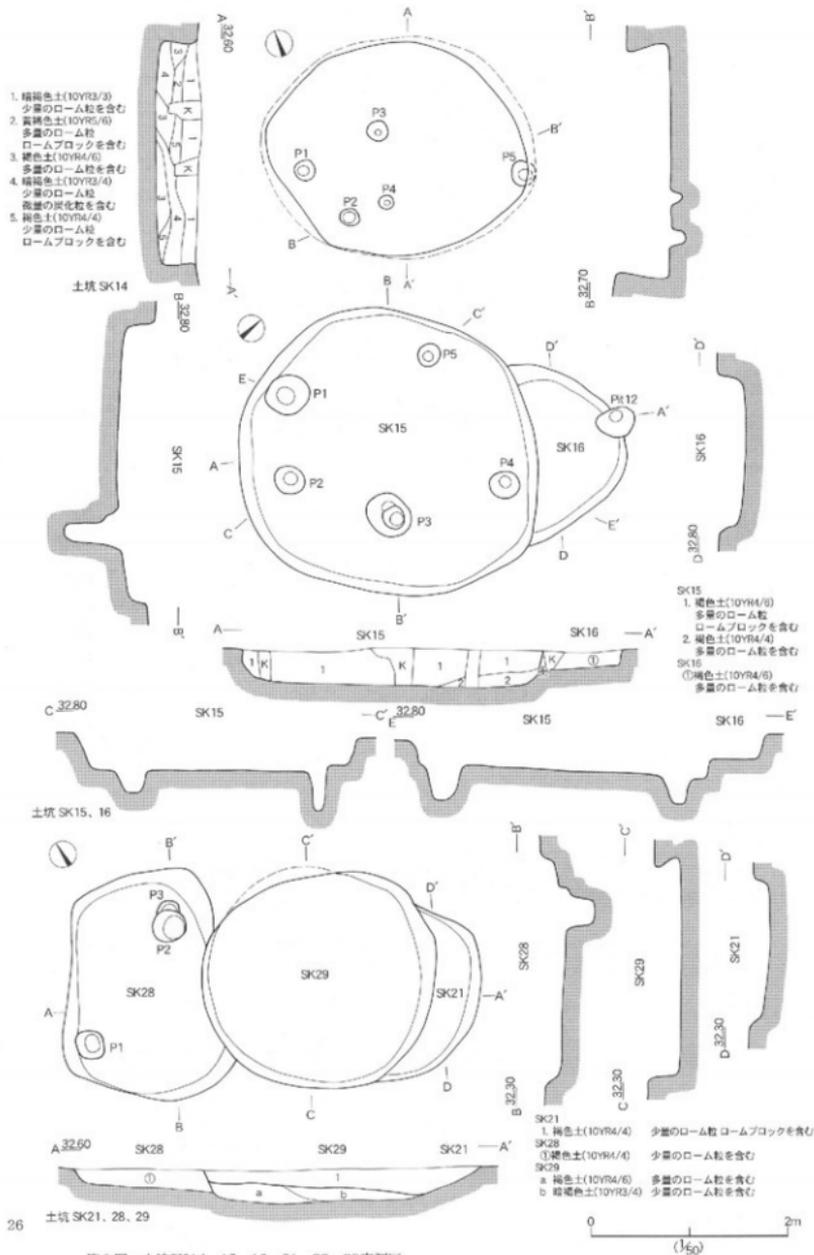
(小川和博)

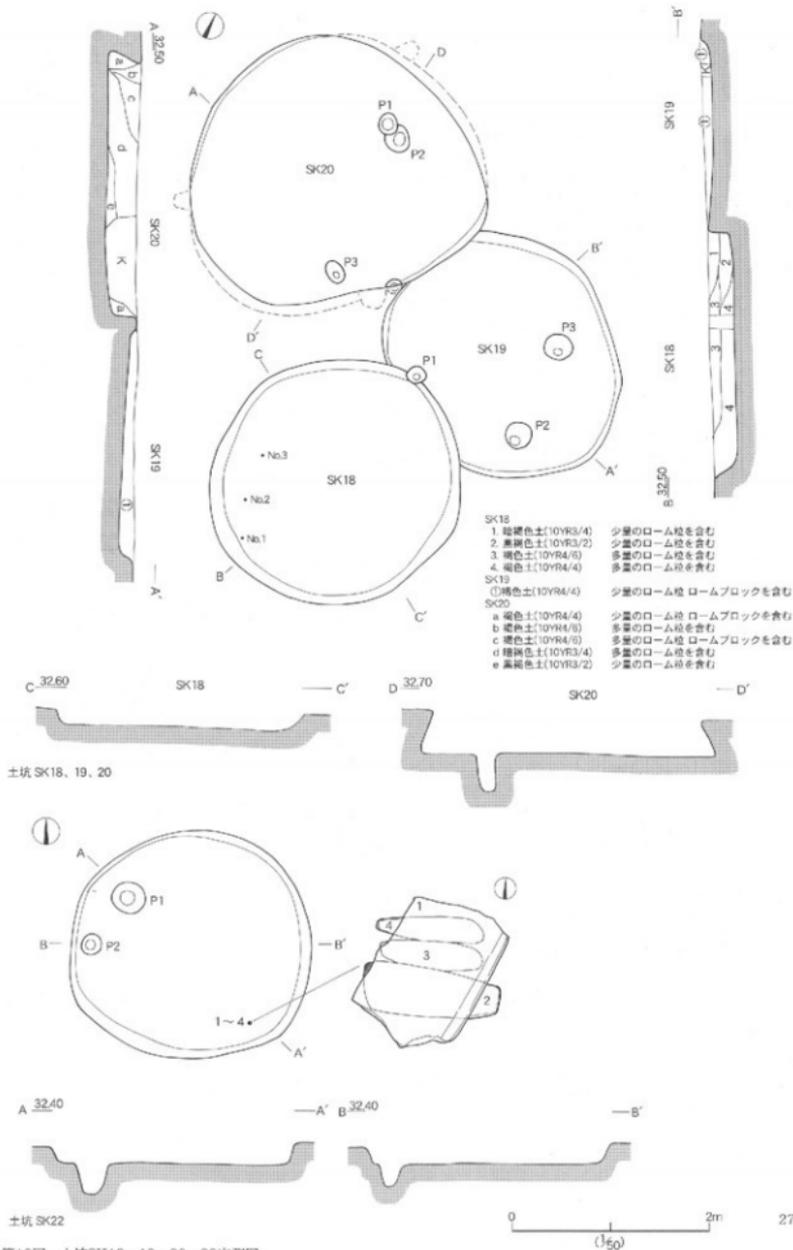


第7図 SK01, 02, 04, 05, 06, 69実測図

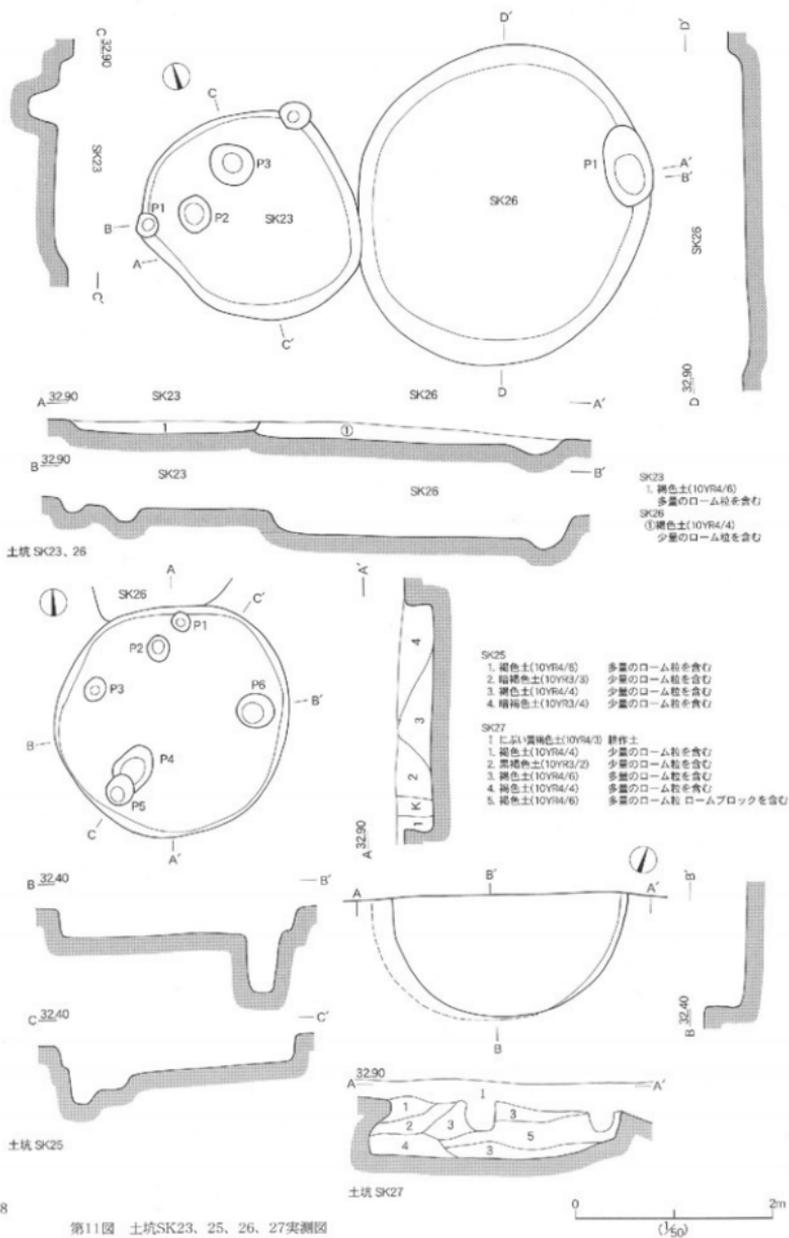


第8図 土坑SK07, 09, 10, 12実測図

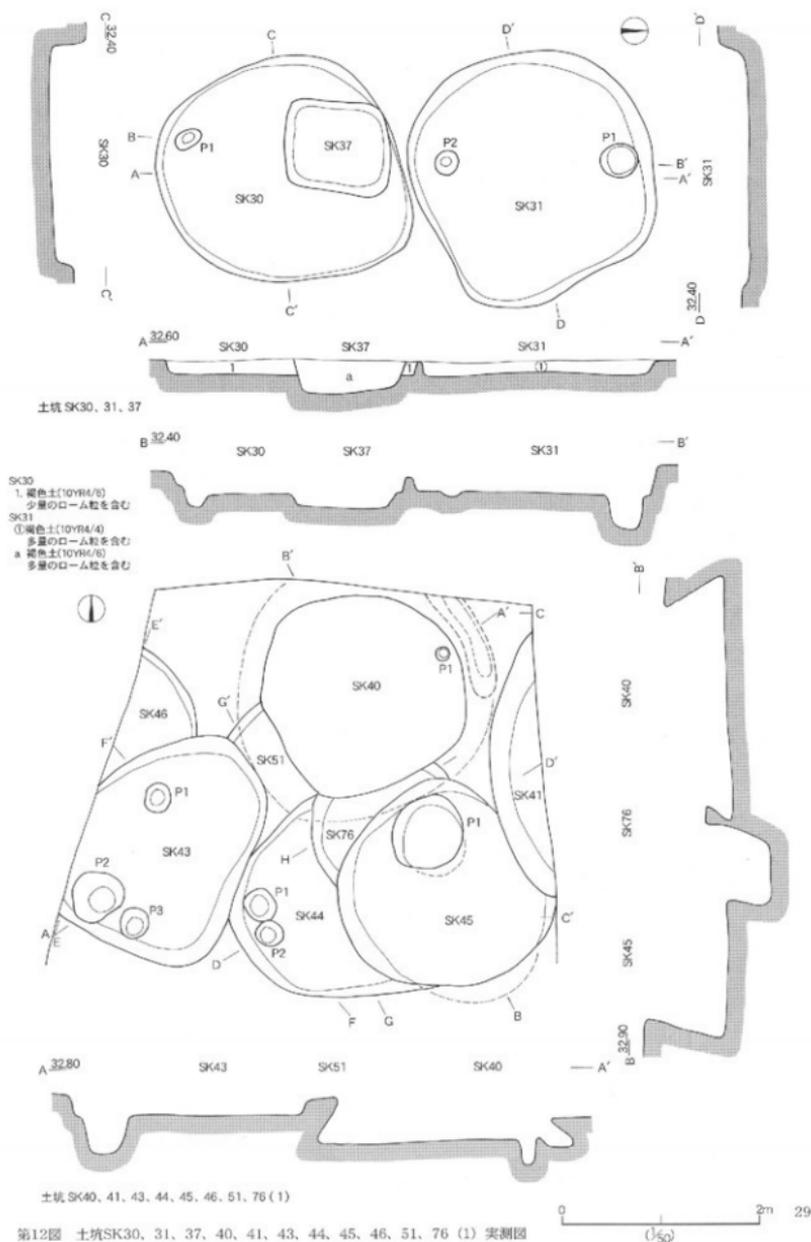




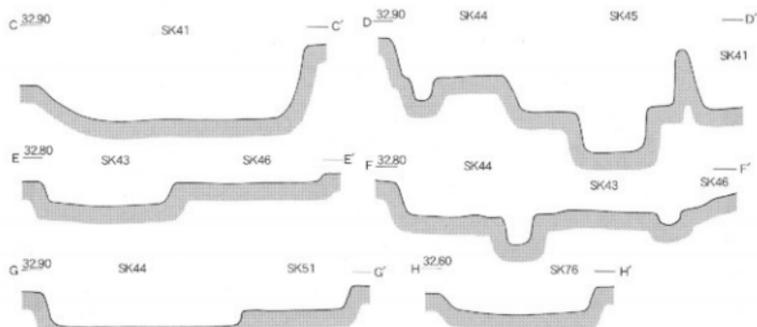
第10図 土坑SK18, 19, 20, 22実測図



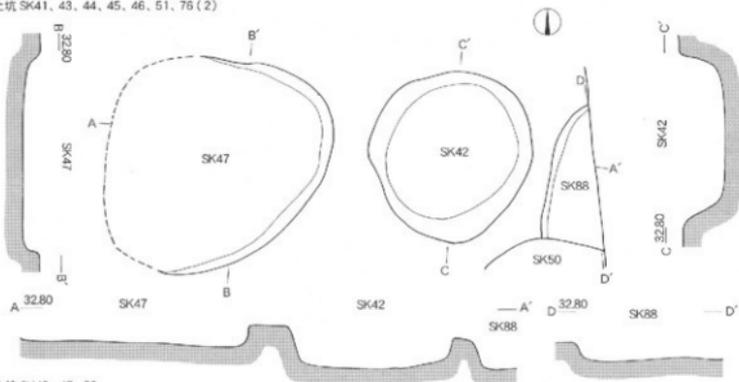
第11図 土坑SK23、25、26、27実測図



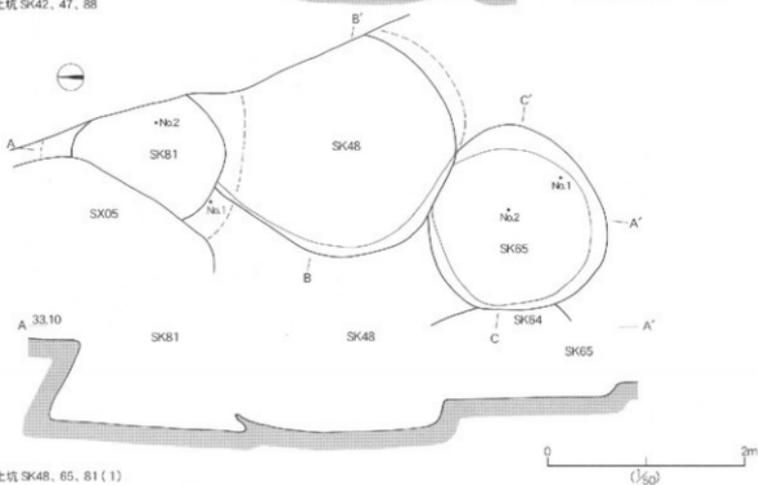
第12図 土坑SK30, 31, 37, 40, 41, 43, 44, 45, 46, 51, 76 (1) 実測図



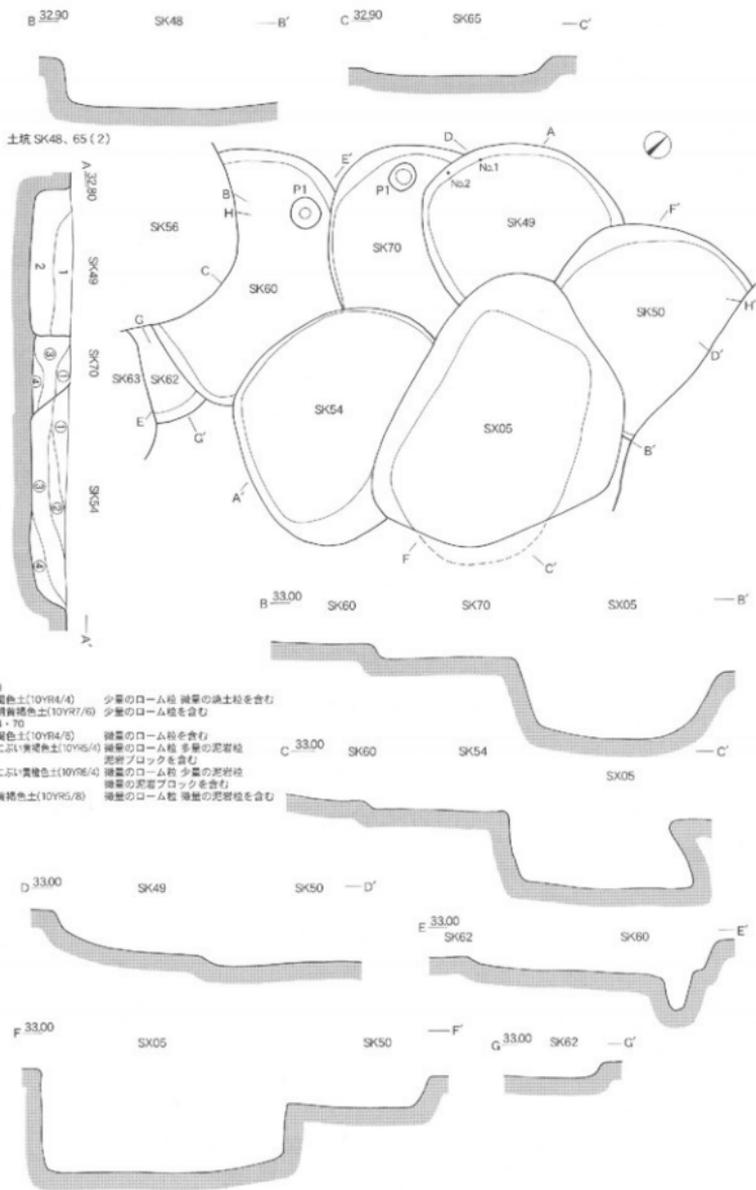
土坑 SK41, 43, 44, 45, 46, 51, 76 (2)



土坑 SK42, 47, 88



30 土坑 SK48, 65, 81 (1)

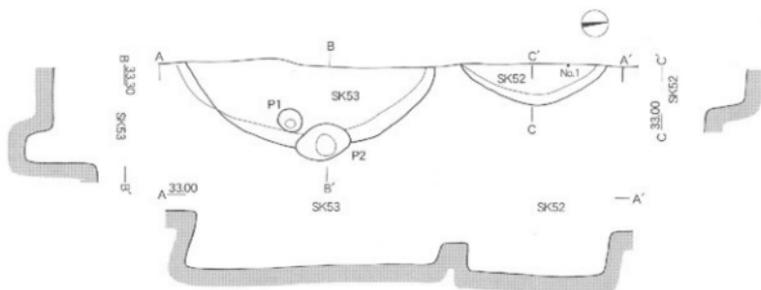


第14図 土坑SK48, 65(2), 49, 50, 54, 60, 62, 70(1), SX05実測図

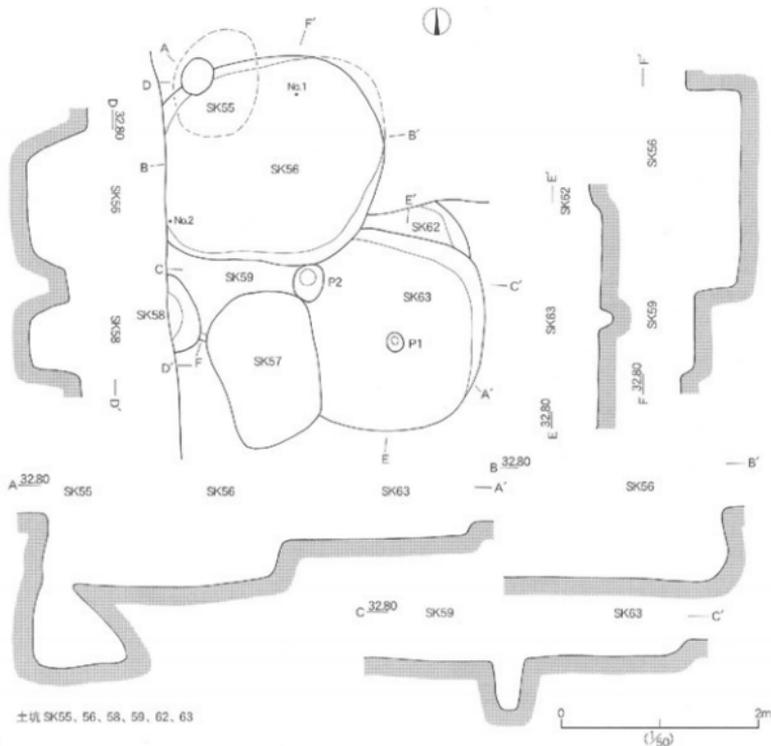
H 32.90 SK60 SK70 SK49 SK50 — H'



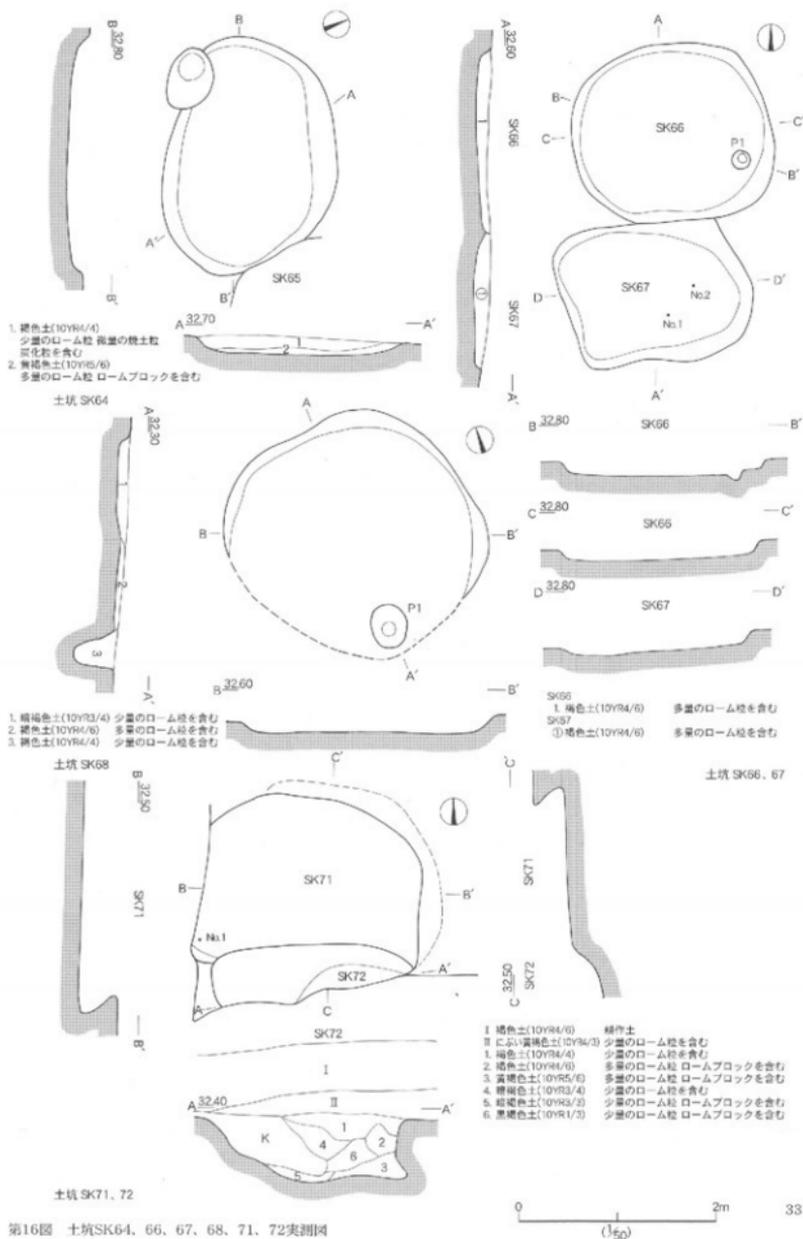
土坑SK49、50、60、70(2)



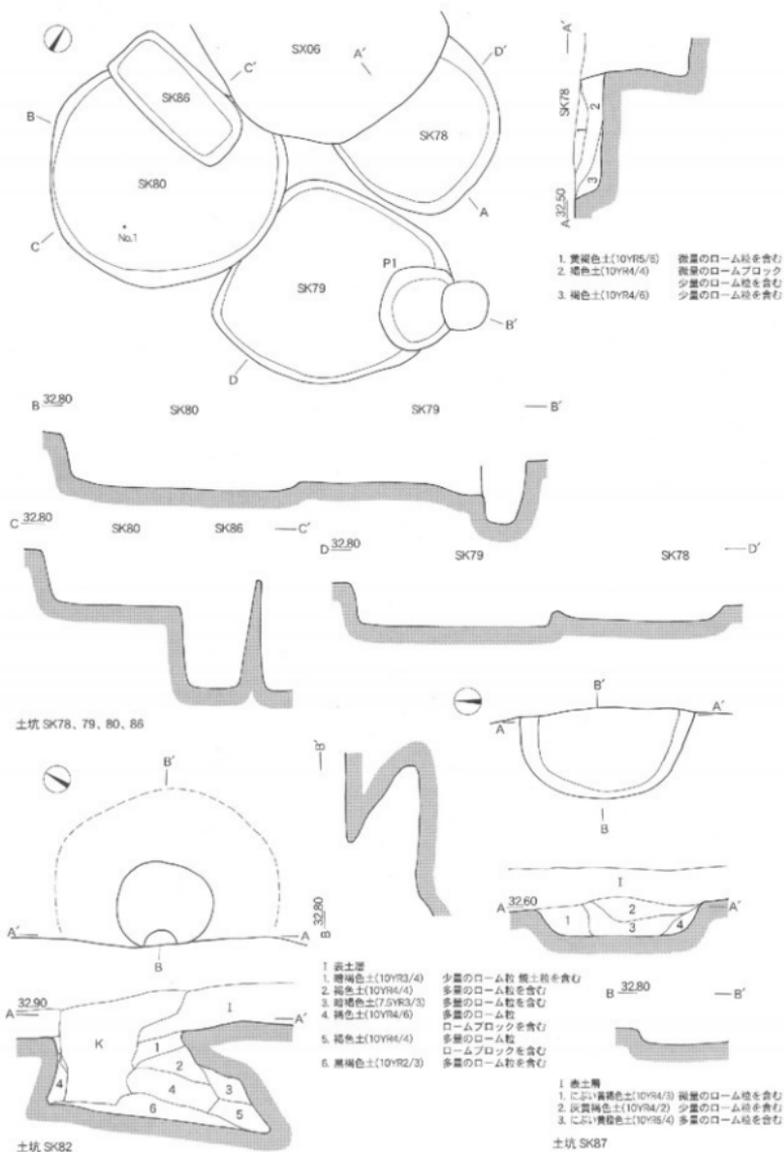
土坑SK52、53



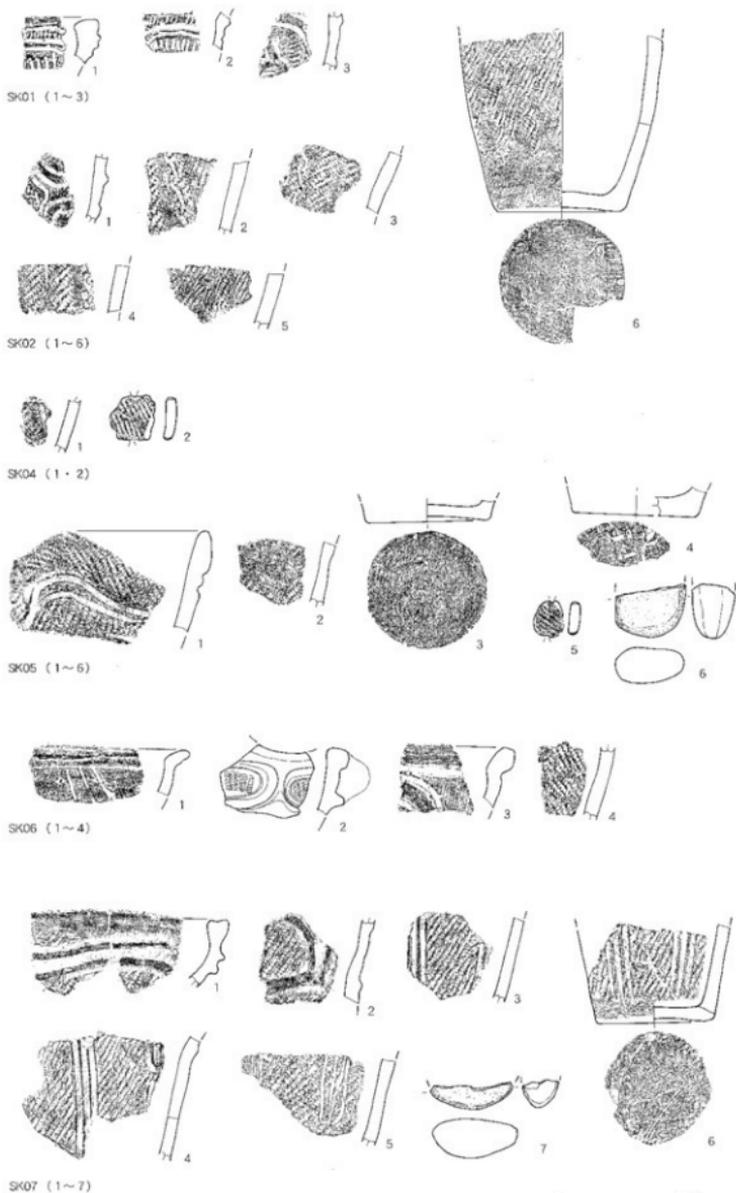
土坑SK55、56、58、59、62、63



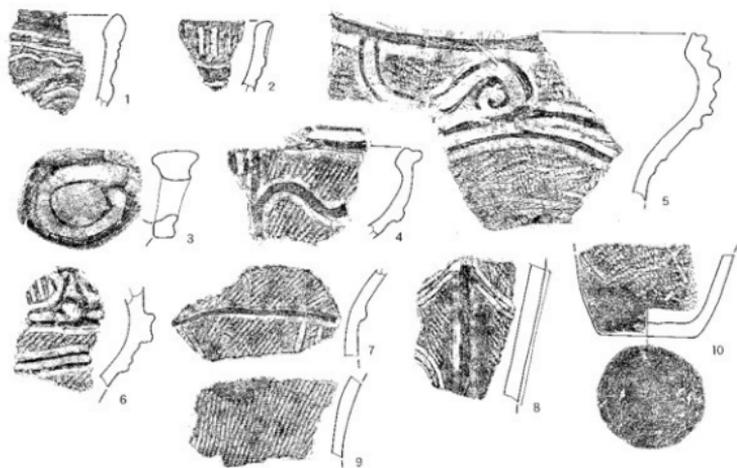
第16図 土坑SK64, 66, 67, 68, 71, 72実測図



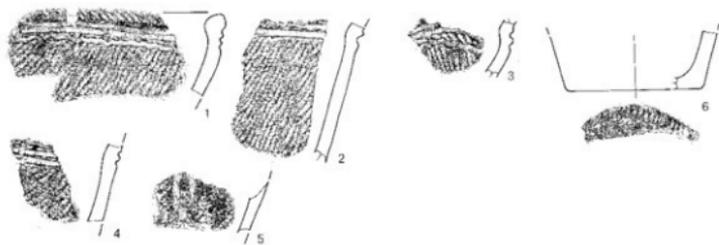
第17図 土坑SK78, 79, 80, 82, 86, 87実測図



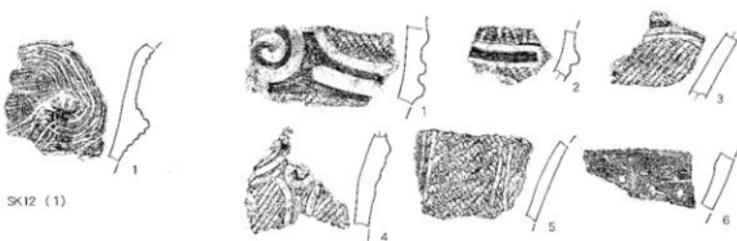
第19図 上坑SK01、02、04、05、06、07出土遺物



SK09 (1~10)



SK10 (1~6)

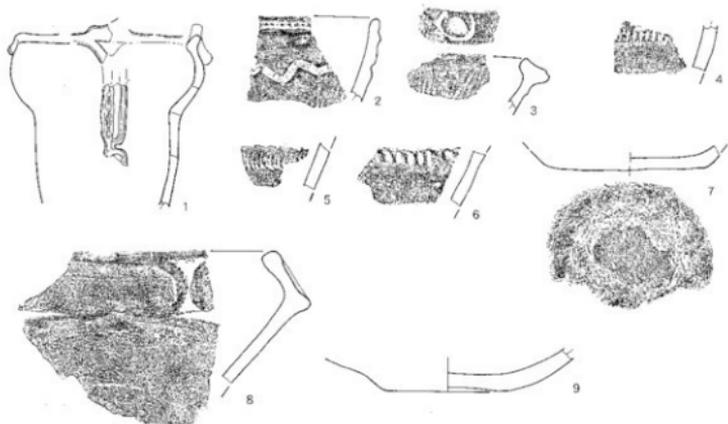


SK12 (1)

SK15 (1~6)



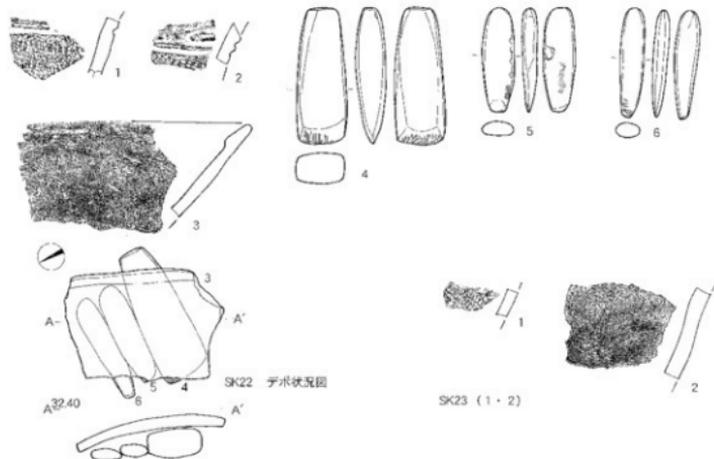
0 10cm  
(1/2)



SK18 (1~9)

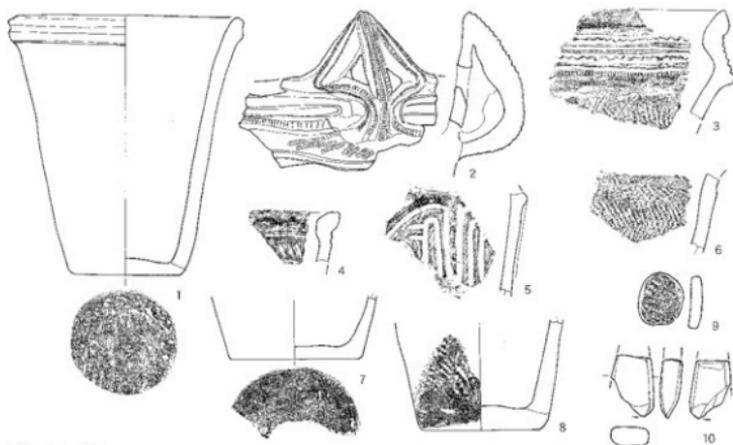


SK20 (1~4)

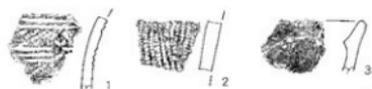


SK22 (1~6)

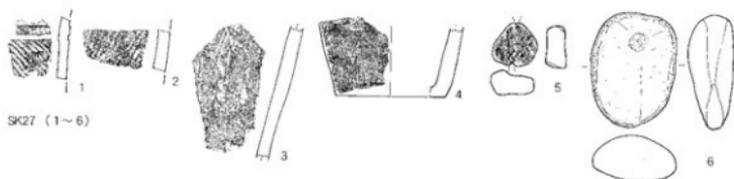
SK23 (1・2)



SK25 (1~10)



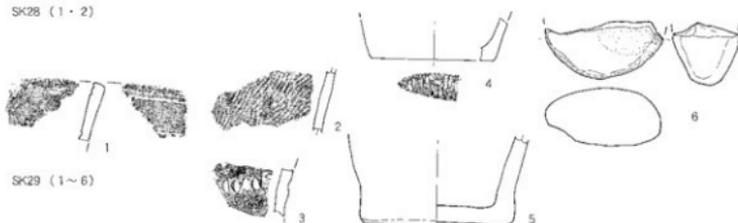
SK26 (1~3)



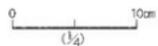
SK27 (1~6)

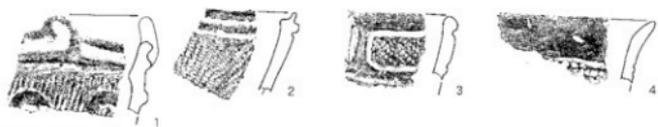
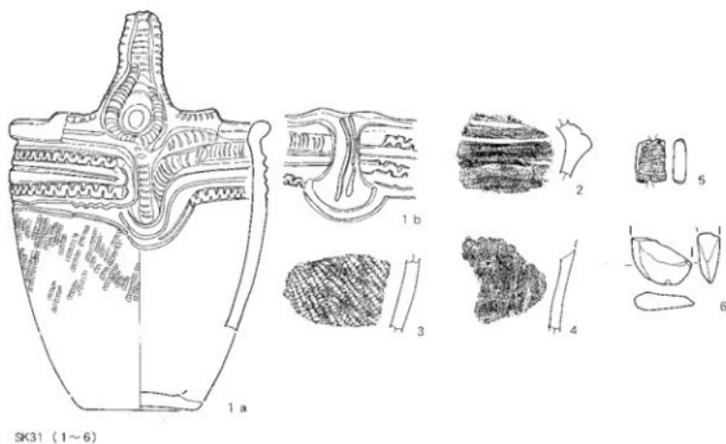
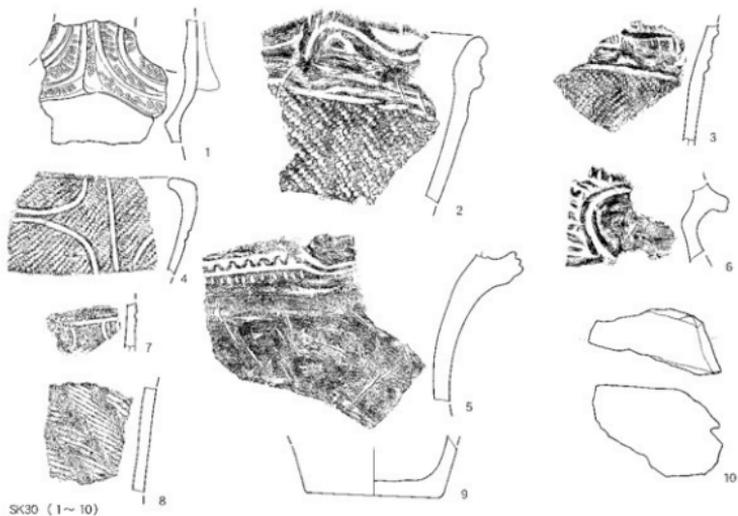


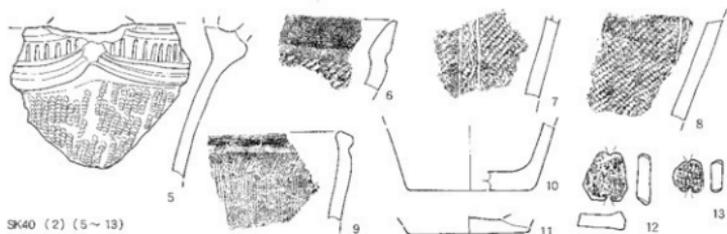
SK28 (1・2)



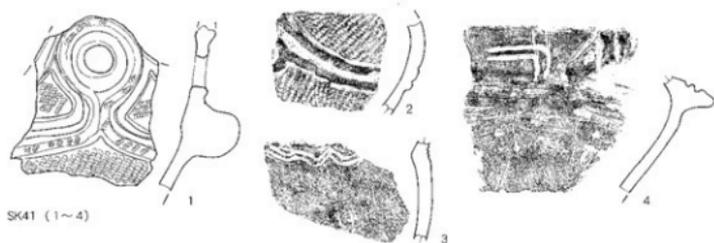
SK29 (1~6)



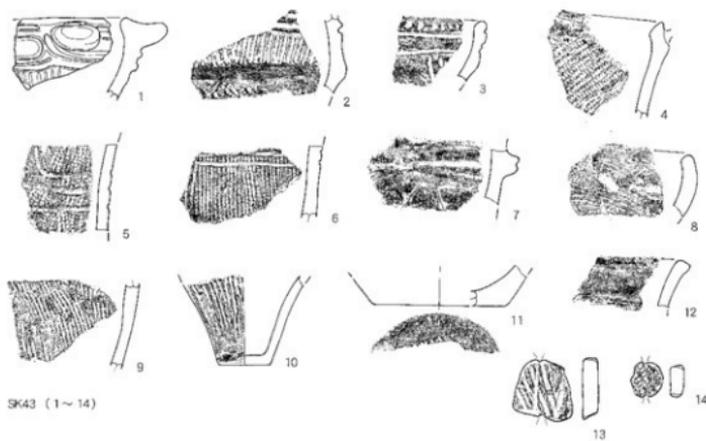




SK40 (2) (5~13)

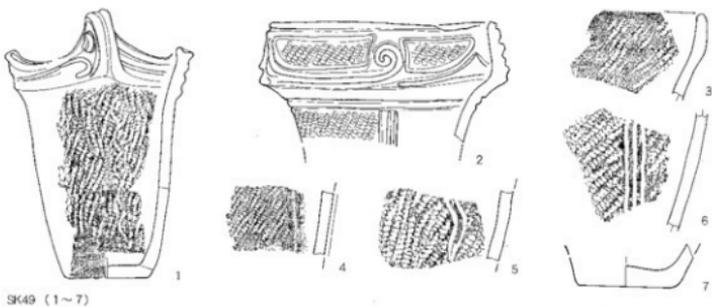
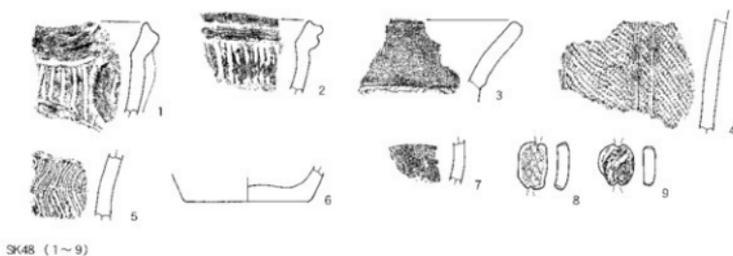
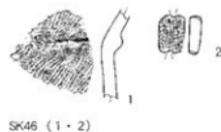
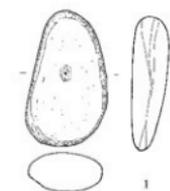
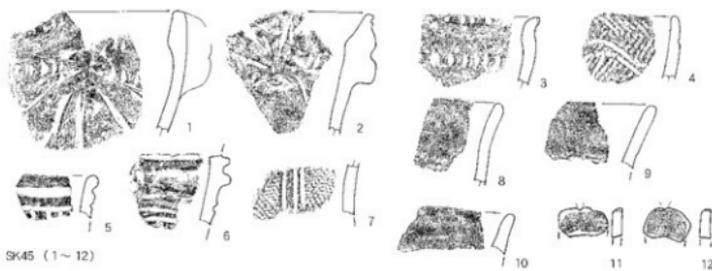


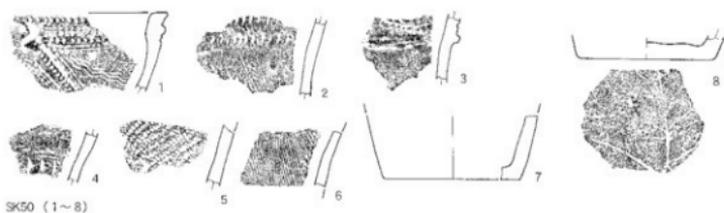
SK41 (1~4)



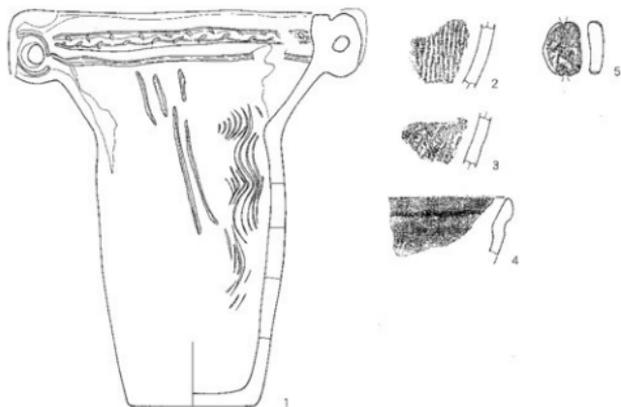
SK43 (1~14)

0 10cm  
(1/4)

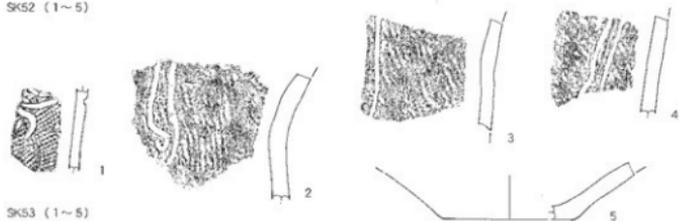




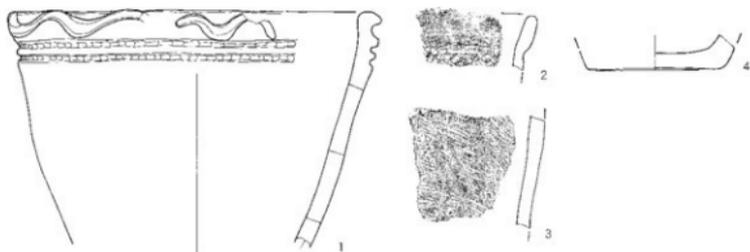
SK50 (1~8)



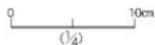
SK52 (1~5)

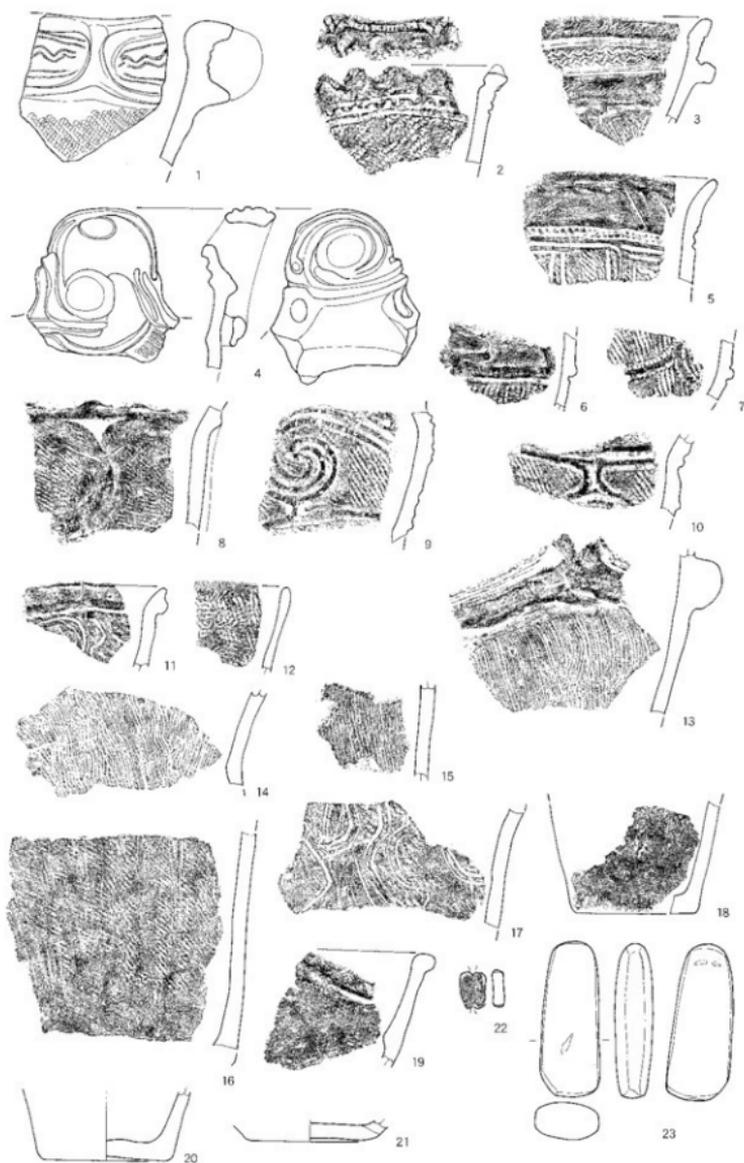


SK53 (1~5)

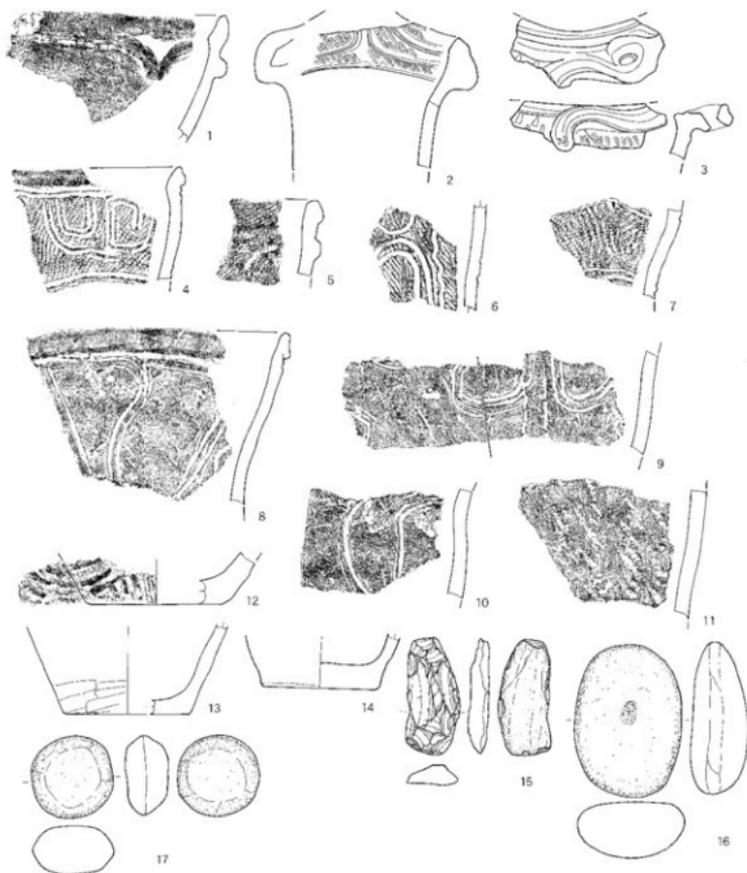


SK54 (1~4)





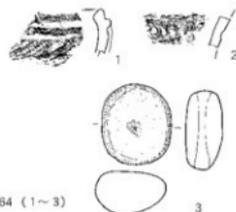
SK56 (1~23)



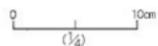
SK60 (1~17)



SK63 (1・2)

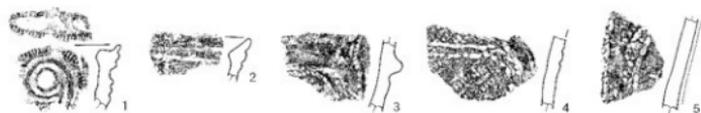


SK64 (1~3)

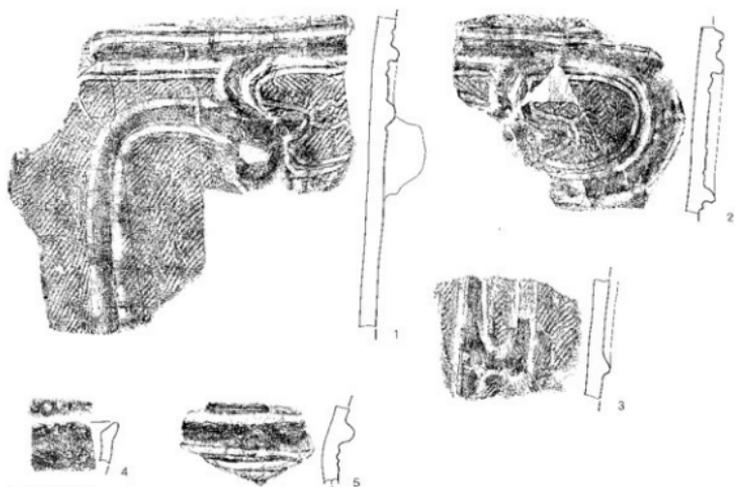




SK65 (1~10)



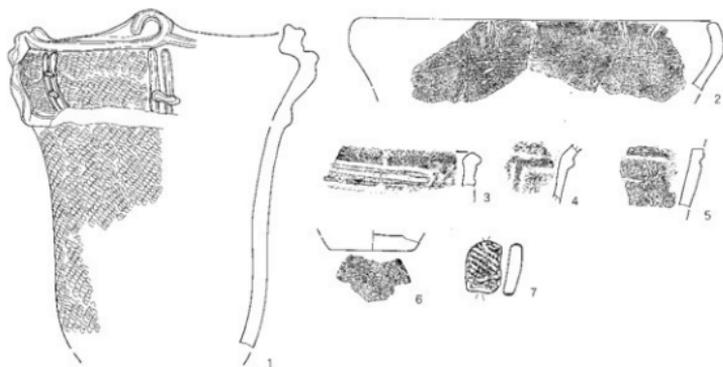
SK66 (1~5)



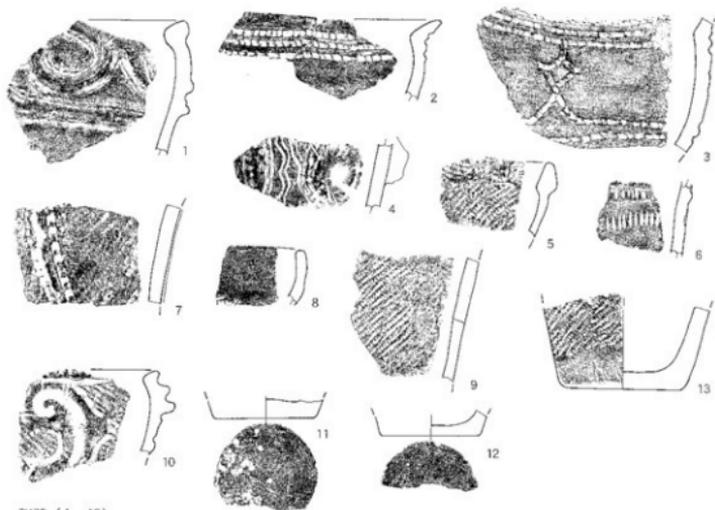
SK67 (1~5)



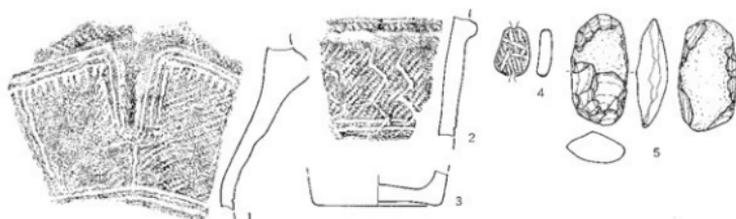
SK68 (1~5)



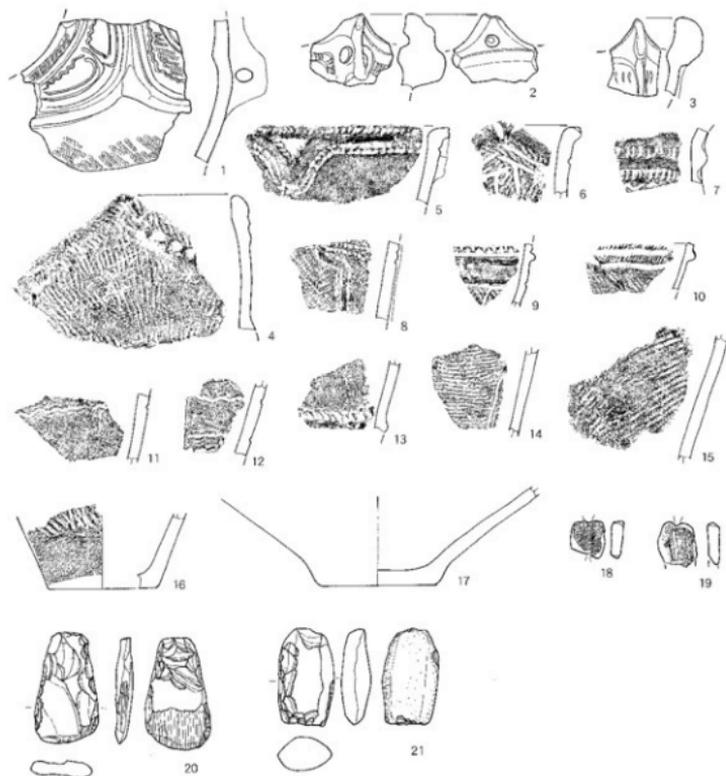
SK69 (1~7)



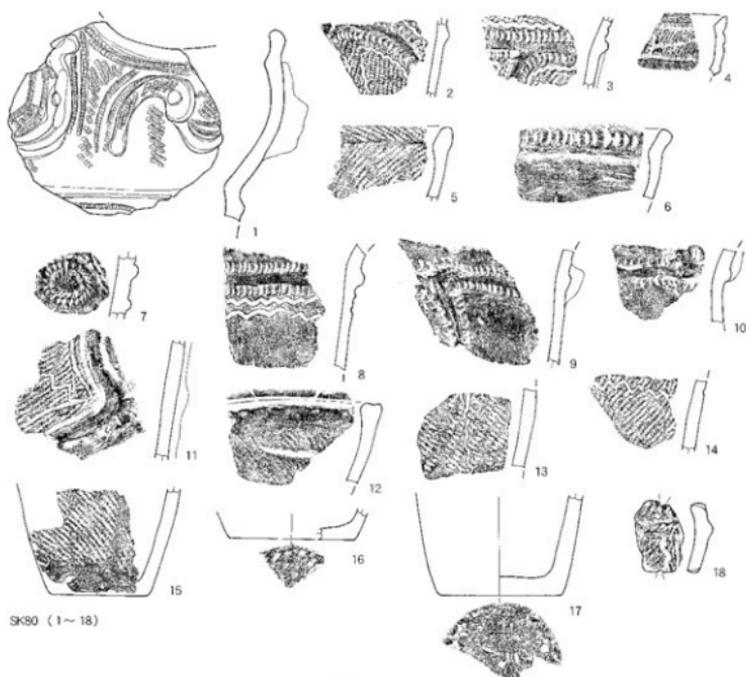
SK78 (1~13)



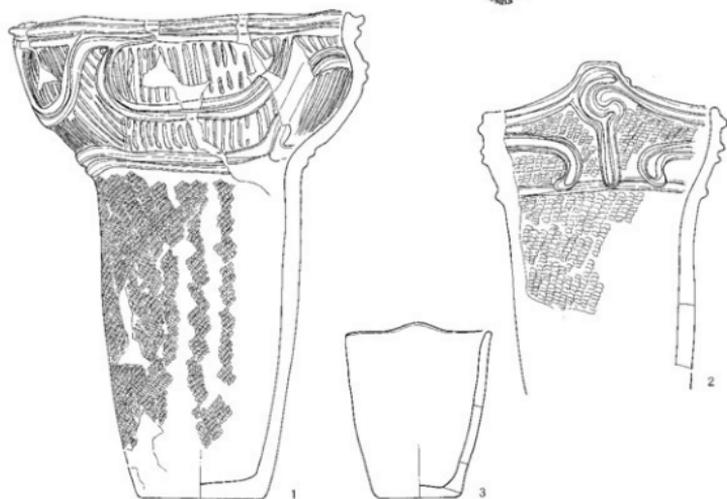
SK71 (1~5)



SK79 (1~21)



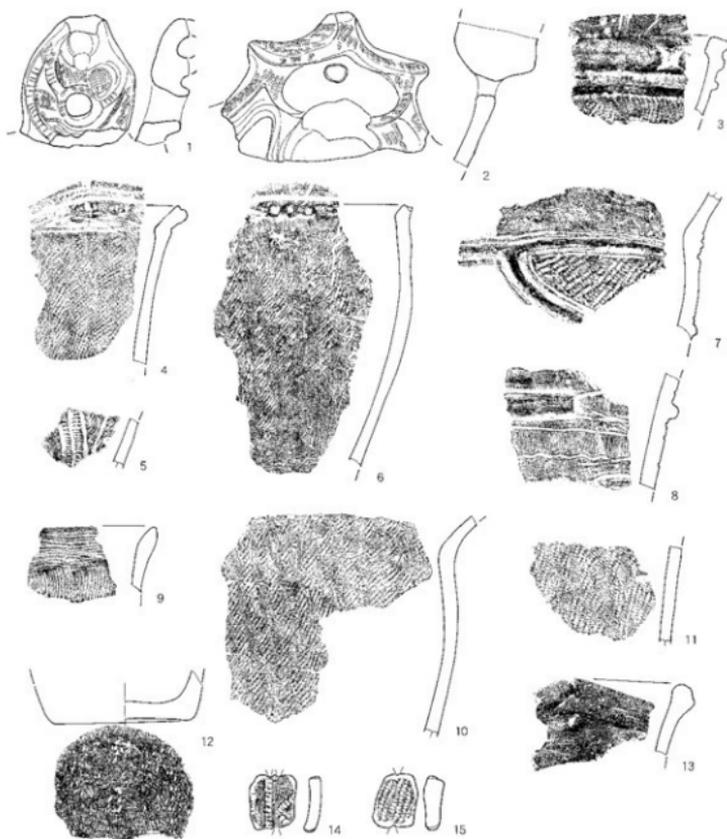
SK80 (1~18)



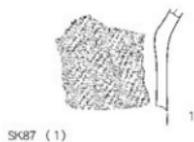
SK81 (1~3)

第32図 土坑SK80、81出土遺物

0 10cm  
(1/4)



SK82 (1~15)



SK87 (1)



SK88 (1)

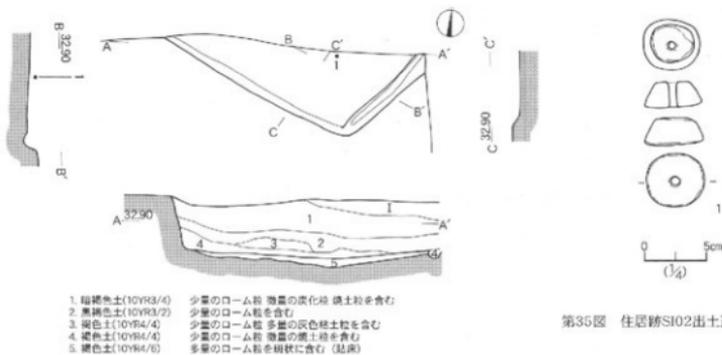
## 第3節 奈良・平安時代

## 1) 竪穴住居跡

## 住居跡S102 (第34図)

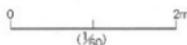
調査区北西側1A区に位置するものの、北側の大半が調査区外に広がっているためわずかに南隅側のみが調査された。したがって検出面は南北辺0.91m、東西辺は1.42mを測るのみである。全体が不明であるものの南北軸を主軸とすると方位は $N-33^{\circ}-E$ を指す。立地する標高は32.62mを測り、検出面からの最大深度は14.5cmである。壁面はわずかに外傾して立ち上がり、床面は貼床で検出面ではほぼ平坦である。壁溝が東壁辺のみ検出でき、幅17~21cm、深さ1.5cmの規模である。柱穴およびカマド等は確認できなかった。覆土は5層に分層可能で、上層は少量のローム粒を含む暗褐色土。中層の2層は少量のローム粒を含む黒褐色土。床面上は4層で少量のローム粒と微量の焼土粒を含む。

遺物として土師器破片と石製紡錘車が1点のみ出土している。土師器は小破片のため図示できなかったが、9世紀前後と推定される。紡錘車は凝灰岩製である。上面径4.491cm、下面径3.056cm、孔径0.903cm、高さ2.114cm、重量48.43gを測る。上面にやや丸みをもち、縁辺部の加工は磨研が施されているものの、仕上げ痕が残留している。



第35図 住居跡S102出土遺物

第34図 住居跡S102実測図

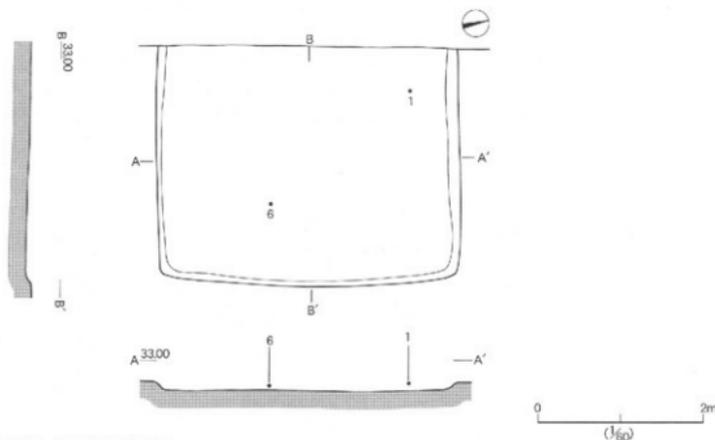


## 住居跡S103 (第36図)

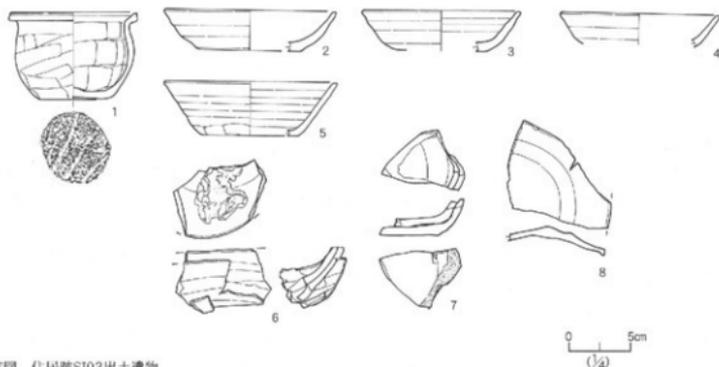
調査区北西側1A・2A区で、西側が未調査区域内に広がっている。検出された南北辺3.66m、東西辺は2.92mを測る。形状は方形を呈する。全体が不明であるものの南北軸を主軸とすると方位は $N-2^{\circ}-W$ を指す。立地する標高は32.64mを測り、検出面からの最大深度は10cmである。壁面はわずかに外傾して立ち上がり、床面は貼床でほぼ平坦である。なおカマドおよび柱穴は検出できなかった。覆土は床面上堆積土のみで多量のローム粒、ロームブロックを含む褐色土で覆われていた。

遺物は調査範囲が狭く限定されていたにも拘らず、床面上から検出されている。うち図示したのは完形に近い土師器・小甕1と須恵器・坏6、蓋1である。いずれも床面直上に遺棄されたものである。なお、6・7は別個体の坏が重ね焼きの状態で作られたものであり、8の蓋は歪みがみられる。1は土師器・小形甕である。口径10.4cm、

器高7.1cm、底径6.0cmを測り、口縁部の一部を欠損する。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反して端部は短く揃み上げられる。口縁部ヨコナデ。外面体部ヘラケズリ。内面ナデ。底部は木炭痕を残している。胎土は石英・長石粒を含む。黒褐色(10YR3/1)を呈する。2～7は須恵器坏の破片である。いずれもロクロ成形で、口径に対し器高の低い坏である。2は口径14.0cm、器高3.3cmを測る。底面は回転ヘラ切り。胎土に石英・長石粒を含む。色調は暗灰色(N3/)。3は口径13.0cm、器高3.3cmを測る。底面は手持ちヘラケズリ。色調は灰白色(5Y7/2)。4は口径13.0cm、現存器高2.5cmを測る。胎土に長石・石英粒を含有する。色調は暗青灰色(5B4/1)。5は口径に対し底径が広い坏。口径14.2cm、底径8.4cm、器高4.4cmを測る。体部下端は手持ち



第36図 住居跡SI03実測図



第37図 住居跡SI03出土遺物

ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。胎土に石英・長石粒を含む。灰色(7.5Y R 6/1)。胎土に海綿骨針・石英・長石粒を含む。6は3個体の坏が重ねた状態で熔着したもので、また内面には室壁の一部分が崩落し熔着している。いずれもロクロ成形で、底部はヘラケズリである。7は2個体の坏が熔着したもので、いずれも体部が内湾気味に立ち上がり、外面に自然釉がかかっている。8は蓋である。歪みがみられ、口縁端が短く垂下する。外面に自然釉がかかっている。6・7を除き9世紀前半に比定される。

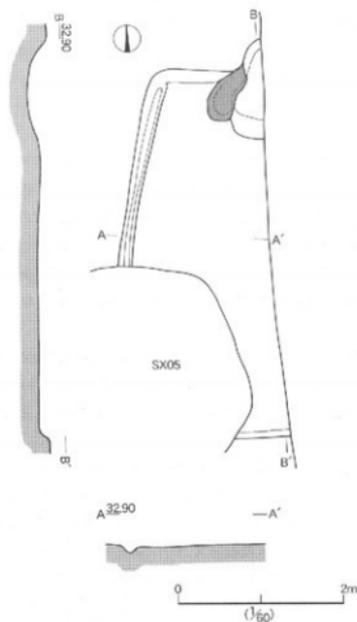
#### 住居跡S104 (第38図)

調査区北西側1A・2A・1B・2B区に位置し、住居跡の東側大半は保存区域内に広がり、しかも南西隅には中世地下式坑S X05によって大きく切られている。したがって検出面は南北辺4.47m、東西辺は1.75mを測るのみである。また遺存している形状から判断して方形状を呈するものと推定される。カマドが北壁辺に設置しており、この南北軸を主軸とすると方位はN-1°-Wを指す。立地する標高は32.53mを測り、検出面からの最大深度は10cmである。壁面はわずかに外傾して立ち上がり、床面は貼床でほぼ平坦である。西壁面に沿って壁溝が確認されている。幅12~21cm、深さ7cmの規模である。覆土は最下層の床面上堆積土のみで多量のローム粒、ロームブロックを含む褐色土で覆われていた。

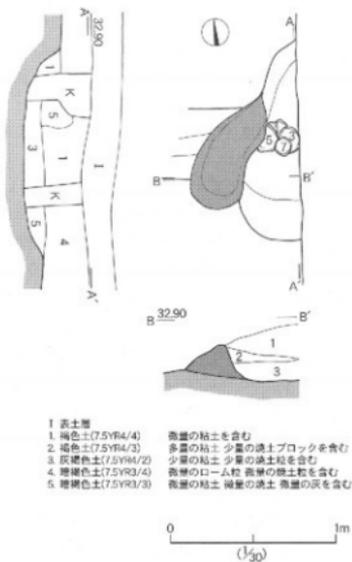
カマドは北壁やや西寄りに設置され、約半部は東側未調査区域に延びている。検出された規模は、長さ120cm、幅68cmで、袖部は壁面に貼り付けられ、灰白色粘土を構築材に、褐色・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は75×35cmの楕円形に掘り窪められている。煙道部は北壁を掘削して構築されており、幅25cm、奥行38cmを測る。覆土は5層確認された。

遺物は調査範囲が狭く限定されていたにも拘らず、土師器・坏2、甕3点、須恵器・坏3が検出された。いずれも床面直上に遺棄されたものである。1・2は土師器・坏である。ロクロ成形で、1は体部が1/2を残存している。体部が内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り。胎土に石英・長石粒を含む。色調は黒褐色(2.5Y 3/1)。2は底部のみ残存。底部は回転糸切り。底径4.6cmを測る。胎土に石英・長石・スコリア粒を含む。色調はにぶい黄橙色(10Y R 7/4)。3~5は土師器・甕である。3は口径12.4cm、器高12.7cm、底径7.4cmを測る小形の甕。口縁部の約1/2を欠損する。やや上げ底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反して端部は短く摘み上げられる。口縁部ヨコナデ。外面体部ヘラナデの後、上半部は一部縦位のヘラケズリ。下半部全周横位のヘラケズリ。内面ナデ。底部は木葉痕を残置している。胎土は石英・長石粒を含む。色調は明赤褐色(2.5Y R 5/6)を呈する。4も小形の甕。胴下半部のみ残存。現存器高7.2cm、底径7.0cmを測る。やや上げ底気味の底部から体部は外傾して立ち上がり、外面体部ヘラナデの後、横位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部は木葉痕を残置している。胎土は石英・長石粒を含む。色調はにぶい黄褐色(10Y R 4/3)を呈する。5は口径26.0cm、現存器高9.5cmを測る甕。口縁部の約1/4を残存する。口縁部は強く外反して端部は短く摘み上げられる。口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。胎土は雲母・石英・長石粒を含む。色調はにぶい褐色(7.5Y R 5/4)を呈する。6~8は須恵器坏の破片である。いずれもロクロ成形である。6は口径13.0cm、器高4.7cm、底径8.4cmを測る。体部下端は手持ちヘラケズリ。底面はヘラナデ。胎土に石英・長石粒を含む。色調は灰色(N 6/)。7は口径16.0cm、現存器高3.7cmを測る。色調は暗灰色(N 3/)。8は底部破片。底径7.4cm、現存器高2.3cmを測る。体部下端は手持ちヘラケズリ。底面は手持ちヘラケズリ。胎土に長石・石英粒を含有する。色調は褐灰色(10Y R 6/1)。新治産。いずれも9世紀前半の所産に比定される。

(小川 和博)

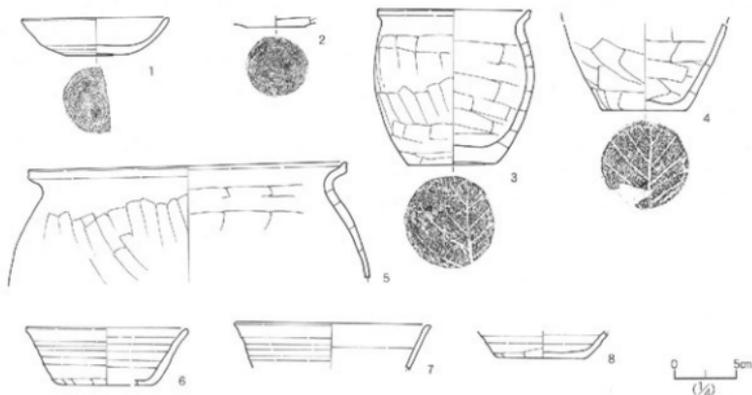


第38図 住居跡SI04実測図



- I 表土層
1. 褐色土(7.5YR4/4) 少量の粘土を含む
  2. 褐色土(7.5YR4/3) 多量の粘土 少量の焼土ブロックを含む
  3. 灰褐色土(7.5YR4/2) 少量の粘土 少量の焼土を含む
  4. 黄褐色土(7.5YR3/4) 少量のローム粉 少量の焼土を含む
  5. 暗褐色土(7.5YR3/3) 少量の粘土 少量の焼土 少量の灰を含む

第39図 住居跡SI04カマド実測図



## 第 4 節 中・近世

## 1) 土坑

## 土坑SK03 (第41図)

調査区西側3B区に位置する。確認面上面径72.0×54.0cm、底面径54.0×38.0cmの楕円形。底面はほぼ平坦で、最大12.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK08 (第41図)

調査区西側3B区に位置する。確認面上面径86.0×75.0cm、底面径63.0×50.0cmの楕円形を呈する。深度最大55.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK11 (第41図)

調査区西側2C・3C区に位置する。確認面上面径122.0×118.0cm、底面径105.0×102.0cmの円形を呈する。深度最大7.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。近世以降の所産であろう。

## 土坑SK13 (第41図)

調査区西側3C区に位置する。確認面上面径105.0×95.0cm、底面径65.0×49.0cmを測り、楕円形を呈する。深度最大23.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として北側に掘り込みが検出された。深さ8cmである。覆土は単一層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。近世以降の所産であろう。

## 土坑SK17 (第41図)

調査区中央2C区に位置する。確認面上面径119.0×118.0cm、底面径93.0×87.0cmの略円形を呈する。深度最大25.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK24 (第41図)

調査区中央2D区に位置する。確認面上面径110.0×91.0cm、底面径77.0×90.0cm楕円形を呈する。深度最大44.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、覆土は単一層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK32 (第41・48図)

調査区東側2F区に位置する。確認面上面径177.0×142.0cm、底面径124.0×99.0cmの楕円形を呈する。検出面からの深度最大19.0cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層からなる人為的堆積である。遺物は人骨と銭貨7枚が出土した。中世(16世紀代)の墓塚である。

検出された銭貨は「洪武通寶」、「開元通寶」、「永樂通寶」2枚、判読不明の銭貨3枚の合計7枚である。また人骨は歯を伴う頭部頸の一部、大腿骨の一部が残存していた。

図版番号	銭名	初鋳年 (西暦)	鋳造地名	計測値			
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
第48図1	洪武通寶	1363	明	24.49	24.57	1.82	3.46
第48図2	開元通寶	621	唐	24.85	24.83	1.74	2.88
第48図3	永樂通寶	1408	明	25.57	25.81	2.15	3.46
第48図4	永樂通寶	1408	明	25.30	25.09	1.60	3.76
第48図5	判読不明	模造銭	不明	25.64	24.58	2.07	3.76
第48図6	判読不明	模造銭	不明	24.35	24.69	2.05	3.18
第48図7	判読不明	模造銭	不明	24.33	24.38	2.03	4.54

## 土坑SK33 (第41図)

調査区中央4E区に位置する。本跡は南側の一部が未調査区域に広がる。確認面上面径133.0×131.0cm、底面径105.0×87.0cmの楕円形を呈するものと推定される。検出面からの深度最大59.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上り、底面は傾斜する。覆土は2層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK34 (第41図)

調査区中央4E区に位置する。本跡は南側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径92.0×41.0cm、底面径33.0×24.0cmの楕円形を呈するものと推定する。深度最大35.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径38.0×28.0cmの円形で、深さ15.0cmである。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK35 (第42図)

調査区東側3E区に位置する。本跡は南側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径81.0×52.0cm、底面径50.0×43.0cmの楕円形を呈するものと推定する。検出面からの深度最大20.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径26.0×23.0cmの円形で、深さ27.0cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK36 (第42・48図)

調査区東側3F区に位置する。確認面上面径123.0×90.0cm、底面径71.0×60.0cmの隅丸方形を呈する。深度最大43.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は土師質土器・内耳の土銅片が覆土から出土した。15世紀後半から16世紀前半の所産である。

## 土坑SK37 (第12図)

調査区中央2D・3D区に位置する。本跡はSK30を切って構築している。確認面上面径107.0×90.0cm、底面径92.0×75.0cmの長方形を呈する。深度最大16.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層からなる人為的堆積である。遺物として人骨が出土した。中世(16世紀代)の墓である。

## 土坑SK38 (第42図)

調査区東側3G区に位置する。本跡は南側が未調査区域に広がっている。確認面上面径169.0×158.0cm、底面径117.0×93.0cmの隅丸方形を呈するものと推定する。深度最大39.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で覆土は4層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK39 (第42図)

調査区東側2G区に位置する。確認面上面径154.0×82.0cm、底面径139.0×69.0cmの長方形を呈する。深度最大28.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径26.0×26.0cmの円形で、深さ24.0cm。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK55 (第15・42図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は縄文土坑SK56、60を切って構築している。確認面上面径37.0×31.0cm、底面径117.0×78.0cmの円形を呈する。深度最大119.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、図示できる遺物の出土はなかったが、人骨と思われる骨片が2点出土している。中世の土壌墓であろう。

## 土坑SK57 (第42図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は二段掘り土坑で、確認面上面径157.0×96.0cm、底面径75.0×72.0cmの長方形を呈する。深度最大47.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がり、南側が一段高くなっている。底面は平坦である。遺物は人骨の一部が出土した。北側を頭部とし、大腿骨が南に位置し、しかも折り曲っていたことから、座葬の形態を呈していた。なお副葬品等の遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 土坑SK58 (第15・42図)

調査区北西側2A区に位置する。本跡は西側が未調査区域に広がっている。確認面上面径74.0×30.0cm、底面径

43.0×14.0cmの円形を呈するものと推定する。深度最大40.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 61 (第43図)

調査区東側3F区に位置する。本跡は東側で S K 89 と重複している。確認面上面径133.0×92.0cm、底面径110.0×64.0cmの楕円形を呈する。深度最大27.01cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 73 (第43図)

調査区西側4C区に位置する。本跡は東側で S K 74、西側で S K 77 と重複している。確認面上面径141.0×135.0cm、底面径100.0×92.0cmの楕円形を呈するものと推定する。深度最大67.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層で人為的堆積である。遺物として馬骨が出土した。上下の顔面に相当する部分と推定されるが、骨は未検出である。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 74 (第43図)

調査区西側4C区に位置する。本跡は南側が未調査区域に広がり、西側で S K 73 を切って構築している。確認面上面径173.0×114.0cm、底面径148.0×107.0cmの楕円形を呈するものと推定する。深度最大54.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は6層からなる人為的堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 75 (第43図)

調査区南側4C区に位置する。本跡は南西側が未調査区域に広がっている。確認面上面径202×188.0cm、底面径169.0×155.0cmの方形を呈する。深度最大62.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は5層からなる人為的堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 77 (第43図)

調査区西側4B区に位置する。本跡は西側で S K 72 に切れ、東側で S K 81 を切って構築している。確認面上面径103.0×79.0cm、底面径67.0×40.0cmの円形を呈する。深度最大35.0cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 83 (第44図)

調査区南側5C区に位置する。確認面上面径252.0×128.0cm、底面径149.0×92.0cmの楕円形を呈する。深度最大26.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は鍋底状で、覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 84 (第44図)

調査区西側3B区に位置する。確認面上面径112.0×96.0cm、底面径88.0×80.0cmの円形を呈する。検出面からの深度最大13.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 85 (第44図)

調査区東側3G区に位置する。確認面上面径167.0×95.0cm、底面径143.0×62.0cmの長方形を呈する。深度最大8.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径26.0×22.0cmの円形で、深さ52.0cm。P2は径26.0×23.0cmの円形で、深さ22.0cm。P3は径31.0×17.0cmの楕円形、深さ21.0cm。P4は径18.0×17.0cmの円形で、深さ15.0cmである。覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑 S K 86 (第17・48図)

調査区南側4C区に位置する。本跡は縄文土坑 S K 86 を切っている。確認面上面径146.0×72.0cm、底面径129.0×51.0cmの長方形を呈する。深度最大101.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は

単一層の自然堆積である。遺物は土師質土器・小皿の底部破片が覆土から出土した。15世紀後半から16世紀前半の所産である。

#### 土坑SK89 (第43図)

調査区東側2F・3F区に位置する。本跡は土坑SK89と重複している。確認面上面径242.0×94.0cm、底面径213.0×90.0cmの長方形を呈する。深度最大16.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑SK90 (第44図)

調査区東側2G区に位置する。確認面上面径155.0×82.0cm、底面径137.0×71.0cmの長方形を呈する。深度最大39.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑SK91 (第44図)

調査区東側2G区に位置する。確認面上面径149.0×94.0cm、底面径76.0×67.0cmの長方形を呈する。深度最大7.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

#### 土坑SK92 (第44図)

調査区東側2F区に位置する。確認面上面径208.0×—cm、底面径167.0×—cmの不正方形を呈する。深度最大10.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径17.0×16.0cmの円形で、深さ9.0cm。P2は径25.0×22.0cmの円形で、深さ19.0cmである。覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

## 2) 竪穴状遺構

### 竪穴状遺構SX01 (第45・48図)

調査区中央3E区に位置する。確認面上面径357.0×300.0cm、底面径321.0×270.0cmの長方形を呈する粘土貼土坑である。主軸方位はN-79°-Wを指す。深度最大35.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は確認面でほぼ全面灰白色粘土を埋設している。遺物は土師質土器・内耳の土鍋片が覆土から纏まって出土した。15世紀後半から16世紀前半の所産である。

### 竪穴状遺構SX02 (第45図)

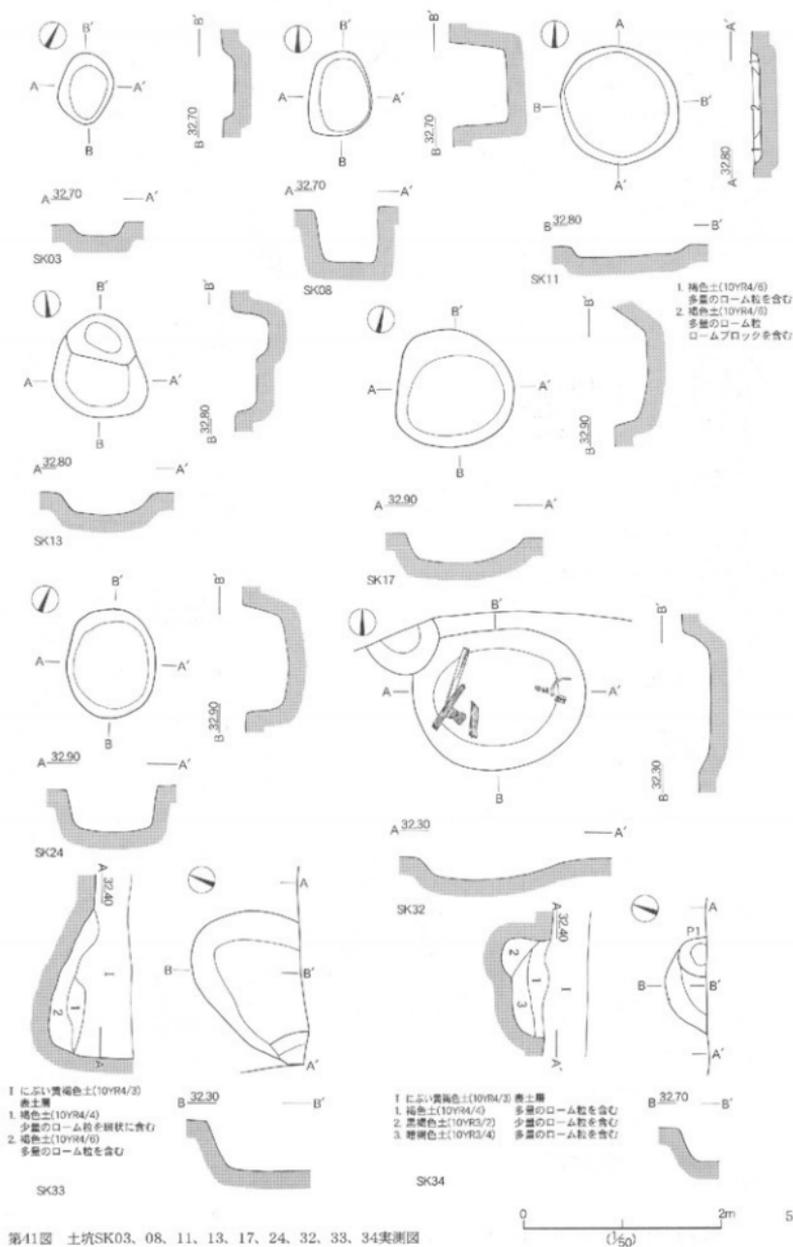
調査区東側2F区に位置する。明確な掘り込みはない。粘土張り土坑である。灰白色粘土の範囲のみ検出され、その確認面は上面径1.50×3.33cmの不正長方形を呈する。主軸方位はN-12°-Eを指す。粘土張り上面はほぼ平坦で、周囲に内部施設として柱穴状掘り込みが多数検出された。覆土は確認面でほぼ全面灰白色粘土を埋設している。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

### 竪穴状遺構SX03 (第45・48図)

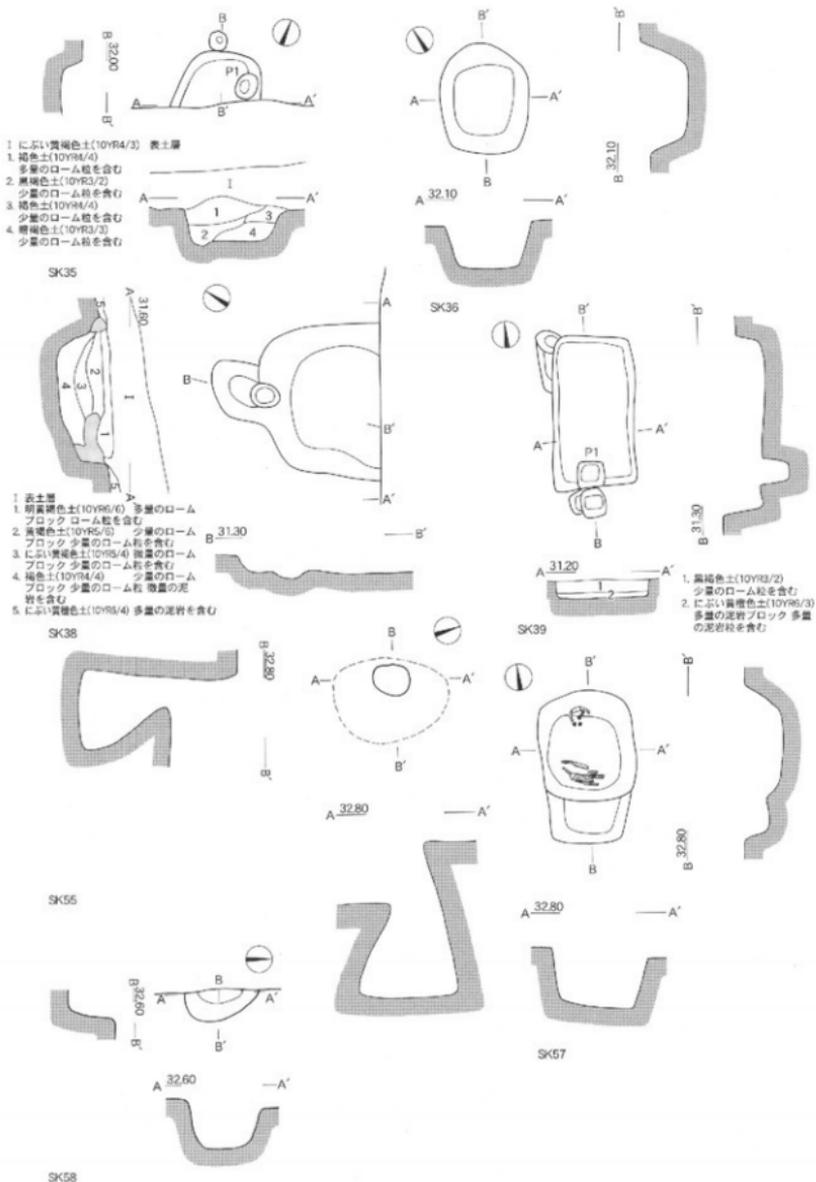
調査区東側3F区に位置する。確認面上面径309.0×243.0cm、底面径278.0×212.0cmの長方形を呈する。深度最大14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが7ヶ所検出された。覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は土師質土器・内耳の土鍋片が覆土から出土した。15世紀後半から16世紀前半の所産である。

番号	規模	深さ	形状	番号	規模	深さ	形状
P1	38×34	23.0	円形	P2	37×37	23.0	円形
P3	32×30	23.0	円形	P4	35×(28)	10.0	円形
P5	31×30	8.0	円形	P6	29×25	15.0	円形
P7	46×36	19.0	円形				



第11図 土坑SK03、08、11、13、17、24、32、33、34実測図



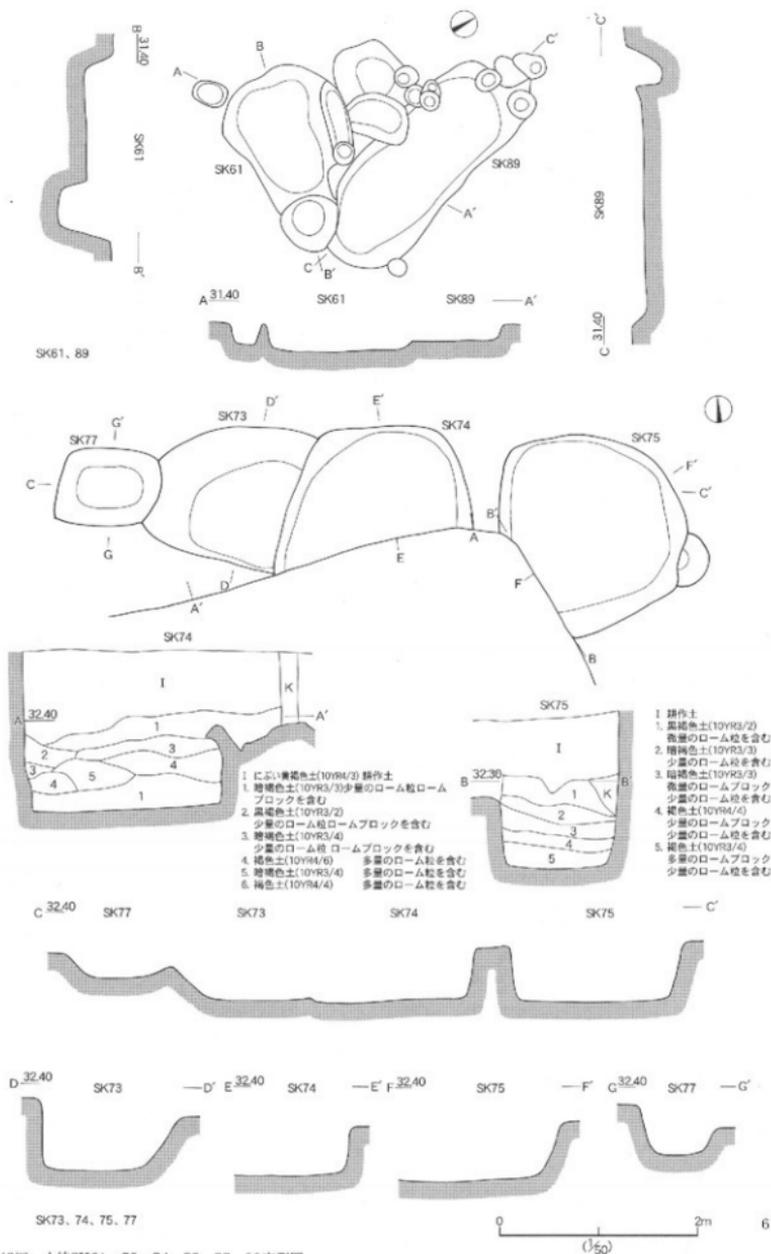
1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 表土層

1. 褐色土(10YR6/4) 少量のローム粒を含む
2. 黒褐色土(10YR3/2)
3. 少量のローム粒を含む
4. 褐色土(10YR6/4) 少量のローム粒を含む
5. 黄褐色土(10YR5/3) 少量のローム粒を含む

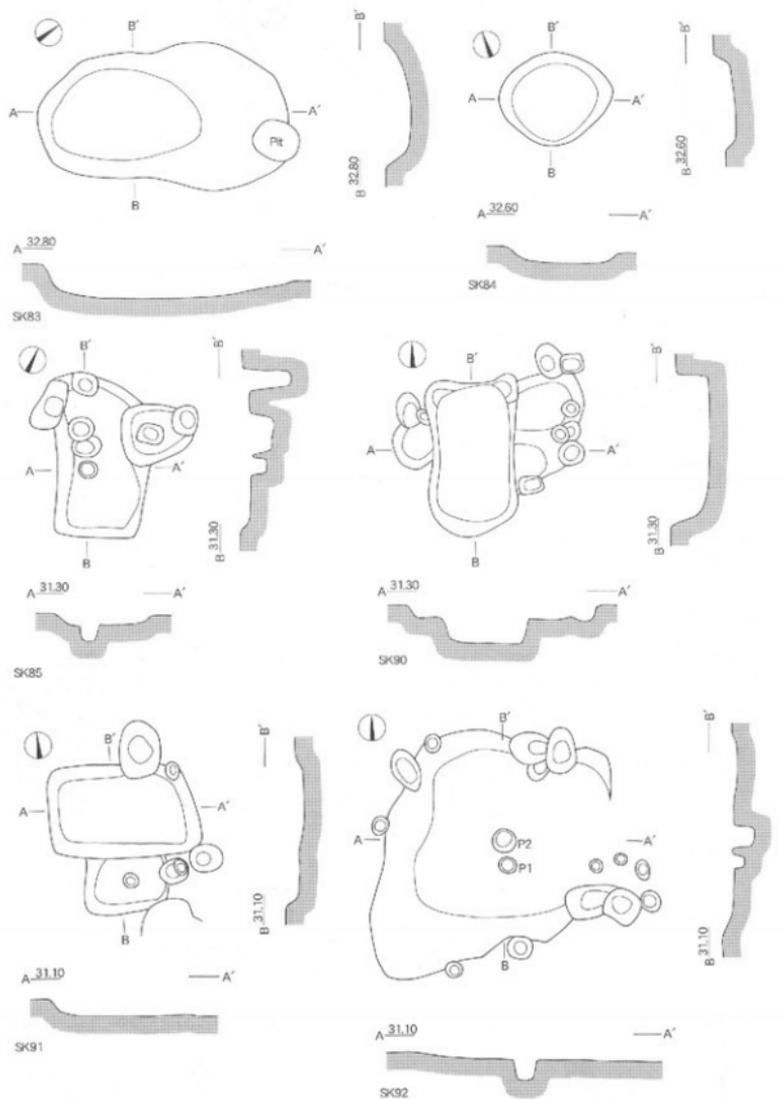
1 表土層

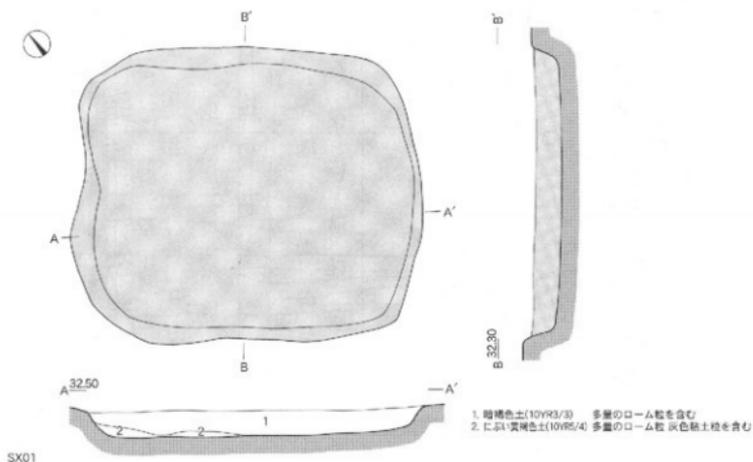
1. 黄褐色土(10YR5/6) 少量のロームブロック ローム粒を含む
2. 黄褐色土(10YR5/5) 少量のロームブロック 少量のローム粒を含む
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量のロームブロック 少量のローム粒を含む
4. 褐色土(10YR4/4) 少量のロームブロック 少量のローム粒 少量の泥岩を含む
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量の泥岩を含む

1. 黄褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒を含む
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 少量の泥岩ブロック 少量の泥岩粒を含む

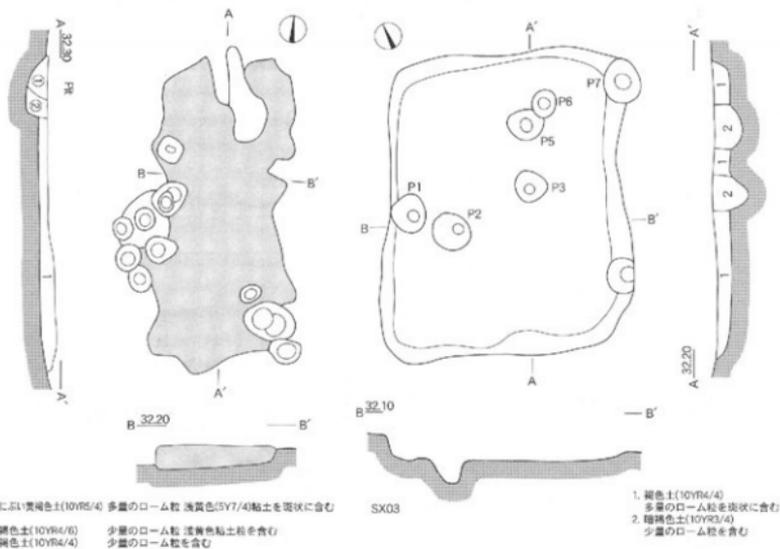


第43図 土坑SK61, 73, 74, 75, 77, 89実測図



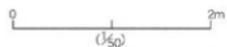


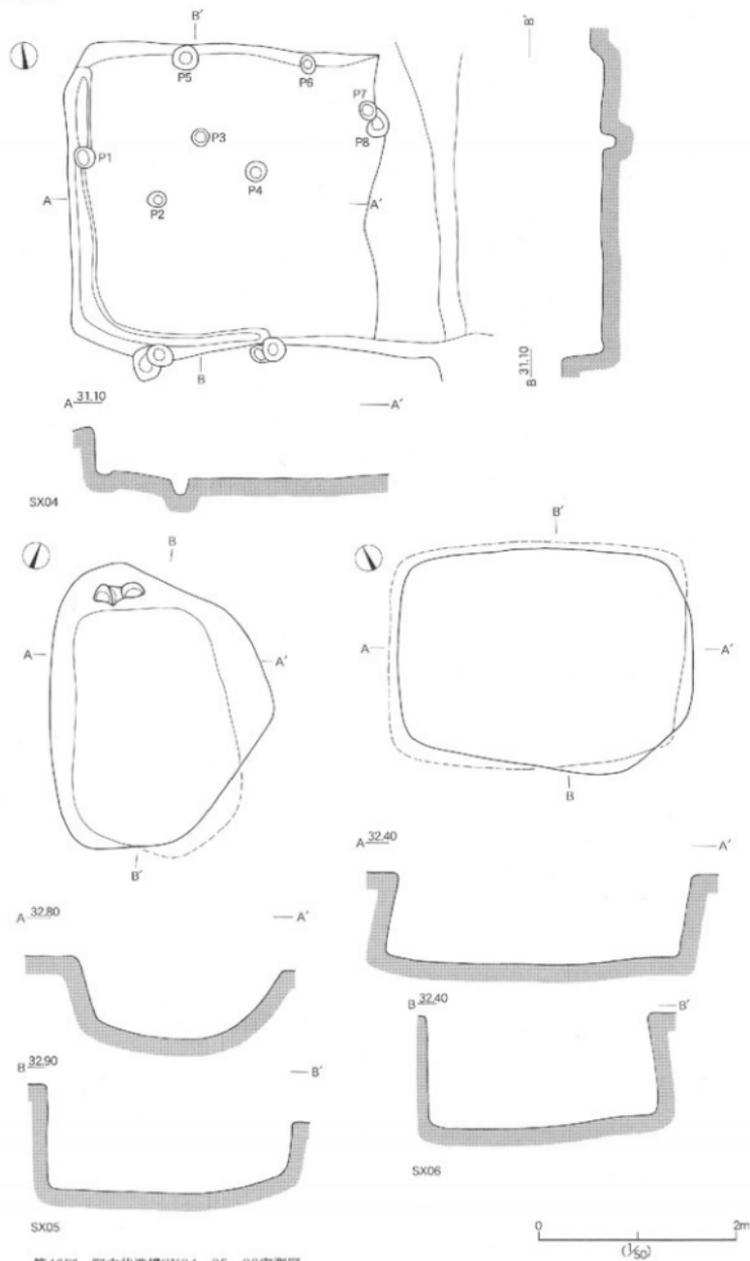
SX01



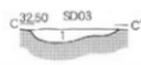
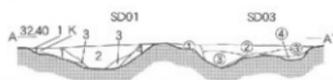
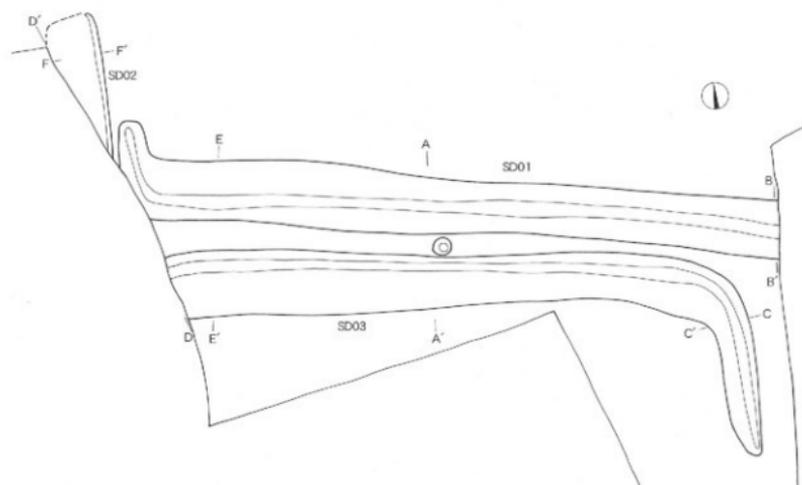
SX02

SX03





第46图 整穴状遺構SX04、05、06実測図



SD01

1. 黒褐色土(10YR3/2) 多数のロームブロック 少量のローム粒を含む
2. 黒褐色土(10YR2/3) 少量のローム粒を含む 雑くしまりがある
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒を含む
4. におい黄褐色土(10YR6/4) 多数のロームブロック 少量のローム粒を含む

SD03

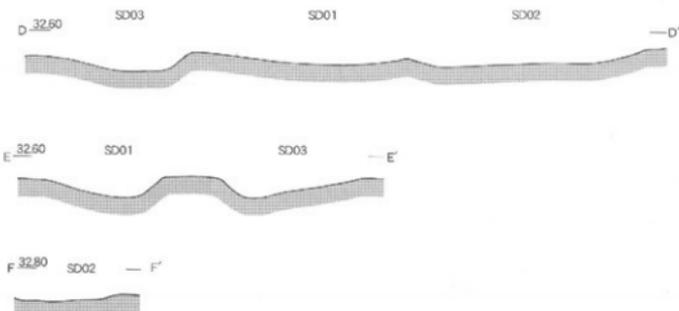
- ① におい黄褐色土(10YR6/4) 多数のロームブロック 少量のローム粒を含む
- ② 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒を含む
- ③ 暗褐色土(10YR3/4) 多数のローム粒 多数のロームブロックを含む
- ④ におい黄褐色土(10YR6/4) 多数のローム粒を含む

SD01

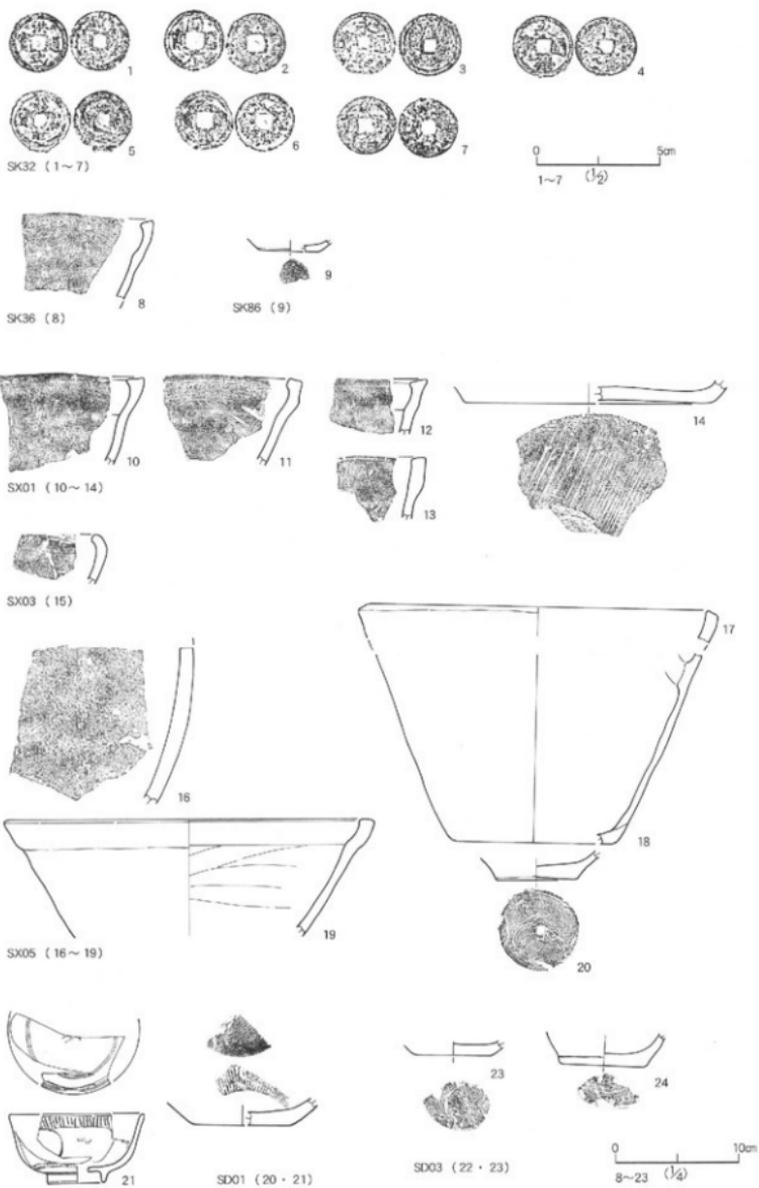
1. 表土層
2. におい黄褐色土(10YR4/3) 多数のローム粒を含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒を含む
4. におい黄褐色土(10YR6/4) 多数のローム粒を含む

SD02

1. 褐色土(10YR4/6) 少量のローム粒を含む



SD01, 02, 03



#### 竪穴状遺構 S X 04 (第46図)

調査区東側3G区に位置する。確認面上面径316.0×300.0cm、底面径298.0×292.0cmの長方形を呈する。深度最大29.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが8ヶ所検出された。覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

番号	規模	深さ	形状	番号	規模	深さ	形状
P 1	22×20	15.0	円形	P 2	18×15	16.0	円形
P 3	18×18	7.0	円形	P 4	21×20	11.0	円形
P 5	27×25	11.0	円形	P 6	19×14	13.0	楕円形
P 7	19×18	11.0	円形	P 8	22×20	4.0	円形

#### 竪穴状遺構 S X 05 (第46・48図)

調査区北西側2A区に位置する。確認面上面径288.0×228.0cm、底面径235.0×152.0cmの楕円形を呈する地下式坑である。深度最大87.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、覆土は単一層の自然堆積である。

遺物は常滑・甕、土師質土器・内耳の土鍋片、小皿が覆土から出土した。特に内耳鍋は比較的臍まっており、15世紀後半から16世紀前半の所産である。

#### 竪穴状遺構 S X 06 (第46図)

調査区南側4C区に位置する。確認面上面径298.0×225.0cm、底面径301.0×231.0cmの長方形を呈する地下式坑である。深度最大98.0cmを測り、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、一部オーバーハングしている。底面は平坦で、図示できる遺物の出土はなかった。中世の所産であろう。

### 3) 溝状遺構

#### 溝状遺構 S D 01 (第47・48図)

調査区の南西端で検出された。区画溝の様相を呈している。なお、東側は未調査区域に延びているため未調査である。部分調査のため全貌は不明であるが、西端で北側へ鉤状に短く屈折する。確認された規模は長さ29.0m、幅115.0～275.0cm、深さ16.0～43.0cmを測る。方位はN-79°-Wにとる。壁面は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦で、全体的に硬く踏み固められており、区画溝としながら道としても利用していた可能性が高い。覆土は黒褐色土を主体とする4層からなる自然堆積である。

遺物は瀬戸・美濃系の端反碗（19世紀後半）、丹波焼・播磨の底部破片（17世紀代）が底面から出土した。少なくとも埋没時期は近世以降であろう。

#### 溝状遺構 S D 02 (第47図)

調査区の西端で検出された。南側に延びる確認調査分は保存処理が執られているため未調査である。したがって検出できたのはわずかに北端部のみである。確認された規模は長さ4m50cm、幅100.0～210.0cm、深さ5.0～26.0cmを測る。方位はN-2°-Wにとる。壁面は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦で、全体的に硬く踏み固められており、区画溝であろう。覆土は自然堆積土層である。単一層の黒褐色土で多量のローム粒、ロームブロックを含む。

遺物は土器片が覆土から出土した。

#### 溝状遺構 S D 03 (第47・48図)

調査区の南西端で検出された。溝 S D 01 とほぼ平行して走る区画溝であろう。なお、S D 01 とは逆に西側の延長部は未調査区域に延びている。やはり部分調査のため全貌は不明であるが、東端で南側へ鉤状に屈折する。確認された規模は長さ30.0m、幅120.0～405.0cm、深さ13.0～39.0cmを測る。方位はN-81°-Wにとる。壁面は外

傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦で、全体的に硬く踏み固められており、区画溝としながら道としても利用していた可能性が高い。覆土は黒褐色土を主体とする4層からなる自然堆積である。

遺物は古瀬戸・皿（中世）、土師質土器・小皿が覆土から出土した。15世紀後半から16世紀前半の所産である。

#### 4) 掘立柱建物跡

##### 掘立柱建物跡SB01（第49図）

調査区の東側2F区に位置する。北側が未調査区域に広がっている。梁行1間以上、桁行2間以上で、東西棟の側柱建物と推定した。したがって桁行方位はN-80°-Wをとる。柱筋の通りは整っており、柱配りも整然としている。P2、P3とした2本の柱穴底面が柱のアタリを確認できたので、その位置から規模を測ると検出された桁行長3.00m、梁行長は5.20mで、間尺は平均で1.90mになる。柱掘形は円形、楕円形があり、全体的には円形が主となる。掘形径は54~128cm、深さは22~57cmを測る。なお、時期を決定できるような土器等の出土遺物はなかったが、隣接するSB02と方位が一致することから中世としてよいであろう。以下柱穴規模については一覧表とする。

番号	規模	深さ	形状	番号	規模	深さ	形状
P1	73×50	41.0	楕円形	P2	128×60	28.0	楕円形
P3	56×48	22.0	円形	P4	54×51	57.0	円形

時期は15世紀前後と推定される。

##### 掘立柱建物跡SB02（第49・53図）

調査区の中央2E区に位置する。柱穴群が多数検出されたため、どの柱穴列が一身舎の建物跡か判断に苦慮している。実際桁行が少なくとも4列確認でき、これが南北に移築することによって、2棟分の建物跡であるのか、あるいは両面廂建物跡であるか、今後の検討問題とし残しておく。しかし、ここでは両面廂建物跡1棟分として理解すると、梁行1間、桁行4間で、桁行方位はN-88°-Wにとる廂をもつ東西建物と理解できる。いずれも柱筋の通りは整っており、柱配りも整然としている。規模を測ると桁行長5.00m、梁行長は9.2mで、間尺は平均で2.05mになる。柱掘形は円形、楕円形があり、全体的には円形が主となる。掘形径は40~192cm、深さは4~97cmを測る。

遺物は、古瀬戸・灰釉瓶子（12世紀末葉~14世紀末葉）、灰釉深皿（15世紀代）、土師質土器・皿のほか、砥石4点が覆土から出土した。古瀬戸・灰釉瓶子は胴上半部の破片であるが、優品である。また同じく古瀬戸・灰釉深皿も小破片であるが、秀品である。なお、砥石は棒状を呈するもの2点、平板状を呈するもの1点、筋目を入れたものがある。第53図5は凝灰岩製の直方体の完存品。長さ9.396cm、幅2.445cm、厚さ2.302cm、重さ83gを測る。両端部を除く4面とも研磨が入念である。6も同じく凝灰岩製の直方体砥石。両端を欠損している。現存の長さ4.98cm、幅1.739cm、厚さ1.571cm、重さ22.88gを測る。7は板状を呈する欠損品である。一面が薄く使用頻度の多さを示している。長さ5.288cm、幅3.789cm、最大厚さ2.387cm、重さ45.78gを測る。8は砂岩製で、図表面には幅3mm前後の筋がほぼ平行して入れられている。裏面および右側面の研磨は丁寧である。

以下柱穴規模については一覧表とする。

番号	規模	深さ	形状	番号	規模	深さ	形状
P1	110×72	57.0	楕円形	P2	(108)×68	76.0	楕円形
P3	152×120	97.0	楕円形	P4	55×44	46.0	円形
P5	192×106	33.0	楕円形	P6	44×41	18.0	円形
P7	111×60	92.0	楕円形	P8	66×42	54.0	楕円形
P9	90×70	40.0	不正円形	P10	90×50	45.0	楕円形
P11	(22)×(20)	4.0	円形	P12	116×66	43.0	楕円形

P 13	54×38	55.0	楕円形	P 14	53×49	42.0	円形
P 15	88×58	73.0	楕円形	P 16	46×40	42.0	円形
P 17	(92)×(70)	34.0	楕円形	P 18	(69)×52	32.0	円形

構築時期は15世紀前後に比定される。

#### 掘立柱建物跡S B03 (第49図)

調査区の東側3E区に位置する。南側が未調査区域に延びている。梁行2間、桁行2間以上で、桁行方位はN-12°-Eにとる南北棟の掘立柱建物である。柱筋の通りは整っており、柱配りも整然としている。現存規模は桁行長4.40m、梁行長は4.60mで、間尺は平均で2.00mになる。柱掘形は円形、楕円形、方形、長方形があり、全体的には方形が主となる。掘形径は50~85cm、深さは45~87cmを測る。なお、時期を決定できるような土器等の出土遺物はなかった。以下柱穴規模については一覧表とする。

番号	規模	深さ	形状	番号	規模	深さ	形状
P 1	140×74	22.0	不正楕円形	P 2	(84)×58	24.0	楕円形
P 3	38×33	33.0	円形	P 4	55×52	66.0	円形
P 5	76×38	38.0	楕円形				

時期を決定付ける遺物の出土はないが、S B01.02の配置からみて、同時期の15世紀前後に比定されるものと推定される。

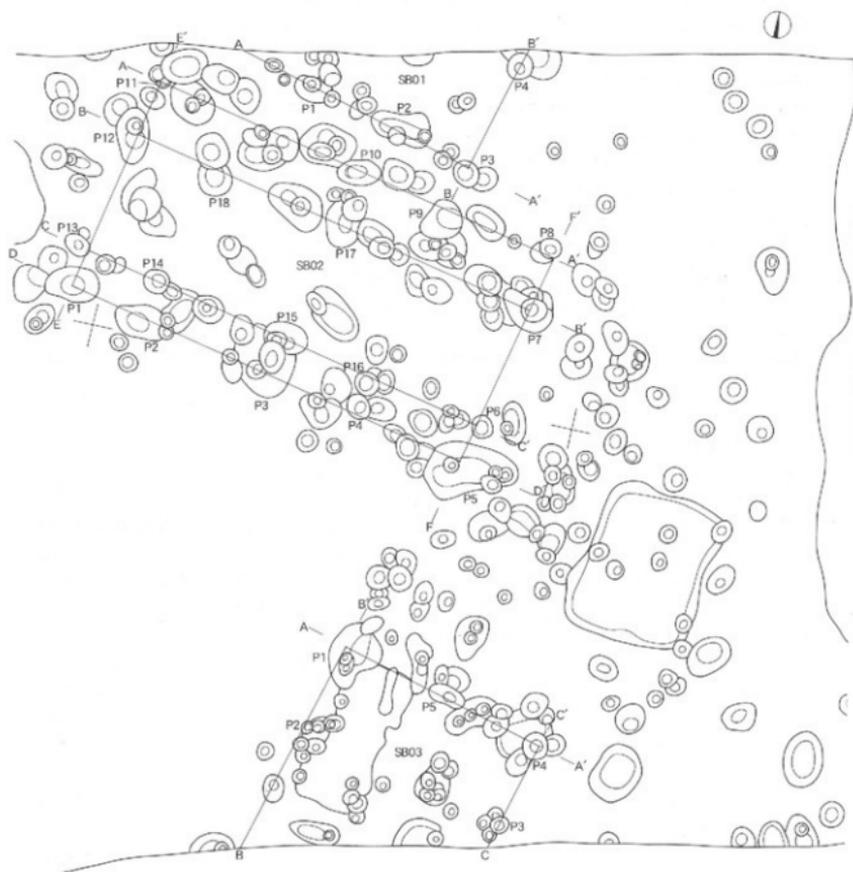
### 5) 段切り状遺構

#### 段切り状遺構S X07 (第51~53図)

調査区の東端2 F、2 G、3 F、3 G区に位置する。建物群が高位面に対し、東側に傾斜する部分に大規模な段整形が施されていた。高位面との比高差46~88cmで、標高では高位面30.94m、低位面30.61mを測り、その差は33cmで、東側へ傾斜している。その傾斜角度はわずかに1°で、ほぼ平坦といってよいであろう。検出面での範囲は南北15m、東西10.7mの長方形を呈している。267本の柱穴群に、2基の方形の竪穴状遺構(SX04, SK92)、土坑(SK38, 39, 61, 85, 89, 91)等が確認されている。なかでも柱穴状遺構が集中的に検出された。規模は径30cm、深さ20cm前後の円形ピットが最も多く、全体的にはばらつきがある。これら柱穴群のうち、ひとつの構造物として組み立てることができるかを何度も模索したものの、個々には直線的に並んでも間尺に粗密がありすぎ、さらに柱筋が明確な配置構造をもつものがなく、これらすべてを分離し柱穴群としたが、少なくとも中世の生活空間であることに誤りないであろう。また墓坑と推定される長方形土坑も検出されている。段上にも掘立柱建物跡とともに墓坑が確認されているが、大きく掘り込まれた段切り遺構内にも存在することが明らかになった。

遺物は古瀬戸・灰釉平碗(13世紀中葉~後半)、常滑・甕類、鉢、鉢、広口壺(13~14世紀)、土師質土器・摺鉢、内耳鍋、小皿、皿片のほか、近世から近代の陶器・壺の小破片が覆土から出土した。なお、全体の様相から判断して15世紀後半から16世紀前半の所産であろう。

(小川和博)



A 32.50

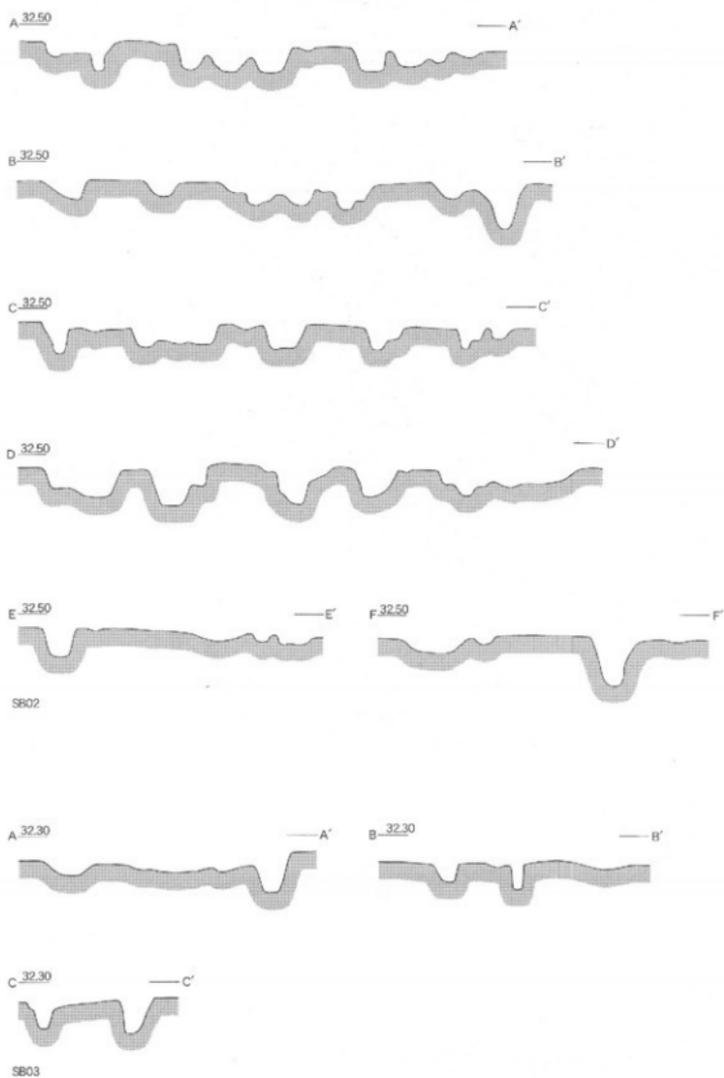
— A'

B 32.50

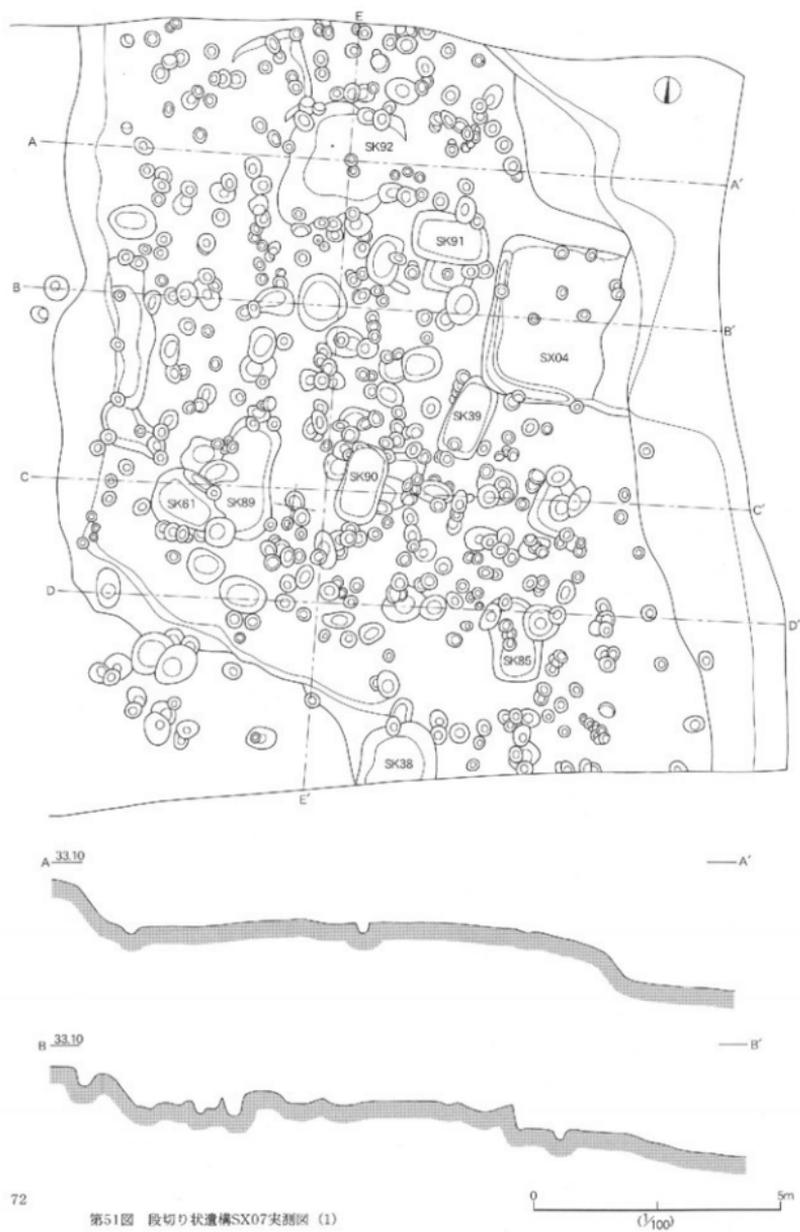
— B'



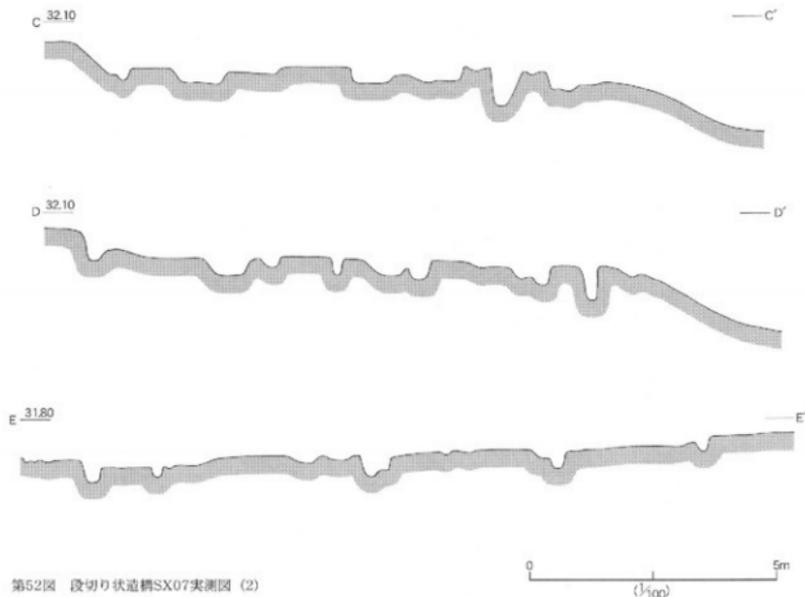
SB01



第50図 据立柱建物跡SB02、03実測図(2)



第51図 段切り状遺構SX07実測図(1)



第52図 段切り状遺構SX07実測図(2)

### 第5節 遺構外出土遺物(第54図)

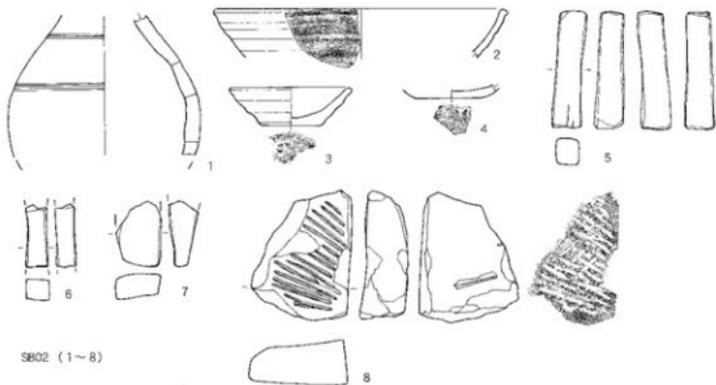
遺構外で縄文時代と弥生時代の遺物が出土している。縄文時代では早期末葉の条痕文系土器と石器類が検出されているが、石器類はいずれも縄文中期に比定される。また弥生時代の土器片が1点のみ検出された。後期に比定される。

1～16は早期末葉条痕文系の野島式土器である。いずれも地文に条痕文を施し、胎土に繊維を含む。1は口縁部破片。口唇部に刻目が施される。2は沈線による幾何学文を施す。3・4は微隆起線文と沈線による幾何学文を施す。5～16は条痕文のみで、16を除き表裏面に条痕文が施文されている。

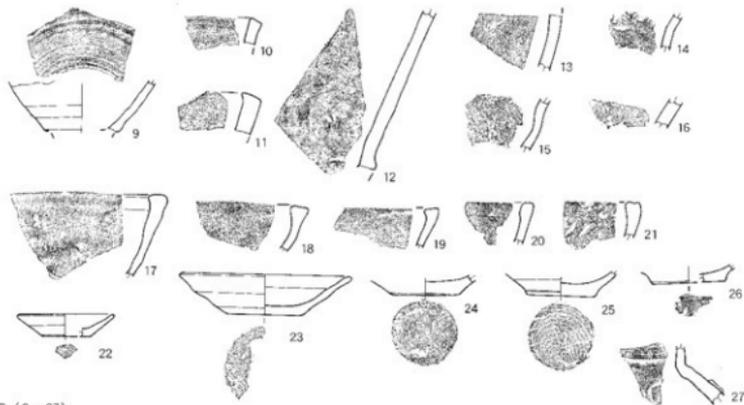
石器は磨製石斧、石棒と石皿が検出された。18～22は定角式磨製石斧で、いずれも優品な石斧である。ほぼ完存品である。18は裏面が作業中大きく剥離したものを部分的に研磨を施し再生している。刃部の刃潰れ部分の再研磨が確認される。20は側面部の作出が丸みをもたせ、明瞭な稜を有しない。22の刃部は撥状を呈し、25は小形磨製石斧であるが、基部の欠損後、折損部分に研磨を施し再使用している。26は石棒の破片である。27は安山岩製の石皿の破片。表裏面に凹部を伴う。

28は弥生土器の破片。付加条縄文を施した甕であろうか。後期に比定される。

(小川和博)

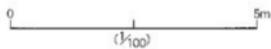


SB02 (1~8)



SX07 (9~27)

第53図 掘立柱建物跡SB02出土遺物及び段切り状遺構SX07出土遺物





第54図 国神道跡調査区出土遺物

## 第Ⅲ章 まとめ

今回調査対象となった国神遺跡は、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世にわたる複合遺跡である。これらは竪穴住居跡や土坑群が検出された縄文時代、奈良・平安時代だけではなく、中・近世における遺構・遺物の検出は行方市内に限らず県南における霞ヶ浦沿岸域で最も注目されることとなった。これは霞ヶ浦という絶対的な後背地にもつ景観は時代を問わず当該地における中心的なムラ形成が展開されていたことは十分想定されることである。ここで問題提起ということで特記すべき事項について簡単に触れまとめたい。

### 1) 縄文時代

#### a) 早期後半の土器群

まず遺構の検出はなかったものの、縄文時代早期後半の条痕文系土器が包含層から出土している。

周辺資料の不足からこれら条痕文系の土器がまとめて検出されたこと自体重要であろう。しかし、全体的に小破片で、表裏面に条痕文を施文する以外に有文土器が僅かに3点である。その特徴となる意匠文は沈線および微隆起線文による区画内に沈線を充填させる斜行文もしくはY字状文を基本とする幾何学文である。これはいわゆる「区画内充填」「区画内集合沈線」を特徴とする野島式土器である。霞ヶ浦沿岸域における野島式土器の提示は今後大いに問題とされるであろう。

#### b) 中期土坑について

縄文時代の遺構の中心となるものは中期中葉から後半の土坑群である。竪穴住居跡はわずか1軒であるが、土坑は62基が複雑な切り合い関係で検出された。これら中期土坑は長い縄文時代において最も特徴的な形態をもち、究極的な「土坑文化」を生み出している。そのためさまざまな形態が出現するとはいえ、基本形はあくまでも円形を固守する。そして横断面形における属性から導かれる「フラスコ状」「袋状」「円筒状」の3形態が基本となる。フラスコ状とは「頭部が細く括れ、断面は底径が口径よりもはるかに大きくなるもの。袋状とは「底径が口径をやや上回るもの」。円筒状とは「口径と底径がほぼ同じ大きさのもの」(坂口2003)となる。しかし、今回この国神遺跡で検出された多くは、確認深度が浅いため、フラスコ状と袋状の決め手となる「頭部」の検出が不十分のため両者の判断を困難した。そこで筆者は底径係数(口径÷底径×100)を求めることを提案した。底径が口径よりも大きくなる係数90以下を「フラスコ状」、係数91~99を「袋状」、係数100以上を「円筒状」と分類し(小川2005)、国神遺跡の検出例を分類してみると、フラスコ状はSK81、82等を代表とする4基(6%)、袋状はSK09、14、29等を代表とする11基(18%)、左記以外の大半が円筒状で47基(76%)となる。また坑底施設についてもバラエティーに富んでおり一様ではないが、土坑内に1本から数本の柱穴状ピットを穿っているものが28基で約半分近くを占めている。なかでもSK20は三方向に土器を横向きにして埋設する小ピット、いわゆる「ソケットピット」が穿っており、その1ヶ所に土器が嵌め込んだ状態で検出された珍しい例である。またSK45は北関東で多くみられる子ピットと呼ばれる貯蔵穴状の径の大きな「サイドポケット」が設置されていた。因みにピットや小土坑等の施設を伴わない無施設土坑も確認されている。

さて、こうした多くの土坑の覆土中には土器を主体とする遺物が包含されている。しかし小規模土坑ですら遺物が混在し一型式以上のタイムラグが存在していることから、その土坑の帰属時期を判断するのが困難なものがある。しかし、報文中の図示したように散って床面近くから出土した土器を当該期に所属するものと推定すると下記のとおりとなろう。

阿玉台Ⅱ式期	SK18・29・50・66・70
阿玉台Ⅲ式期	SK54
阿玉台Ⅲ～Ⅳ期	SK56・79・80
阿玉台Ⅳ式期	SK05・12・53・60・65・67・82

阿玉台Ⅳ～中峠式期	SK25・30・45
中峠式期	SK10・12・14・31・41・52・56・67・68・71
加曾利E1式期	SK01・02・04・06・07・09・15・16・22・23・26・27・28・40・43・48・49・ 64・69・81
加曾利E2式期	SK63
時期不明	SK19・20・21・44・46・47・51・59・62・68・70・72・76・87・88

#### c) 中期土器について (第55図)

ここで改めて土坑より出土した土器群についてその様相を段階ごとに素描を試みると下記のとおりである。ここ農ヶ浦東岸域における良好な資料であり、今後の標識となりうるものと理解している。

**I 段階** (第55図1～4) 隆帯に沿って二列の角押文を施文する。阿玉台Ⅱ式。表示資料はいずれも波状口縁を有する深鉢である。隆帯による楕円形区画文や意匠文を施文する。

**II 段階** (第55図5～8) 隆帯に沿って幅広の角押文や爪形文を施文する阿玉台Ⅲ式。5は波状口縁に隆帯上に連続突文を施文する。6は波状隆帯を周回させ、頭部に角押文を施す。

**III 段階** (第55図9～16) 隆帯に沿って沈線文を施文する阿玉台Ⅳ式。9～13は山形把手が大きくなる波状口縁の深鉢。隆帯上に縄文を施している。

**IV 段階** (第55図17～20) 連続コの字文を基本とする中峠式。17は連続コの字文と角押文を併文させた樽型の深鉢。18は横状把手を有し、胴部文様が櫛歯状工具による波状懸垂文を垂下させる。

**V 段階** (第55図21～27) 加曾利E1式。口縁部文様帯は背割り隆帯によるクランク文、渦巻文、横S字文等を施文する。27は大木8b式。

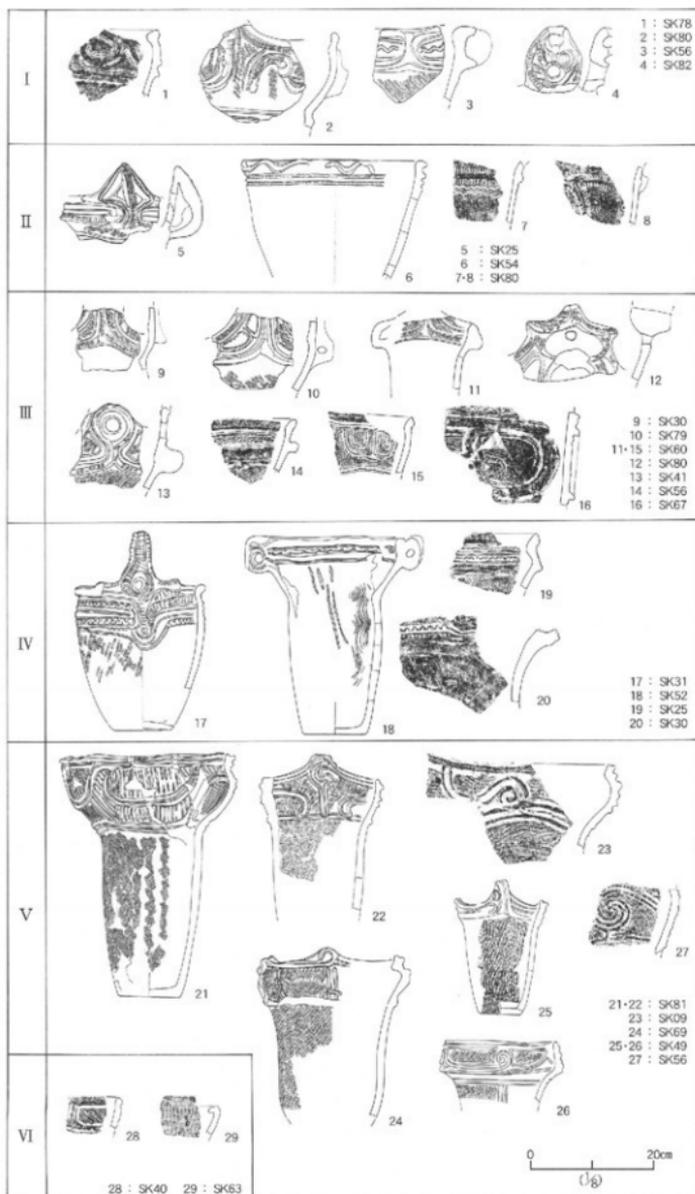
**VI 段階** (第55図28・29) 加曾利E2式。28はキャリバー形の深鉢。沈線による杵状文を配する。29は縦位の条線を施文する「曾利系土器」である。

#### d) 取壊デゴ (埋納) 遺構について

調査区中央で検出された土坑SK22は、径2.4mを測り、本遺跡における標準タイプの円筒状土坑であるが、覆土中の遺物の少なさは規模の割りに極端に限定されていた。しかし、南東壁際で浅鉢の11縁部破片に覆い被されて、石斧が3本出土した。いずれも実用的な耐久消費財である定角式磨製石斧1点と礮石斧2点である。これは明らかにデゴ埋納遺構の好例である。

まず長さ11cmを測る定角式磨製石斧は完形の優品であるが、刃割れに研磨を加え丁寧に補修していた。石材の乏しい農ヶ浦沿岸域においては、石材の手入れだけでなく、製作に手間のかかる道具であることから周辺から搬入されたもので、補修研磨のみここで行われたものと推定する。また礮石斧はかつて未加工の原材を含め多量に出土した千葉県神崎町原山遺跡(小川他1995)で触れたことがある。その形状は長さ10cm以下、幅2cm前後、厚さ1cm以下の扁平で細長い艶状を呈し、(A)縁の端部に調整剥離し刃部を作出させ、更に刃部を研磨するタイプと(B)直接端部に研磨して刃部とするタイプの二種あることを明らかにしたが、さらに本遺跡における(C)端部を調整剥離したまま刃部とするタイプがあり、礮石斧製作に三通りの製作工程があることが判明した。したがってここでは礮石斧AとCタイプの二種があった。素材さえ入手できれば製作簡易な道具のひとつである。

なお本遺跡を全面調査し明らかにしたわけではないが、形の整った定角式磨製石斧と礮石斧は当土坑以外に出土していない(なお、完形の磨製石斧はその他3点出土しているが、いずれも秀品ではない)。これを3点並べて土器破片で覆い隠す行為は、人為的であり、この土坑を隠匿施設としていたことは明らかである。しかし、これらは土壌層における副葬品とするには人骨等の出土がなく根拠に乏しいが、実用品とはいえかつて使用していたものを補修研磨して形を整え、さらに簡易道具であるが、使用可能な道具をそのまま使用することなく、土器破片で覆い被されて埋納していた事実は祭祀行為のひとつとして理解できないであろうか。



### 3) 奈良・平安時代

奈良・平安時代、つまり8世紀から9世紀にかけての遺構として竪穴住居跡が3軒検出された。いずれも完全な形で調査されたわけではなく、未調査区域に延びていたため、不十分なままの状況であった。いずれも方形を呈し、4号住居跡(S104)のみ北側にカマドの設置が認められた。また3号住居跡(S103)床面直上から出土した須恵器・坏は重ね焼きの状態で熔着したものであり、坏内部に窯壁の一部が崩落して熔着していた。8世紀前半のものだとされているが、本跡は9世紀前半に比定されている。

### 4) 中・近世

中世以降の検出遺構として、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、粘土貼土坑、墓壙、土坑、溝状遺構、ピット群、段切り状遺構である。まず掘立柱建物跡として3棟確認されたが、そのうちSB02とした1棟のみ完全な形で検出できた。現段階では柱穴が多過ぎて規模を正確に捉えることが難しく図面上において柱筋を復元することとなり、南北両面掘建物跡とした。注目はこちらから比較的躰まって出土した遺物である。とくに古瀬戸・灰釉瓶子(12c末~14c末)と灰釉深皿(15c)の出土は中世後半の構築であることを示唆している。

竪穴状遺構は6基を数える。粘土貼土坑と大形土坑である。そのうちSX01と02がいわゆる粘土貼土坑である。とくにSX01は厚さ35cmもの灰白色粘土を敷き詰めたもので、土坑内から内耳土鍋片が出土しており、これによって中世後期の遺構であることが判明した。またSX03と04は大形土坑である。土坑内に柱穴を伴い、これは以前作業小屋や倉庫程度の建物と推定したもので(小川 )。支え柱のみの切り妻状に茅葺や皮葺屋根で覆った簡素な建物を想定している。またSX05・06は壁面がオーバーハングしている地下式坑に分類される。いわゆる地下式坑と呼ばれる大形土坑は地下室に通じる竪坑と地下室からなる。SX05の北側には階段上の掘り込みがみられ、竪坑の残存と推定されるが、SX06は竪坑が明瞭ではない。

そのほかに多くの土坑が検出されている。その形状は比較的小型で円形に限定されたものではなく、長方形や楕円形、不正形などさまざまあり、それらに配置上の規則性はみられない。しかし、その内明かに墓壙であることがわかるものがある。副葬品としての遺物は少ないものの、人骨が出土した土坑が4基確認されている。しかもSK32では「洪武通寶」「永樂通寶」など六道銭である銭貨を伴っていた。また土坑SK73ではウマの頸骨が出土している。一部分土坑によって切られており、正確な規模は不明であるが、少なくとも長軸は2mを越えるものと推定される。なお、同じような楕円形土坑が3基集中しており、同じ目的すなわちウマを埋葬する場であった可能性がある。

なお、中世遺構で注目されるのは東側斜面で構築された「段切り遺構SX07」の存在である。整地以前の自然地形を推定してみると、遺跡東側は台地高位部から緩い傾斜面を形成しながら、標高30m前後から急傾斜して低位部へ移行する。この緩傾斜面を切り土してテラス状の平坦部を構築したもので、ここに竪穴状遺構や土坑などが集中して検出された。低位部からみると腰曲輪状を呈し、高位部から一段下がって整地している。おそらく農



浦に通ずる谷筋にあたる東側斜面部は、一段高い高位部に構築された居住区域への「出入口の要素を有した施設群」の構築場であった可能性が高いと推定される。

(小川和博)

参考文献

- 小川和博他1993「石神城跡—茨城県那珂郡東海村所在中世城跡の調査」東海村遺跡調査会  
小川和博他1995「原山遺跡—神前カントリークラブ埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」(財)香取郡市文化財センター  
小川和博2006「茨城県常陸大宮市高ノ倉遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会  
坂口 隆2003「縄文時代貯蔵穴の研究」『未完成考古学叢書5』  
佐原眞1985「ヨーロッパ先史考古学における埋納（デポ）の概念」国立歴史民俗博物館研究報告第7集 国立歴史民俗博物館  
田中英司2001「日本先史時代におけるデポの研究」千葉大学考古学研究叢書1  
茂木雅博他1992「於下貝塚発掘調査報告書」麻生町教育委員会

## 付章 国神遺跡出土遺物観察表

国神遺跡 土器片・土製円板計測一覧表

番号	遺構番号	回数番号	計測値(mm)			重量	部位	加工状態	断面	刃先等の状態
			長さ	幅	厚さ					
1	SK04	第18回-2	34.33	34.86	9.01	13.74	胴部	打割調整	不正角円形	長軸に一致
2	SK06	第18回-5	27.66	23.58	9.35	7.52	胴部	研磨	楕円形	長軸に一致
3	SK18	第20回-5	33.66	36.49	10.03	14.78	胴部	打割調整	方形	長軸に一致
4	SK23	第22回-9	42.15	34.60	10.87	18.51	胴部	研磨	楕円形	円板
5	SK27	第22回-6	33.25	36.13	20.42	23.14	口縁部	打割調整	不正三角形	長軸に一致
6	SK31	第23回-5	33.73	23.02	9.84	9.30	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
7	SK40	第24回-12	40.79	3.78	12.39	19.04	胴部	打割調整	楕円形	長軸に一致
8	SK49	第24回-13	36.52	24.35	9.42	7.30	胴部	研磨	楕円形	長軸に一致
9	SK43	第24回-13	46.09	47.27	14.75	33.20	胴部	打割調整	方形	長軸に一致
10	SK43	第24回-14	38.88	25.57	11.22	9.48	胴部	研磨	楕円形	長軸に一致
11	SK45	第24回-11	22.84	39.27	7.78	8.12	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
12	SK45	第24回-12	24.07	36.18	9.63	10.92	胴部	研磨	楕円形	長軸に一致
13	SK46	第24回-2	30.01	20.44	8.67	7.40	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
14	SK48	第24回-8	38.51	21.21	10.67	12.18	胴部	打割調整・研磨	長方形	長軸に一致
15	SK48	第24回-9	33.07	26.28	10.08	9.98	胴部	打割調整	楕円形	長軸に一致
16	SK52	第26回-5	42.69	29.72	10.81	14.22	胴部	研磨	楕円形	長軸に一致
17	SK56	第28回-22	29.57	19.58	9.92	7.26	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
18	SK56	第29回-6	49.31	33.00	9.56	19.66	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
19	SK56	第29回-9	56.41	40.01	15.11	38.74	底面	打割調整	楕円形	長軸に一致
20	SK68	第30回-5	42.36	39.10	12.14	23.84	胴部	研磨	長方形	長軸に一致
21	SK69	第30回-7	39.28	39.00	10.19	14.36	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
22	SK71	第31回-1	38.91	28.18	9.01	11.92	胴部	研磨	楕円形	長軸に一致
23	SK79	第31回-18	29.51	23.14	9.94	9.32	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
24	SK79	第31回-19	37.75	31.36	12.37	13.12	胴部	打割調整	楕円形	長軸に一致
25	SK80	第31回-18	60.53	36.41	14.11	31.36	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
26	SK82	第33回-14	42.54	38.10	11.90	25.10	胴部	打割調整	長方形	長軸に一致
27	SK82	第33回-16	42.68	32.51	12.69	23.94	胴部	打割調整	不正長方形	長軸に一致

国神遺跡 石器一覧表

番号	遺構番号	回数番号	器種	計測値(cm)			重量	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
1	SK05	第18回-6	磨石	3.793	5.692	3.269	117.0	砂岩	欠損
2	SK14	第20回-20	磨石	7.510	8.161	4.719	315.0	安山岩	欠損
3	SK22	第21回-4	磨石片	110.93	40.79	24.31	220.0	閃緑岩	欠損
4	SK22	第21回-5	磨石片	84.68	14.10	11.31	49.0	輝緑岩	欠損
5	SK22	第21回-6	磨石片	87.96	19.93	10.90	32.0	カンラン岩	欠損
6	SK25	第22回-10	磨石片	4.844	3.143	1.586	39.5	石英安山岩	欠損
7	SK27	第22回-6	磨石	9.352	6.720	3.579	318.0	石英安山岩	欠損
8	SK30	第23回-10	磨石	4.617	11.367	7.363	289.0	安山岩	欠損
9	SK31	第23回-6	磨石	3.526	4.720	1.477	31.5	砂岩	欠損
10	SK44	第25回-1	磨石	11.024	6.432	3.146	297.5	砂岩	欠損
11	SK66	第27回-23	磨石片	12.806	5.306	3.259	381.0	角閃片岩	欠損
12	SK60	第28回-16	打製石片	9.615	3.980	1.643	86.5	緑泥片岩	欠損
13	SK60	第28回-16	磨石	12.359	8.824	4.561	66.8	砂岩	欠損
14	SK60	第28回-17	磨石	6.709	7.627	3.834	242.0	石英斑岩	欠損
15	SK64	第27回-3	磨石	6.813	5.978	3.304	187.0	石英安山岩	欠損
16	SK65	第29回-10	磨石片	9.107	5.697	3.548	239.0	角閃片岩	欠損
17	SK71	第31回-2	磨石	9.192	4.608	2.377	140.0	乾粒岩	欠損
18	SK79	第31回-20	打製石片	9.045	5.160	1.331	82.0	ホルンフェルス	欠損
19	SK79	第31回-21	磨石	7.913	4.548	2.395	119.0	安山岩	欠損
20	SD01	第4回-16	磨石片	11.895	4.546	2.847	238.0	凝灰岩	欠損
21	表形	第4回-19	磨石片	10.577	5.702	2.992	265.0	ホルンフェルス	欠損
22	表形	第4回-20	磨石片	5.735	4.470	3.023	109.5	砂岩	欠損
23	Si03	第34回-21	磨石片	5.951	4.504	2.420	113.0	安山岩	欠損
24	表形	第34回-22	磨石片	5.522	3.940	1.465	52.5	閃緑岩	欠損
25	Si05	第34回-23	磨石片	5.545	2.920	1.813	98.58	砂岩	欠損
26	表形	第34回-24	磨石片	2.764	3.219	1.157	14.18	石英斑岩	欠損
27	Si03	第34回-25	小形磨石片	3.613	1.904	1.109	12.72	凝灰岩	欠損
28	Si05	第34回-26	石棒	6.586	5.292	3.974	208.3	凝灰岩	欠損
29	SK74	第34回-27	石皿	7.963	7.980	5.063	314.5	安山岩	欠損

国神遺跡 中・近世陶磁器 土器観察表

探出番号	発掘 番号	器種名	単位:cm(単位)			形状・形態	胎土	色調	備考
			口径	底径	高さ				
第48図8	SK37	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図9	SK86	土師質土器 小皿	—	5.0	1.0	口ケリ、四転糸切刃	石英・長石 (5YR7/6)	褐色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図10	SK01	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図11	SK01	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR3/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図12	SK01	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図13	SK01	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図14	SK01	土師質土器 内耳瓶	—	20.0	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図15	SK03	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒色粒子・石英・ 長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図16	SK05	常滑 土師質土器 内耳瓶	—	—	—	ヘラナデ	石英・長石 (10YR)	褐色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図17	SK05	土師質土器 内耳瓶	20.0	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図18	SK05	土師質土器 内耳瓶	—	13.0	19.0	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR3/2)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図19	SK05	土師質土器 内耳瓶	20.0	9.4	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	黒色 (15世紀～16世紀前半)	
第48図20	SK05	土師質土器 皿	—	6.4	1.8	口ケリ、四転糸切刃	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/4)	褐色 (13～14世紀)	
第48図21	SD01	瀬戸・美濃 瀬戸瓦	11.0	5.6	4.4	口ケリ・縁・華文文	新土(乳白色)	灰行透明 19世紀後半	
第48図22	SD01	丹波 加賀	—	8.0	1.7	紐通り、見込唇部 散花、内面刷毛	石英・長石 (5YR4/3)	灰白色 近世前期	
第48図23	SD03	吉野戸 土師	—	6.0	0.6	口ケリ、四転糸切刃	石英・長石 (2.5YR)	褐色 中世	
第48図24	SD03	土師質土器 皿	—	6.8	2.4	口ケリ、縁糸切刃	黒帯・チャート・ 石英・長石 (5YR)	灰褐色 近世・中世 (15世紀～16世紀前半)	
第53図1	SB02	吉野戸 土師	—	—	(4.0)	口ケリ	石英・長石(灰赤)	灰赤 中世	
第53図2	SB02	土師質土器 皿	24.0	—	3.9	口ケリ	石英・長石 (7.5YR6/2)	赤褐色 (15世紀前半～14世紀後半)	
第53図3	SB02	土師質土器 皿	10.0	3.0	3.1	口ケリ、四転糸切刃	石英・長石	明赤褐色 (2.5YR5/8)	近世・中世(15～16世紀)
第53図4	SB02	土師質土器 皿	—	5.0	0.9	口ケリ、四転糸切刃	黒帯・石英・長石 (5YR2/6)	褐色 近世・中世(15～16世紀)	
第53図9	SK06	瀬戸 土師	—	3.8	—	口ケリ	石英・長石 (5YR)	灰赤 中世	
第53図10	SK06	常滑 土師	—	3.8	—	ナデ	黒色粒子・石英・ 長石 (2.5YR6/2)	灰褐色 中世(15世紀前半)	
第53図11	SK06	常滑 土師	—	—	—	ナデ	黒色粒子・石英・ 長石 (7.5YR5/3)	赤褐色 中世	
第53図12	SK06	常滑 土師	—	—	—	ナデ	石英・長石 (10X5/2)	赤褐色 中世	
第53図13	SK06	常滑 土師	—	—	—	ナデ	黒色粒子・石英・ 長石 (7.5YR4/3)	赤褐色 中世	
第53図14	SK06	常滑 土師	—	—	—	口ケリ	黒色粒子・石英・ 長石 (7.5Y4/1)	赤褐色 中世	
第53図15	SK06	常滑 土師	—	—	—	口ケリ	黒色粒子・石英・ 長石 (10R4/4)	赤褐色 中世	
第53図16	SK06	土師質土器 小皿	—	—	—	口ケリ	黒帯・石英・長石 (5YR7/8)	褐色 近世・中世	
第53図17	SK06	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・石英・長石 (7.5YR3/2)	褐色 近世・中世 (15世紀～16世紀前半)	
第53図18	SK06	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・黒色粒子・ 石英・長石 (10YR2/1)	褐色 近世・中世 (15世紀～16世紀前半)	
第53図19	SK06	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・石英・長石 (10YR2/1)	褐色 近世・中世 (15世紀～16世紀前半)	
第53図20	SK06	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・石英・長石 (10YR2/1)	褐色 近世・中世 (15世紀～16世紀前半)	
第53図21	SK06	土師質土器 内耳瓶	—	—	—	内外面ヘラナデ	黒帯・石英・長石 (10YR3/1)	褐色 近世・中世 (15世紀～16世紀前半)	
第53図22	SK06	土師質土器 小皿	8.0	4.0	1.9	口ケリ、四転糸切刃	黒帯・石英・長石 (7.5YR3/2)	褐色 (15～16世紀)	
第53図23	SK06	土師質土器 皿	14.0	6.0	3.3	口ケリ、四転糸切刃	黒帯・石英・長石 (10YR3/4)	褐色 (13～15世紀)	
第53図24	SK06	土師質土器 皿	—	3.4	1.2	口ケリ、四転糸切刃	石英・長石・ 又土質	赤褐色 (13～14世紀)	
第53図25	SK06	土師質土器 皿	—	3.4	1.8	口ケリ、四転糸切刃	黒帯・石英・長石	赤褐色 (7.5YR8/6)	
第53図26	SK06	土師質土器 皿	—	6.0	1.0	口ケリ、四転糸切刃	石英・長石	褐色 近世・中世 (13～14世紀)	
第53図27	SK06	土師質土器 皿	—	—	—	口ケリ	石英・長石 (5YR4/3)	褐色 近世～近代	

# 写真図版

1. 国神遺跡遠景

2. 調査区全景  
(中央区・西から)3. 調査区全景  
(南区・南から)



1. 調査区全景  
(西区・北から)



2. 調査区全景  
(北西区・北から)



3. 旧石器文化層試掘グリッド



1.SK01 · 06 2.SK05 3.SK07 4.SK09 5.SK10 6.SK12 7.SK14 8.SK15 · 16



1



2



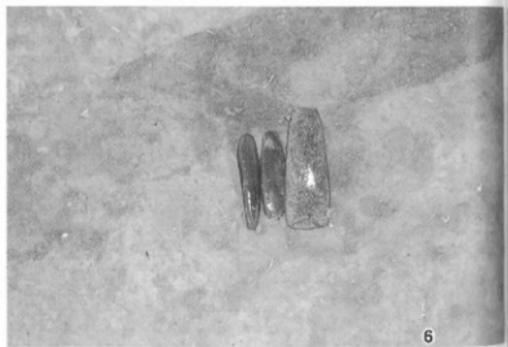
3



4



5



6



7



8



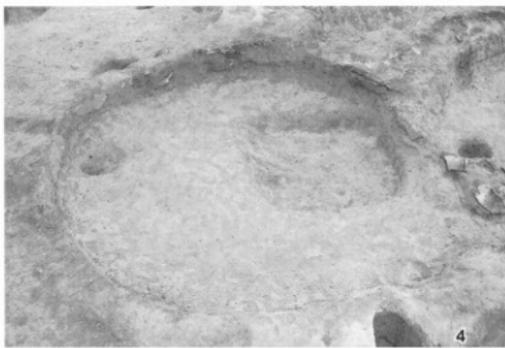
1



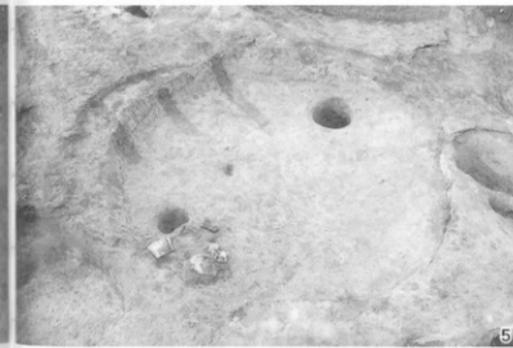
2



3



4



5



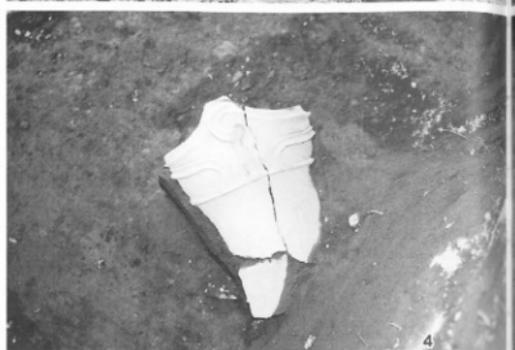
6



7



8





1

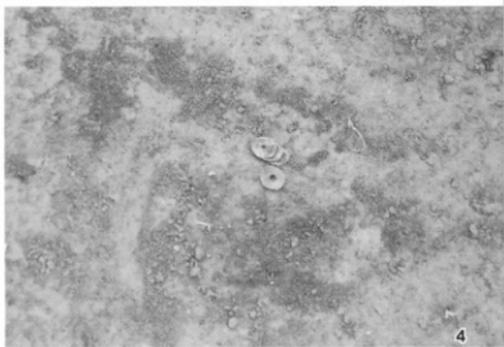


PL.7

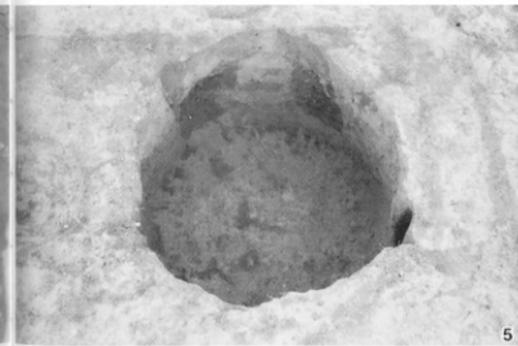
2



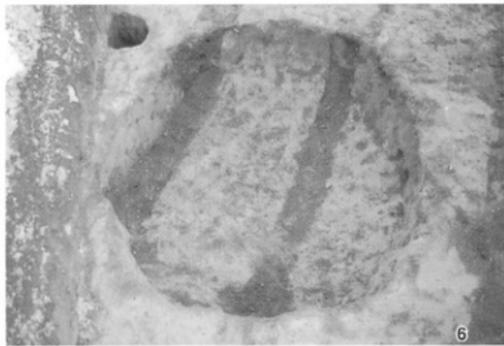
3



4



5



6



7

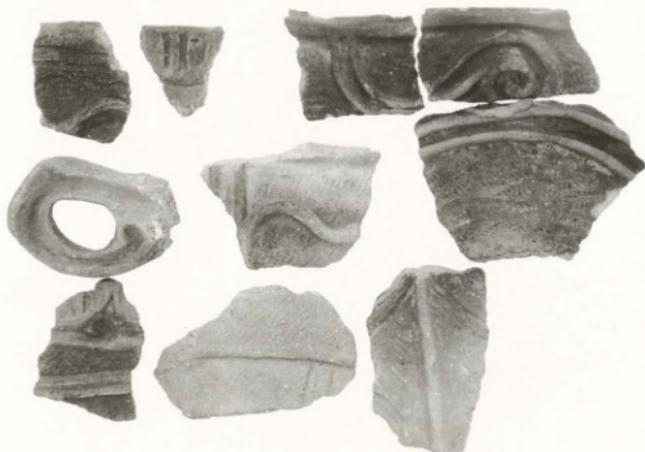


8





1. SK07出土土器



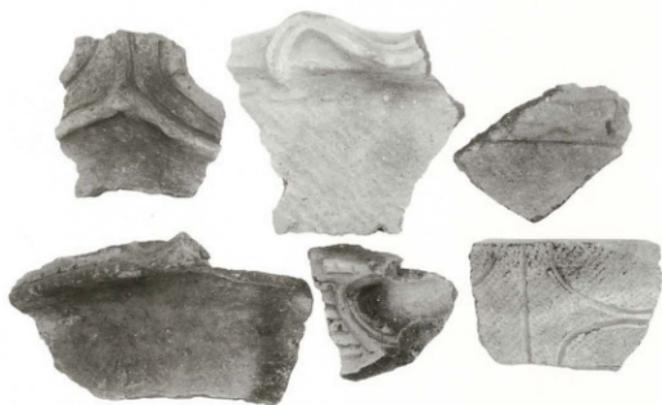
2. SK09出土土器



3. SK14出土土器



1. SK22出土土器



2. SK30出土土器



3. SK31出土土器



1. SK40 (1~3)  
SK41 (4~7)  
出土土器



2. SK49出土土器



3. SK52出土土器



1. SK60出土土器



2. SK56出土土器



3. SK67出土土器



1. SK69出土土器



2. SK78出土土器



3. SK79出土土器



1. SK80出土土器



2. SK81出土土器



3. SK82出土土器



1. 土坑出土石器片種



2. 土坑出土石器類



3. 土坑その他出土石器類



1



2



3



4



5



6



7



8

住居跡S102 (1)  
住居跡S103 (1~10)  
住居跡S104 (11・12)



9



10



11



12



1. 住居跡SI04

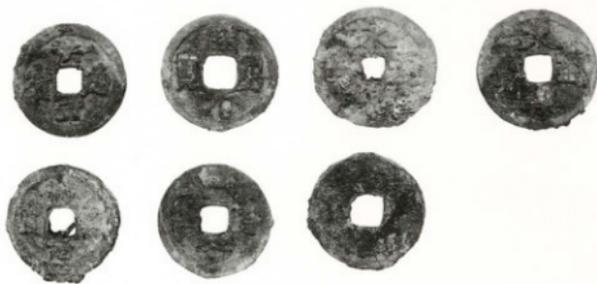
2. 擬立柱建物SB02  
出土遺物 (1)3. 土坑・竪穴状遺構出土遺物  
1.SK36 2.SK86  
3~7.SX01 8.SX03  
9~12.SX05



1. 掘立柱建物SB02



2. 段切り状遺構SX07出土遺物



3. SK32出土銭貨

## 報告書抄録

ふりがな	なめかたくにかみいせきはくつちようさほうこくしよ							
書名	行方市国神遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	小川和博・大淵淳志・蓮藤啓子・大淵由紀子・大野美佳							
編集機関	有限会社 日考研茨城 〒300-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1							
発行機関	行方市教育委員会							
所在地	〒311-1704 茨城県行方市山田2175 TEL.0291-35-2907							
発行年月日	2006年3月31日							
収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
国神遺跡	行方市行方字国神 1830, 1833	421	071	36度 2分 34秒	140度 5分 25秒	2005.12.01 ～ 2006.02.10	1,250㎡	市道(碑)1-7号線道路改良工事に伴う発掘調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国神遺跡	集落跡	縄文時代 奈良平安時代 中世	竪穴住居跡4軒(縄文時代1軒、奈良・平安時代3軒)、土坑92基(縄文時代82基、中世30基)、竪穴状遺構4基(中世)、地下式坑2基(中世)、溝状遺構3条(中世)、土壘墓4基(中世)、独立柱建物跡3棟		縄文時代(早・中期)、土師器、須恵器(奈良・平安時代)、陶磁器、土師質土器(カワラケ・内耳跡)、石製品(打製石斧・磨製石斧・磨石類・砥石)、土製品(土器片・土板)、瓦、人骨、獣骨(ウマ)		縄文時代中期、奈良・平安時代の集落で、とくに縄文時代中期の土坑群は注目される。また中世の集落跡であったことも新発見である。	

## 国神遺跡発掘調査報告書

---

平成18年(2006)3月20日 印刷  
平成18年(2006)3月31日 発行

発行	行方市教育委員会 茨城県行方市山田2175	TEL. 0291-35-2907
編集	行方市教育委員会 有限会社 日考研茨城 茨城県稲敷市佐倉3321-1	TEL. 029-892-1112
印刷	有限会社 田辺印刷 茨城県稲敷市佐倉3321-5	

---